シェイクスピアの世界

（ハムレットⅢ）

ハムレットⅢ

（上巻）

序

さて、今回の『シェイクスピアの世界』（ハムレットⅢ）上巻という作品は、第一幕と第二幕とを統合したものであるが、この作品の「目的と特徴」は、次のようなものである。

まず、そもそも「本を読む」というのは、一体、どのようなことになるのだろうか？　若い頃に読んだ『ゲーテとの対話』の中に、晩年のゲーテは、「……みなさんは、本の読み方を学ぶには、どんなに時間と労力がかかるかを御存知ない。私は、そのために八十年を費やしたよ。しかし、まだ今でも目的に到達しているとは言えないな」と語っている。この「言葉」が、なぜか自分の「頭の中」（或いは「心の中」）にずっと残っていて、どのような「本の読み方」であれば、まさにベストの「本の読み方」になるのだろうか？　と、考えるともなく考えて来たような気がするのである。

例えば、一般に、読書というのは、本に書かれている「文章」（言葉）を目で追い読み進めながら、その表面的な「意味や内容或いは物語（ストーリー）」などがひと通り分かれば、それでもう「本を読んだ」ことになっているかと思うが、しかし、それは、「本を読んだ」というよりは、むしろ「本に目を通した」だけであり、「本を読む」とは、すなわち、「深く読む」ことであり、それゆえ、各人それぞれがどのくらい深くまで「厳密に深く読めているのか？」が、まさにその人の本を読む「力量」ということになるかと思う。

そして、私が得た結論は、必ず、「テキスト」（本文）を見ながら、その「本文」の一字一句をできるだけ丁寧かつ厳密に深く読み解いていくことが、まさにベストの「本の読み方」になるのではないかと思い、そのような「記述方法」を採用しているのであり、この「作品」をただ目で追って読み進むだけでは、恐らく、なあんだで終わってしまうのであり、文字通り、この「作品」の一字一句をできるだけ丁寧かつ厳密に読み進んでもらえれば、恐らく、今までに経験したことのないような、まさに『ハムレット』という作品の「本文」の一字一句がはっきりと実感として理解でき得ているかと思う次第であり、特に『ハムレット』に興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成三十一年三月吉日（決定版）

如月翔悟

目　次

ハムレット　Ⅲ

はじめに

第一幕

第一場……エルシノア城の城壁の上
第二場……城内会議の大広間
第三場……ポローニアス邸の一室
第四場……城の城壁の上
第五場……城壁の下の空地

第二幕

第一場……ポローニアス邸の一室
第二場……城内拝謁の間

第三幕

第一場……拝謁の間の廊下
第二場……城内の広間
第三場……拝謁の間の外（そと）
第四場……王妃の居間

第四幕

第一場……王妃の居間（しばし後のこと）
第二場……城内の別の一室
第三場……城内の別の一室
第四場……デンマークのある港に近き平野
第五場……前の時より数週間を経過す
第六場……城内の別の一室
第七場……城内の別の一室

第五幕

第一場……墓場
第二場……城内大広間

※　参考文献

シェイクスピアの世界

（ハムレットⅢ）

ハムレットⅢ

（第一幕）

さて、今回は、シェイクスピアの世界（ハムレットⅢ）の「第一幕」になるが、その内容は、次のようなものである。――まず、第一場では、深夜十二時に、歩哨の「フランシスコ」から「バーナード」へと夜警が交代になると共に、そのあとすぐに「マーセラスとホレーシオ」の二人もやって来る。そして、衛兵のマーセラスという人は、「……ホレーシオは、僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言って、てんで信じようとしない。だから、今夜はぼくたちと一緒に、一分一秒もようく見張して、また亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たって連れてきた」と言う。すると、ハムレットの親友（学友）でもある「ホレーシオ」という人は、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と言うが、しかし、実際に、先王の「亡霊」が出現するに及んでは、それを認めざるを得ないとしても、一体、何のために出現するのかという「疑問」へと話題は移行していく。……そして、今夜、ここで見たことは、すべて「王子ハムレット」に知らせようということになるのである。

＊　　　＊

次に、第二場は、先王の「崩御」から約二月後の今日が「戴冠式」の帰りとあり、そして、今、会議の大広間で、「戴冠式」後の新「国王」としての最初の「挨拶」をしているところである。とにかく、「葬儀」から「婚儀」へは、余りに慌ただしく行なわれたとあり、特に、先王の「崩御」からわずかの間に、先王の王妃（母親）は、ハムレットに言わせれば、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いがあると思っていた「叔父」（クローディアス）と結婚してしまったと孤独悩み苦しむのである。また、国外では、ノルウェーの若輩の「フォーティンブラス」という人は、父が失った「領土」を腕ずくで奪還しようとしている。そこで国王の「親書」を携えた「二人の使者」を、老いた「ノルウェー王」のところへと派遣することになる。また、内大臣（ポローニアス）の「息子」（レアティーズ）という人は、「……フランスへもどらして頂きたい」と願い出て、それが国王に快く受け入れられる。最後は、ハムレットであるが、国王は、「……なぜ、そなたの顔に相変らず曇がかかっているのか？」と聞く。そして、国王は、「……父親が先立つのは普通のこと、お前も無益な悲しみを投げ捨てて、わしをほんとうの父と思ってくれ。お前はわしの王位継承者であること、そして、ウィッテンベルクへ再び留学したいという志は、どうか思い留まってほしい、妃（母親）も「そう願いますよ」と言うので、ハムレットは、「……はいはい、母上のおおせに従います」と応えると、国王も王妃も、その言葉を聞いて、晴れやかに退場して行く。……その後、先王の「亡霊」を見た、三人、特にハムレットの親友（学友）の「ホレーシオ」という人は、「……殿下、じつは昨夜（深夜一時に）、夜警中、あの城壁の上で『先王の亡霊』を見たのです」と正直に告げると、ハムレットは、大いに関心を示して、「……今夜はぼくも夜警に立とう。もしかしたら、また現れるかも知れない」と言うと、ホレーシオは、「……必ず出るに相違ありません」と応えるのであった。

＊　　　＊

次は、第三場であるが、内大臣（ポローニアス）の息子（レアティーズ）の登場であり、彼は、留学先のフランスへと戻ることになり、「……もう手廻りの品々は積込んだ。じゃ、

さよなら……」と言い、「……それからハムレットがお前にいい加減なお愛想をいっているようだが、ありゃ血の気の多い若い者がだれでもやる手で、気まぐれだと思ったらよい。それ以上のものではないよ。……しかも、生れが生れ故に、自分勝手に切盛りの出来ない方なのだ。うっかりあの人の恋の歌に耳を貸し、愛を捧げたり、大事な操を、みだらな口説に投げ出したら、それこそお前の名誉がどんなに傷つくか考えてみるがいい。ねえ、オフィーリア、恐ろしいことだよ。世間の悪口の毒矢からは逃れられないもの。だから警戒するがよい。万全の策は用心にある」と言うのであった。そこに父親（ポローニアス）が登場して、今度は、息子（レアティーズ）へのまさに「餞別の言葉」になるが、そのあと、ポローニアスは、「……王子が近頃よく、お前の所へお忍びで、お前の方も、えろう気前よくお迎えして、お相手になっているそうだな。（中略）、しかし、これからは、処女の身として出しゃばらず、少しつつましやかにするがよい。……今後は、みだりに、ちょっとでも、ハムレット王子に言葉をかけたり、語ろうては相成らぬぞよ。よいか、きっと申渡して置くぞよ」と言うと、オフィーリアは、「……おとう様の仰せ通りに致します」と言うのであった。

＊　＊

さて、第四場は、城の「城壁」の上、ホレーシオとマーセラスそれにハムレットの三人は、寒々とした「深夜十二時」に、一方の小塔から登場する。そして、深夜十二時を過ぎたので、そろそろ亡霊が例によって出歩く頃だと話し合っていると、そこに突然、まさに先王の「亡霊」が現われるのであった。そこで、ハムレットは、「……さても、なんじは天の善魂か、地獄の悪魂か！　天の霊気か、地獄の毒気か？　目的が悪意であれ親切であれ、物言いたげな姿して来るとは不思議。さ、なんじにもの問うて見る。……さあ答えよ。如何なれば、死して棺に納められ、儀式通りに葬られた遺骸が、墓衣を破って出たのか？　何故あって、安らかになんじを埋葬した墓が、その重い大理石の口を開けて、再びなんじを吐き出したのか？　しかばねとなったなんじが再び甲冑に全身を固めて、月は雲間から洩れ光る、このような深夜に、どういうわけだ？　その理由を言え！　われわれはどうしたらよいのか？」と問う。すると、先王の「亡霊」は、無言で、ハムレットに向かって「手招き」をする。連れの「二人」は、「危険だから」と強く反対するが、ハムレットは、それを振り切ってまで、その先王の「亡霊」について行くのであった。

＊

さて、第五場は、いよいよ先王の「亡霊」が、その恐るべき「死の真相」を自ら語るという、まさに一つの「クライマックス」場面であるが、それは、まず、先王の「亡霊」は、ハムレットを「城の外」の誰も居ない「空き地」へと連れ込むと、ハムレットは、「……おい、どこへ連れて行くつもりか？　もうこれ以上、ついて行かないぞ」と言うと、亡霊は、「……（振り返って）よく聞け」と言う。ハムレットは、「……うむ、聞こう」と答えると、亡霊は、「……われこそはなんじの父の霊なるぞ。（中略）、わしは庭で昼寝の際、へびにかみ殺されたと発表され、デンマークの全国民の耳も、このような虚言ですっかりだまされているが、じつは、お前の父をかみ殺したへびは、現に今、父の王冠を頂いているのだぞ」と言う。ハムレットは、「……やっぱり、虫の知らせが当っていたか！　叔父めが！」と言う。亡霊は、「……そうだ。あの畜生にも劣った不倫の男が、奸智と反逆の腕を振って、わしの貞淑に見えた妃の心を、奴の恥ずべき欲望へと折れさせてし

まった」のだと言う。しかし、もう夜明も近い、手短かに話そう「……わしは午後のいつもの習いで、庭で寝ていた。その油断に乗じてお前の叔父は、のろわしい劇薬を小びんに入れて忍び寄り、らい病のように肉を腐らすその液体をわしの耳の孔へ注ぎ込んだのだ。そして忽ちわしの滑かな膚はらい病のように全身かさぶたにおおわれてしまった。そのようにして、わしは仮寝の間に、弟の手にかかって『生命も王冠も王妃』も一時に奪い去られてしまったのだ」と言う。だから、ハムレットよ、この「わしのことを忘れるな」(Remember me)、そして、必ず、わたしの「敵討ち」（つまり「復讐」）を果たして欲しいと語るのであった。

如月翔悟

平成三十一年三月吉日（決定版）

ハムレットⅢ

（第一幕）

ハムレット Ⅲ

さて、今回の「シェイクスピアの世界」（ハムレットⅢ）という作品は、今までの「ハムレットⅠ」と「ハムレットⅡ」のいわば続編であるとともに、今までは『ハムレット』全体の中のある部分を抜き出し考察した「内容説明」であり、それゆえ、いわゆる「ハムレット」全体の「内容」が一体どのようになっているのかは、あまり記述されていない不十分なものであり、それゆえ、今回は、いわゆる「ハムレット」の全体像（その最初から最後までの「本文」）を丁寧に読み辿りながら、その「本文」の内容を順に読み解いてみたいと思う次第であり、それは、まず、次のような「冒頭」から始まるものである。

第一幕

第一場　エルシノア城の城壁の上

深夜、城壁の上、歩哨の「フランシスコ」は、大身槍を携えてあちこちと歩いている。そこにもう一人、交代のために同じように身を固めた衛兵の「バーナード」がやって来る。彼は暗がりの中に歩哨の「フランシスコ」の足音を聞いて、はっと驚く。……

＊　＊

まず、「冒頭」の場面、はっと驚いた衛兵（バーナード）が、「誰だ？」と叫ぶと、歩哨（フランシスコ）も、「……お前こそ誰だ！　止まれ、名乗れ」と叫び合う。衛兵（バーナード）は、「国王万歳！」と叫ぶと、歩哨（フランシスコ）は、「バーナードか？」と聞く。「そうだ」と応えると、「……きっちり時間通りに来てくれたな」と言う。すると、「……今十二時が鳴ったばかり。フランシスコ、お休み」と言う。「……この交代はかたじけない。身にしみる寒さで、気がめいってくる」と言うと、「……見張り中は別状なかったか？」と聞く。「……ねずみ一匹でなかった」と応える。「……では、お休み、わしの見張りの相棒のホレーシオとマーセラスに出会ったら、急いでやって来るように言ってくれ給え」と言うのであった。（本文）

この場面は、深夜十二時の「見張り」交代の通常の場面ではあるが、通常ではないのは、すぐに「マーセラスとホレーシオ」の二人が新たに登場することである。

――ホレーシオとマーセラスがやってくる。――

歩哨（フランシスコ）は、「……やって来た気配がする。おい、止まれ、誰だ？」と叫ぶと、ハムレットの親友でもある「ホレーシオ」は、「この国の味方の者」と叫び、もう一人の衛兵（マーセラス）も、「デンマーク王に忠節を誓った者」と叫ぶ。すると、歩哨の「フランシスコ」は、「……では諸君、ご無事で」と告げ、衛兵（マーセラス）は、「……では、さようなら。誰が君と交代したのか？」と聞くので、歩哨の「フランシスコ」は、「……バーナードが変わってくれた。では諸君、ご無事に」と告げて、退場する。（本文）

＊　＊

さて、ここからは「三人」（バーナードとマーセラスそれにホレーシオ）の三人の「会話」になっていくが、それは、次のようなものである。――まず，マーセラスが、「おい、バーナード！」と言うと、バーナードは、「……おお、ホレーシオも一緒か？」と聞くので、ホレーシオは、「まあ、そうだな…」と言い、バーナードは、「……ホレーシオ、ようこそ。マーセラスもようこそ」と挨拶し合ったあと、衛兵（マーセラス）は、「……して、例の物は今夜も現われたか？」と聞くので、同じ衛兵の「バーナード」は、「……まだ何も見ていない」と告げる。すると、マーセラスは、「……ホレーシオは、僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言って、てんで信じようとしない。だから、今夜はぼくたちと一緒に、一分一秒もようく見張して、また亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たって連れてきた」と言う。すると、ハムレットの親友でもある「ホレーシオ」は、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と応じる。一方、衛兵の「バーナード」は、「……まあ、しばらく腰を下ろしましょうや。そうして、ぼくらが二晩続けて見たものを、とくと説明して、要害堅固に僕らの話を聞こうとしない君の耳を、もう一度攻撃しましょう……」と言う。ホレーシオも、「……じゃ、腰でも下ろして、バーナードの話を聞こうかな」となり、すると、バーナードが、「……つい昨夜のこと、北斗星の西に見える、ほら、あの星が、ちょうど今輝いているあの天の一角に来た時だった。マーセラスとぼくとは、丁度鐘が一時を打ち鳴らすその途端に――」と言いかけると、そこに、まさに「亡霊」が現われるのであった。

――亡霊現る。頭から足の先まで甲冑で身を固め、大元帥の指揮杖を携う――

まず、マーセラスが、「……しっ、黙って、見給え、あそこへまた出て来た！」と言うと、バーナードは、「……崩御された王様そっくりのお姿で」と言い、マーセラスは、「……ホレーシオ、君は学者だから、あれに話かけてみなさい」と言う。バーナードも、「……なんと王様そっくりでしょう。よく見て下さい」と言う。ホレーシオは、「……確かに、よく似ている。恐ろしさと不思議さで、ぼくの心はかき乱れて来る」と言う。バーナードは、「……何か言って貰いたがっている」と言うと、マーセラスも、「……ホレーシオ、何か言ってやって下さい」と言う。そこで、ホレーシオは、「……なんじ何者なるか、恐れ多くも、亡きデンマーク王陛下が、かつて戦に出でました際の、凛々しいおんいでたちを装うて、かような深夜に出没するとは、天に代わってなんじに命じる、ものを言え」と叫ぶ。すると、マーセラスは、「……不機嫌そうな顔になった」と言い、バーナードは、「……あれ！　行ってしまう」と言う。ホレーシオは、「……待て！　口をきけ、ものを言え。命令だ！」と叫ぶが、先王の「亡霊」は、何も言わず退場してしまう。（本文）

＊　＊

さて、ここまでの四人の「登場人物」について考えてみたいと思うが、まず最初は、歩哨の「フランシスコ」であるが、この「人物」も、まさに「衛兵」であり、そして、その「衛兵」というのは、ある場所に（武装して）立ち、敵などを見張る兵士のことであり、今、まさに夜中の十二時まで一人で「見張り」をする任務を遂行していたのである。そこに深夜十二時以降の「見張り」の交代要員として同じように武装で身を固めた「バーナード」

がやって来るのである。この「バーナード」という人も、「衛兵」という設定になっているので、歩哨の「フランシスコ」とも、身分的には同じことになるかと思うが、そして、すぐにも「マーセラス」と「ホレーシオ」の二人も登場することになるのである。

さて、ここで考慮すべきことは、まず、なぜ「三人」は、一緒にやって来なかったのかという問題であるが、それは、次のようなことである。――つまり、深夜十二時以降の「見張り」の交代要員として、「バーナード」という人物は、その任務を誠実に遂行するためにも、その「時間」をまず厳守したということである。そして、「……わしの見張りの相棒のマーセラスとホレーシオに出会ったら、急いでやって来るように言ってくれ給え」と言っている。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、二人がすぐ来るのか、それとも、遅れて来るのか、それがよく分からない情況なのである。それは、「二人」（つまりバーナードとマーセラス）とが、二晩続けて見た「先王の亡霊」の話を「ホレーシオ」という人にいくら話をしても、それを全く信じようとしないのである。つまり、「……ホレーシオは、僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言って、てんで信じようとしない。だから、今夜はぼくたちと一緒に、一分一秒もようく見張して、また亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たって連れてきた」と言うと、ホレーシオという人は、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と言うのである。つまり、ホレーシオは、この話を全く信じてはおらず、それゆえ、マーセラスの「誘い」（深夜一緒に亡霊を見ること）にも全く興味が持てないところを、マーセラスという人は、「先王の亡霊」をホレーシオに何が何でも見せようとして、わざわざ無理にでも連れて来ているのである。……

そして、「ホレーシオ」という人物を連れて来る、もう一つの理由は、「……亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たって連れてきた」と言うのである。つまり、「……一つは、亡霊が出たことを認めてもらうために、そして、もう一つは、その亡霊に話しかけてもらうため」にこそ、わざわざ連れて来ているのである。それでは、なぜ「ホレーシオ」なのか？　それは、次のようなことである。――まず、ホレーシオという人物は、ハムレットの親友であり、また、学友でもあるが、主人公のハムレットというのは、ドイツの「ヴィッテンベレグの大学」に留学していて、今は、先王（父親）の突然の「崩御」のために、急遽、デンマークへ戻っているのであるが、その大学の学友でもある「ホレーシオ」が、まさに先王の「葬儀」などを拝観するために、わざわざデンマークへと来ているのである。しかも、その「大学」というのは、いわば「神学校」であり、それゆえ、ハムレットの学友でもある「ホレーシオ」という人物は、大学で「神学や哲学」などを本格的に学んでいる人物にもなるのである。

ところで、衛兵（軍人）の「二人」（バーナードとマーセラス）という人たちは、先王の「亡霊」に対して、たった一言も「話しかけよう」としていない。そして、先王の「亡霊」に「話しかける」のは、すべて「ホレーシオ」に任されている。むろん、そのために「連れて来た」のである。――つまり、衛兵（軍人）である「マーセラス」という人は、「……ホレーシオ、君は学者だから、あれに話かけてみなさい」と言っている。この「学者」というのは、つまり、「ホレーシオ」という人物は、大学で「神学や哲学」などを専門的に学び研究している人であり、当時、亡霊は他人から話しかけられないと、自分からは話し出すことは出来ないと信じられていて、しかも、ラテン語の一種の呪文によっての

みその祟りを祓うことが出来ると考えられていたらしく、それゆえ、「ラテン語」を知っている「ホレーシオ」をたって連れて来ているのである。だからこそ、先王の「亡霊」に「話しかける」のは、すべて「ホレーシオ」に任されているのである。そして、「ホレーシオ」は、実際に、「……なんじ何者なるか、恐れ多くも、亡きデンマーク王陛下が、かつて戦に出でました際の、凛々しいおんいで立ちを装うて、かような深夜に出没するとは、天に代わってなんじに命じる、ものを言え」と叫ぶと、先王の「亡霊」は、なぜか「不機嫌そうな顔になった」とある。これは、非常に面白いところであり、その「理由」は、先王の「亡霊」がぜひとも話をしたい相手は、「ホレーシオ」などではなく、まさに「ハムレット」ただ一人だけに話がしたいのである。だからこそ、「ホレーシオ」が何を言おうとも、先王の「亡霊」は、何も言わずにさっさと退場して消えてしまうのである。——亡霊の退場——

　すると、衛兵のマーセラスは、「……行ってしまった。答えようとしない」と言うと、バーナードは、「……ホレーシオ！　どうかしましたか？　あなたは青くなってふるえていますよ。どうです、これは錯覚以上のものじゃないですか？　どうお考えです？」と聞くので、ホレーシオは、「……僕のこの目がまのあたりに、今、確かに見なけりゃ、ぼくはこんなものを神にかけて信じられない」と言うのであった。すると、マーセラスも、「……王様そっくりでしょうがな」と言う。ホレーシオは、「……君が君自身に似ているように、王様が野心家のノルウェー王と一騎打の勝負をされた時、身にまとわれた甲冑が、丁度今のようであった。さっき顔をしかめられた様子も、丁度かつて談判破裂の挙句、氷の張りつめた上で、そりに乗ったポーランド軍を打ちのめされた時とそっくりだった。不思議なことがあるものだ」と、先王の「亡霊」の出現をどうにも認めざるを得ないとしても、それでは、一体、何のために出現するのかという「疑問」へと移行していくのである。

　そして、マーセラスは、「……前二度ともこの通り、丁度夜が死んだように更ける今時分になると、ぼくらの見張っているそばを、いかめしい歩調で通られたのである」と言うと、ホレーシオは、「……どういう風に考えていいか知らないが、僕の大体の見当では、この国にとって何か不吉なことが勃発する前兆だ」と言うのであった。マーセラスは、「……どうです。腰をおろしましょうよ。そして、分っている人は話して下さい。一体、なんの為にこの国の人たちは、かような厳重極まる夜警で毎晩苦しむのか、またなんの為に毎日あのように真鍮を鋳て大砲を作ったり、武器を外国から買入れるのか、なんの為に舟大工をあんなに駆り集めて、日曜日も労働日も働かせるのか、あのような汗水流してあわただしく、夜昼かせぎ通すなんて、一体、何事が始まるのだろう？　だれか教えてくれる人がいますか？」と聞く。（本文）

＊　＊

　これは、まさに、今、デンマークが置かれている政治的・軍事的「情況」がどのようなものであるかを、この芝居を観ている観客たちにいわば説明しているのであり、それに対して、ハムレットの親友（ホレーシオ）が、次のように詳しく答えるのである。

　つまり、「……ぼくが教えてあげよう。少くも、世間のうわさはこうである。たった今生写しが現れた先君は、御存じの通り、虚栄的な競争心に駆られたノルウェーのフォーテ

ィンブラスにいどまれ、一騎打ちの勝負をなすった。その果し合いで、剛勇な御気象と世間のうわさの高かったハムレット王は、このフォーティンブラスを見事打ち果たされた。そしてこの者は、騎士道のおきてに照らして誓もし調印もした契約書によって、生命とともに彼の所有した領土をことごとく、征服者へ喪失してしまった。その契約に対しては、こちらの王様も十分なものを賭けられた。それはフォーティンブラスが勝利者とさえなったなら、彼の手に落ちたであろうに。実際は、その契約書につづられた条文の趣意に従って、彼のものがハムレット王の手に落ちたのだ。ところが、君、息子の当主フォーティンブラスは、まだうぶな癖に血気にはやって、ノルウェーの国境のあちこちで、向こう見ずの無頼漢多ぜいを、何事か太っ腹な冒険を企て育てる為に、やたらに飲み込んでいるのです。それはほかでもない。父親があのように失った土地を腕ずくで無理無体に奪回しようというので、それはこちらにはよく見えすいていることです。われわれの軍備の主な動機も、この夜警の原因も、早馬を駆るような、あわただしい国内の騒ぎの元も、みんなこれだとぼくは思う」と言う。（本文）

＊

さて、その本文を「要約」すると、それは、かつて「先王」（ハムレット王、ハムレットの父親）は、虚栄的な競争心に駆られたノルウェー王のフォーティンブラスに挑まれて、まさに「一騎打ち」の勝負をしたが、その「勝負」に勝って、（契約書通り）、ノルウェー王の「生命」とその「領地」を手に入れることになった。ところが、息子の当主フォーティンブラス（父親と同じ名前の息子）は、まだうぶな癖に血気にはやって、ノルウェーの国境のあちこちで、向こう見ずの無頼漢多ぜいを集めて、父親があのように失ったその「土地」を腕ずくで無理やりにも奪回しようとしているので、それに備えて、今、デンマークでは、まさに「軍備増強」を行なっている最中になるのである。

＊

すると、バーナードも、「……ぼくも多分それに違いないと思う。この不吉な亡霊が、昔も今もこういう戦争の原因となっている。あの王様そっくりの甲冑姿で、見張のわきを通るということが、無事に納まればよいが……」と言う。――つまり、昔も今もこういう戦争の原因を生み出しているのは国王であり、その国王（先王）そっくりの「亡霊」が甲冑姿で現われるということ自体、ただごとではなく、何か不吉な「前ぶれ」であり、それゆえ、何も起こらず無事で納まればよいがとなるのである。

すると、ホレーシオも、「……確かに、塵一つ入っても心の眼を悩ますものだ。栄華を極めたローマでも、あの偉大なジュリアス・シーザーが倒れた前夜は、墓という墓は空となり、墓衣を纏った死人たちは、ローマの町をただならぬ金切り声をあげ、わけの分からぬことをわめいてさまよったものだ。……星は火のしっぽを引き、血の露を降らし、太陽はむしばまれ、また、その引力で大海原の領土を支配する月も、この世の終わりが来たとばかり真暗になってしまった。それと同じように、この国の人々に対し、恐ろしい事件が相次いで起こる前兆、つねに運命に一歩先んじて来る前ぶれ、やがて来たるべき凶事の序曲として、まさに天地きそっての天変地異が起っているのではないか」と言う。（本文）

＊

つまり、何か「大事件」が起こるような前には、何か「亡霊」が現われたり、また、天地がきそってその国の人々に「前ぶれ」を示すのであり、例えば、あの偉大なジュリアス

・シーザーが倒れた前夜も、墓という墓は空となり、墓衣を纏った死人（亡霊）たちは、ローマの町をただならぬ金切り声をあげ、わけの分からぬことをわめいてさまよったものだ。また、星は火のしっぽを引き、血の露を降らし、太陽はむしばまれ、また、引力で大海原を支配する月も、この世の終わりが来たとばかり真暗になってしまった。そのように何か不吉なことが起る「前兆」（前ぶれ）として、天地がきそってその国の人々に前もって知らせるのである。それと全く同じように、今回の先王の「亡霊」の出現も、まさに何か不吉なことが起る「前兆」（前ぶれ）と、ハムレットの親友（ホレーシオ）は、そのように考えているのである。すると、「……おや！　静かに。見給え、あそこへまた出て来た」と言うのである。――亡霊再び現る。

　すると、ホレーシオは、「……たたりでこの身がどうなろうと、あれの来る道に立ちふさがってやろう。（両腕をひろげる）。これ、待て、まぼろし、なんじもし音声を出し、ものが言えるなら、わしにものを言え。何かなんじの功徳になり、わしも幸福になれるような良いことが出来るなら、さあ言え。なんじもしこの国の運命の秘密に通じ、それが前もって知ることによって避けられるものなら、さあ言ってくれ。それとも、なんじが生前に横領した財貨を大地のお腹にうずめ匿したことがあるなら、そのことを言え。なんじら亡者はそういうものに未練があって、死後も折々迷うて出歩くという話だ。（鶏が鳴く）、うせるな、ものを言え。マーセラス、とめてくれ給え」と言う。（本文）

＊　＊

　さて、ここは「神学や哲学」などを専門に学んでいる「ホレーシオ」ならではの「話しかけ」であり、衛兵（軍人）の「バーナードやマーセラス」などでは恐らくできないような「質問」を問いかけているのである。――まず、なんじもし音声を出し、ものが言えるなら、わしにものを言え。と呼びかけて、一つは、何かなんじの功徳（良いこと）になり、わしも幸福になれるような良いことが出来るなら、さあ言え。次に、なんじもしこの国の運命の秘密に通じ、それを前もって知ることによって避けられるものなら、さあ言ってくれ。そして、もう一つは、それとも、なんじが生前に横領した財貨を大地のお腹にうずめ匿したことがあるなら、そのことを言え。となる。この「問い」かけは、恐らく、「神学」で「亡霊」が出る時には大体こういう「理由」が多いので、それを「問い」かけているのではないかと思う。もちろん、最後の「……生前に横領した財貨を大地のお腹にうずめ匿したことがあるなら、そのことを言え」というのは、「……なんじら亡者はそういうものに未練があって、死後も折々迷うて出歩くという話だ」ということからである。もちろん、先王の「亡霊」にしてみれば、見当外れもはなはだしく、また、夜明けも近いということで、先王の「亡霊」は、何も言わずに再び退場しようとしているのである。

　すると、マーセラスは、「……この大身槍で打ってやろうか？」と言い、ホレーシオは、「……立ちどまらなけりゃ、打って見給え」と言う。バーナードは、「や、ここへ来た！」、ホレーシオも、「や、ここへ来た！」と言い、マーセラスは、「……行ってしまった！」と言う。（亡霊消える）。あのように王者の威厳を備えたものに、手荒な真似をするのは、われわれの方が悪い。あれは空気のように、刃が立たぬ不死身のもの。打ってかかっても甲斐はなく、やっても真似事に過ぎぬ」と言うと、バーナードは、「……あれがものを言

おうとした途端に雄鶏が時を告げたのだ」と言う。ホレーシオも、「……そして、その時、怖ろしい呼出状を受けた罪人のように、はっと飛び上った。雄鶏という夜明けを知らせるらっぱ手が、あのかん高い音色を出して、日の神の眼を覚ますと、海のなか、火のなか、地上、空中を問わず、迷い出てうろつく魔物はあわてて自分の領分へ逃げかくれると聞いたが、今の奴がこの話のまことを証明してくれたわけだ」と言う。

　すると、マーセラスも、「……あれは雄鶏が鳴くと直ぐ消え失せた。救世主の降誕が祝われる季節に近づくと、夜明の鳥は夜もすがら唱って、魔物も出て来ないということだ。その頃の夜は出歩いても安全で、星も人にたたらないし、妖精もとりつかない。魔女も通力を失う。その季節はそれほど清められ祝福されているのだ」と言う。すると、ホレーシオは、「……ぼくもそういう話を聞いているし、話半分には信じてる。だが、ちょっと見給え。茜色の衣を纏うたあけぼのが、向うの東の小高い丘の露の上を歩いている。さあ、われわれの夜警も解散しよう。そうして今夜見たこと何もかも、王子ハムレットに知らそうじゃありませんか？　ぼくのいのちにかけて言うが、あの亡霊はぼくらにこそ口をきかないけれども、王子にはものをいいますよ。では、諸君、王子に知らせることは、ぼくらの友情からも必要であり、また義務でもあるとして、ご賛成でしょうか」と言うと、マーセラスは、「……是非そうしたいものです。丁度ぼくは、けさ、ごく都合よく王子に会える場所を知っています」と言うのであった。（本文）

＊　＊

　それでは、今までの第一場の「全体の内容」を簡単に振り返ってみたいと思うが、まず、深夜十二時に、夜警の交代があり、歩哨の「フランシスコ」から「バーナード」へと夜警が交代になると共に、そのあとすぐに「マーセラスとホレーシオ」の二人もやって来る。そして、マーセラスは、「……ホレーシオは、僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言って、てんで信じようとしない。だから、今夜はぼくたちと一緒に、一分一秒もようく見張して、また亡霊が出たら、ぼくらの目が確かだったことを認めて、一つ亡霊に話しかけて貰おうと、たって連れてきた」と言うと、ハムレットの親友（学友）でもあるホレーシオは、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と言うのであった。ところが、実際に、先王の「亡霊」が出現するに及んでは、それをどうにも認めざるを得ないとしても、それでは、一体、何のために出現するのかという「疑問」へと話題は移行していく。そして、ホレーシオが、先王の「亡霊」にいくらどのように話しかけても、先王の「亡霊」は、一言も全く言葉を発しようともしない。

　ところが、夜明けも近くなった頃、「……あれがものを言おうとした途端に雄鶏が時を告げた。すると、その時、……怖ろしい呼出状を受けた罪人のように、はっと飛び上った。雄鶏という夜明けを知らせるらっぱ手が、あのかん高い音色を出して、日の神の眼を覚ますと、海のなか、火のなか、地上、空中を問わず、迷い出てうろつく魔物はあわてて自分の領分へ逃げかくれると聞いたが、今の奴がこの話のまことを証明してくれた」と言う。――例えば、有名な「ドラキュラ」なども「日光」を嫌って逃げ隠れるのである。そして、夜が明けると共に夜警を解散して、「……今夜見たこと何もかも、王子ハムレットに知らそうじゃありませんか？　ぼくのいのちにかけて言うが、あの亡霊はぼくらにこそ口をきかないけれども、王子にはものをいいますよ」という展開になっていくのである。

　さて、今までは「亡霊」の出現などなかったのに、なぜ、ここ「三夜」続けて先王の「亡

霊」が出現するようになったのか？　それは、先王の「実の弟」（クローディアス）と先王の王妃（ガートルード）との、まさに「戴冠式」があるからである。というのも、この「戴冠式」の裏には、実に恐るべき「事実」が隠されているのであり、その「事実」を王子（ハムレット）だけに知らせるためにこそ、先王の「亡霊」は、まさに「三夜」連続で出没しているのである。そして、夜明け近く、「……あれがものを言おうとした」とあるが、それは、恐らく、王子（ハムレット）をここに連れて来るようにということであり、それを察知したかのように、ハムレットの親友（学友）でもあるホレーシオは、「……今夜見たこと何もかも、王子ハムレットに知らそうじゃありませんか？　ぼくのいのちにかけて言うが、あの亡霊はぼくらにこそ口をきかないけれども、王子にはものをいいますよ」となっていくのである。

＊　　＊（第一幕第一場・終了）

第二場　城内会議の大広間

第二場　城内会議の大広間

さて、ラッパの吹奏のうちに、国王クローディアス、妃ガートルード、大臣ら、ならび内大臣（ポローニアス）とその息子のレアティーズ、また、ノルウェーへの特使ヴォルティマンドとコーネリアス。一同盛装して、戴冠式の帰りといういでたちで、最後に喪服姿の王子ハムレット、伏目勝ちにて登場。王および妃、王座の踏み台を上がる。

まず、国王は、「……兄君崩御の記憶はまだなまなましく、みながこころを悲しみにゆだね、全国民が一つに眉をひそめて嘆くのは誠にもっとものこと。だがわしは分別をもって自然の情と闘い、王をしのんで悲しむとともに、おのれの本文を忘れまいと務めてきた。それゆえに、わしは、かつての姉を妃とし、この武勇の国の王位をわかち合うことにした。それは傷ついた喜びであった。言わば喜びと悲しみとを等分に量って、片目はほほえみ片目は泣きながら、葬儀は歓喜の調べを、結婚は挽歌を奏しながらすませたようなものだった。またこのたびの婚儀とても、そちたちの分別ある知恵を斥けて挙げたわけではなく、みなが終始この問題には無条件に賛成してくれた。それに対しては、深く感謝しますぞ。次にみなも知る通り、若輩のフォーティンブラスは余の実力を侮ってか、それとも兄君の崩御でこの国が分裂混乱しているとでも思うてか、この夢のような勝味を空頼みして、案の定、使いをうるさくよこし、彼の父が契約に従って余の勇敢無比の兄君にとられて失った領土を明け渡せと催促しおる。だがその件はそれだけにして、次は余自身の問題と、かように集まって貰った当面の問題に移ろう。即ち、かの若輩フォーティンブラスの叔父に当たるノルウェー王は近頃老衰して床に就いたままで、甥のこの企てを一向に知らず、しかも自分の国民の中から大軍の動員が行われているのであるから、この書面には、甥のこの行動を取り抑えるよう、認めて置いた。それで、この親書をノルウェー王へ持参する使者として、コーネリアス、また、ヴォルティマンド、お前たち両名を派遣することにする。しかし、先方の王と折衝するお前たちの権限は、ここに委細認めてある条文の範囲を超えてはならない。さあ、速やかに無事に使命を果して、功を立てるがよいぞ」と言う。すると、廷臣の「コーネリアスとヴォルティマント」は、「……何もかも仰せ通りに勤めを果しまする」と申し上げると、国王（クローディアス）は、「……いささかも疑いはしない。では、無事にな」と告げ、ヴォルティマントとコーネリアスの二人は退場する。（本文）

＊　＊

さて、国王（クローディアス）の冒頭の「挨拶」であるが、それは、堂々として実に見事であり、先王の突然の「崩御」により、全国民が深い悲しみにうち沈むのはもっともではあるが、一方、「……わしは分別をもって自然の情と闘い、王をしのんで悲しむとともに、一方、おのれの本文を忘れまいと務めてきた」とある。――まず、ここで考慮すべきことは、それは、「葬儀」と「婚儀」と「戴冠式」のこの「三つ」の関係であり、先王の突然の「崩御」により、最初は、当然、「葬儀」が厳粛の内に行なわれたかと思うが、それがいつかは判然としないが「約二月」ぐらい前。そして、先王の「崩御」から約二月ぐらい後の今日が「戴冠式」の帰りとなるかと思う。そして、今、会議の大広間で「戴冠式」後の新「国王」としての最初の「挨拶」をしている場面である。その場合、「葬儀」と「婚儀」

と「戴冠式」のこの「三つ」は、一体、どのような関係になるのかと問えば、とにかく、「葬儀」から「婚儀」へは、余りに慌ただしく行なわれたとなっている。特に、先王の「崩御」からわずかの間に、先王の王妃（母親）という人は、ハムレットに言わせれば、（……一月もたたない内に）、――アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いがあると思っていた「叔父」（クローディアス）と結婚してしまったのである。

　一方、国王（クローディアス）は、先王の王妃（ガートルード）との「婚姻」については、「……一方では、王をしのんで悲しむとともに、一方では、自分の本文を忘れまいと務めてきた。それゆえに、わしは、かつての姉を妃とし、この武勇の国の王位をわかち合うことにした」とある。――これは、この国の主権を担う先王の王妃と「結婚する」ことによって、国家（権力）を自分一人だけで「独占する」のではなくて、この武勇の国の「王位」（権力）を二人で「わかち合う」ことにした、そのための「結婚」だと言いたいのである。――それは、「悲しみに沈んだ喜び」であり、「……喜びと悲しみとを等分（五分五分）に量って、片目はほほえみ、片目は泣きながら、葬儀は歓喜の調べを、結婚は挽歌を奏しながらすませたようなものだった」とある。これは、「葬儀」の中にも「喜び」が入り交じり、また、「婚儀」の中にも「悲しみ」が入り交じった、まさに「……喜びと悲しみとが五分五分に入り交じった複雑な感情」を以って、ことは行なわれたことになる。だとすれば、「葬儀」と「婚儀」（結婚式）とはほとんど同時かそれに近い感じで行なわれたことになる。しかも、その「婚儀」とても、「……そちたちの分別ある知恵を斥けて挙げたのではなく、みなが終始この問題には無条件に賛成してくれた」からだと、みなの前では婚礼の「正当性」をことさらに主張（強調）しているが、むろん、実際は、先王を密かに毒で「殺害」をして、まさに「王位とその生命と先王の妃」とを一気に略奪した「戴冠式」後の「挨拶」になっているのである。……

　さて、次は、若輩の「フォーティンブラス」のことであるが、彼は、「……余の実力を侮ってか、それとも兄君の崩御でこの国が分裂混乱しているとでも思うてか、この夢のような勝味を空頼みして、案の定、使いをうるさくよこし、彼の父が契約に従って余の勇敢無比の兄君にとられて失った領土を明け渡せと催促しおる」とある。それに対して、国王（クローディアス）は、「……かの若輩フォーティンブラスの叔父に当たるノルウェー王は近頃老衰して床に就いたままで、甥のこの企てを一向に知らず、しかも自分の国民の中から大軍の動員が行われているのであるから、この書面には、甥のこの行動を取り抑えるよう、認めて置いた」とあり、その「親書」をノルウェー王へ持参する使者として、お前たち両名（コーネリアスとヴォルティマンド）を派遣し、「……速やかに無事に使命を果して、功を立てるがよいぞ」ということであり、これは、実に見事の対応であり、まさに「最善の策」を取ったということである。

　次に、国王は、「……さて、次は、レアティーズ、何か変ったことでもあるのか？　何か願い事があると言うたが、それはなんだ？　道理のあることを王に申し出て、聞き入れられない事はないぞ。お前が所望するたいていの事は、所望ではなくて、わしの方から進上したい程だが、それは一体何事なのだ？　デンマークの王座とお前の父上との関係は、頭と心よりもっと近しく、手が口の用を務める以上に密接な仲だ、一体何を所望するのだ？」と聞く。すると、レアティーズは、「……恐れながら、フランスへもどらして頂き

とうございます。私はこのたびの戴冠式に参列致しまする為に喜んでデンマークに帰国いたしましたが、やはり、じつは、この勤めを終りますと、フランスがまた恋しく、思いをひかれますので、陛下のお許しをひとえにお願いいたします」と言うのであった。

　すると、国王は、「……父上の許しは出たのか？　ポローニアスはどう言った？」と聞くので、ポローニアスは、「……陛下、せがれめはさんざねだりおって、私の渋々の許しを無理やりに取りましたのでございます。とうとうあれの強情に折れて、いやいやながら賛成の判を押してやりました次第ゆえ、どうかお聞き届けに相成りますよう私からも願い申上げます」と言う。王は、「……ではレアティーズ、まあ愉快に遊んで来るがよい。時はお前のもの、気ままに使うがいいが、せいぜい立派に修業を積んで来なさい。それはそうと、わしの甥のハムレット、わしの息子は……」となっていくのである。（本文）

＊　＊

　さて、今度は、内大臣（ポローニアス）の「息子」（レアティーズ）の問題であるが、彼は、父（ポローニアス）同様、国王（クローディアス）からの信頼も非常に厚く、「……お前が所望するたいていの事は、所望ではなくて、わしの方から進上したい程であるが、お前の願い事とは一体何なのだ？」と聞く。すると、内大臣（ポローニアス）の「息子」（レアティーズ）は、「……恐れながら、フランスへもどらして頂きとうございます。私はこのたびの戴冠式に参列致しまする為に喜んでデンマークに帰国いたしましたが、やはり、じつは、この勤めを終りますと、フランスがまた恋しく、思いをひかれますので、陛下のお許しをひとえにお願い申上げる次第でございます」と言うのである。

　すると、国王は、「……父上の許しは出たのか？　ポローニアスはどう言った？」と聞くので、ポローニアスは、「……陛下、せがれめはさんざねだりおって、私の渋々の許しを無理やりに取りましたのでございます。それゆえ、どうかお聞き届けに相成りますよう私からも願い申上げます」と言うので、国王は、「……ではレアティーズ、まあ愉快に遊んで来るがよい。時はお前のもの、気ままに使うがいいが、せいぜい立派に修業を積んで来なさい」と、快く送り出してくれるのである。……

　一方、国王（クローディアス）は、悩みのたねの一つ、「……わしの甥のハムレット、いやさ、わしの息子は……」と言うと、ハムレットは、「……（傍らを向いて）親類以上だが、情愛は親類以下のくせに」と呟く。国王は、「……なぜ、そなたの顔に相変らず曇がかかっているのだ？」と聞く。ハムレットは、「……いや、陛下、ぼくは日向の青天井に居過ぎますよ」と言う。すると、妃は、「……ねえ、ハムレット、夜のような暗い曇りを払いのけて、もっと親しみの眼差しを国王にお向けなさい。土になられたおとうさまを、いつまでもそんな伏目勝ちに、恋しがるものじゃないことよ。人の常ではありませんか、生きてる者が一度は死ななければならないことは？　それは生身の生涯を経て永遠の世界に入るのですわ」と言う。ハムレットは、「……そりゃ、お母さん、世の常に違いないですよ」と言う。妃は、「……それなら、なぜあなただけが、それにむずかしくこだわっていなさるような風をしているのです？」と聞く。ハムレットは、「……ような風？　お母さん、違う！　僕のはほんものですよ。ような風なんて、ぼくには出来ない。この真黒な外とう、また世の習いのしかつめらしい喪服、わざとらしい吐息溜息、眼から流れる涙の川、しょげた顔付、その他悲しみのあらゆる様式や姿をあつめたって、そんなものだけ

では、ぼくのほんとうの気持をよく現してくれないんです。確かに、それらは『ような風』のもの、だれにでもやれる芝居でさ。悲しみの飾りや衣装に過ぎないものです。けれどぼくの心の中には、そんな眼に見えるものでは現わせないものがあるんです」と言う。

　すると、国王は、「……ハムレット、おとうさんにそのような哀悼を捧げるのは、子たる者として、誠に美しい、立派な態度じゃ。けれど、よくわきまえねばならないことは、お前のおとうさんは、またそのおとうさんを亡くし、そのおとうさんも、また、御自分のおとうさんを亡くしておられる。そしてあとに残された者はつねに、親孝行として、一定の期間悼み悲しんで喪に服する義務がある。しかし、がん固にいつまでも悲観に暮れるのは、よくない強情というものだ。めめしい嘆きだ。神に対し素直でない我意というものじゃ。道心堅固ならざる者じゃ。だだっ子じゃ。教育のない愚か者じゃ。だって、お前、どうしても仕方がないこと、日常最もありふれたことに、小ざかしく逆って、心をいためる必要はないじゃないか？　くだらない！　まったく神に対し、死者に対し、自然に対して罪悪じゃ。道理に少しも耳を貸さぬがん迷というものじゃ。父親が先立つのは普通のこと、はじめてしかばねとなった人間から今日死んだ者に至るまで、『これが定めだ』と、いつも道理は叫んで来た。お前も無益な悲しみを地に投げ打って、わしをほんとうの父と思ってくれ。お前はわしの王位継承者であること、そして、わしは実の父親が子供に抱く愛情に劣らぬ慈愛をもってお前を愛するということを、世間によく見て貰いたいのだ。それから、ウィッテンベルクへ再び留学したいというお前の志は、わしの最も好まぬところ、どうかまげてこの国に留まって、わしたちの慈愛の眼になぐさめられ、はげまされて、わしの側臣のもっとも重きをなす者、親身の者、かついとしの息子となっておくれでないか？」と言う。妃も、「……ハムレット、お母さんのお願いを無にしないで頂戴。どうぞわたしたちのそばに留まって、ウィッテンベルクには行かないでね」と言う。すると、ハムレットは、「……はいはい。つとめて母上のおおせに従いまする」と言うのであった。

（本文）

＊　＊

　さて、いよいよ主人公（ハムレット）の登場であるが、まず、「……（傍らを向いて）親類以上だが、情愛は親類以下のくせに」と呟く。これは、何かと問えば、それは、まさにハムレットの「心の声」なのである。――つまり、国王とハムレットとの関係、それは、まさに「……義父であるので、親戚以上だが、一方、情愛（ハムレットを思う本音）は、親類以下のくせに」となるのである。そして、国王（クローディアス）は、「……なぜ、そなたの顔に相変らず曇がかかっているのだ？」と聞く。それは、先王の死後、約二月前後も、ずっと「ハムレットの顔に曇がかかっている状態が続いている」からである。すると、ハムレットは、「……いや、陛下、ぼくは日向の青天井に居過ぎますよ」と言う。

　さて、これには幾つかの「解釈」があり、例えば、「……晴れやかすぎる光の中に」ということで、いわば「恵まれた環境」に居過ぎて「食傷気味」であるとか、また、国王（叔父）から息子呼ばわりされて迷惑であるとか、或いは、「……青空の下で寝起きする家なき流浪の身の上」ということで、叔父に王座を奪われ、ハムレットは、自分をいわば貧しい「乞食」同様の境遇とあてつけて見ている、その他、そのようなものである。

　すると、王妃は、「……ねえ、ハムレット、夜のような暗い曇りを払いのけて、もっと親しみの眼差しを国王にお向けなさい。土になられたおとうさまを、いつまでもそんな伏

目勝ちに、恋しがるものじゃないことよ。人の常ではありませんか、生きてる者が一度は死ななければならないことは？　それは生身の生涯を経て永遠の世界に入るのですわ」と言うのである。それは、まさに「その通り」であり、それゆえ、ハムレットも、「……そりゃ、お母さん、世の常に違いないですよ」と言う。すると、王妃は、「……それなら、なぜあなただけが、それにむずかしくこだわっていなさるような風をしているのです？」と聞く。これは、当然の「問いかけ」であり、一体、どうしてなのだと、誰もが聞きたくなるところである。それは、次のようなことである。――つまり、心から愛する先王の突然の死、それがまさに「腑に落ちない」のである。何かおかしいという感じであり、しかも、「葬儀」から「婚儀」へが余りにも早過ぎるという感じ、それは、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いがあると思っていたその「叔父」（クローディアス）と何と結婚をしてしまい、しかも、その半人半獣のような叔父に喜んで身をゆだねている母親の存在への不信、そのようなものがハムレットの「心の中」にはっきりとあるからこそ、まさに「……ハムレットの顔にずっと曇がかかっている状態が続いている」のである。

それ故に、ハムレットは、次のように言うのである。つまり、「……ような風？　お母さん、違う！　僕のはほんものですよ。ような風なんて、ぼくには出来ない。この真黒な外とう、また世の習いのしかつめらしい喪服、わざとらしい吐息溜息、眼から流れる涙の川、しょげた顔付、その他悲しみのあらゆる様式や姿を集めたって、そんなものだけでは、ぼくのほんとうの気持をよく現してくれないんです。確かに、それらは『ような風』のもの、誰にでもやれる芝居でさ。悲しみの飾りや衣装に過ぎないものです。けれどぼくの心の中には、そんな眼に見えるものでは現わせないものがあるんです」と言うのである。

すると、国王は、「……ハムレット、おとうさんにそのような哀悼を捧げるのは、子たる者として、誠に美しい、立派な態度じゃ。けれど、よくわきまえねばならないことは、お前のおとうさんは、またそのおとうさんを亡くし、そのおとうさんも、また、御自分のおとうさんを亡くしておられる。そしてあとに残された者はつねに、親孝行として、一定の期間悼み悲しんで喪に服する義務がある。しかし、がん固にいつまでも悲観に暮れるのは、よくない強情というものだ。めめしい嘆きだ。神に対し素直でない我意というものじゃ。だって、お前、どうしても仕方がないこと、日常最もありふれたことに、小ざかしく逆って、心をいためる必要はないじゃないか？　くだらない！　まったく神に対し、死者に対し、自然に対して罪悪じゃ。父親が先立つのは普通のこと、はじめてしかばねとなった人間から今日死んだ者に至るまで、『これが定めだ』と、いつも道理は叫んで来た」と言うのである。――これは、まさに「その通り」であり、永遠に変わりようのない「真理」ではあるが、それゆえ、ハムレットにしても、心から愛する「先王」の突然の死、それが十分に納得のいくようなものであれば、ハムレットとしても、その先王の「死」を素直に受け入れることはでき得たのである。ところが、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）に生じて来た様々な「疑念や不信」などがはっきりとあるからこそ、心から愛する「先王」の突然の死を、そのまま素直に受け入れることができ得ずにいるのである。

一方、国王は、「……父親が先立つのは普通のこと、はじめてしかばねとなった人間から今日死んだ者に至るまで、『これが定めだ』と、いつも道理は叫んで来た。お前も無益な悲しみを地に投げ打って、わしをほんとうの父と思ってくれ。お前はわしの王位継承者であること、そして、わしは実の父親が子供に抱く愛情に劣らぬ慈愛をもってお前を愛す

るということを、世間によく見て貰いたいのだ。それから、ウィッテンベルクへ再び留学したいというお前の志は、わしの最も好まぬところ、どうかまげてこの国に留まって、わしたちの慈愛の眼になぐさめられ、はげまされて、わしの側臣のもっとも重きをなす者、親身の者、かついとしの息子となっておくれでないか？」と言うのであった。

　例えば、国王に、「……お前も無益な悲しみを地に投げ打って、わしをほんとうの父と思ってくれ。お前はわしの王位継承者であること、そして、わしは実の父親が子供に抱く愛情に劣らぬ慈愛をもってお前を愛する」といくら言われても、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）には叔父（クローディアス）に対する様々な「疑念や不信」などがはっきりとあるのであり、それゆえ、国王のそのような「言葉」をいくら聞かされても、そのまま素直に受け入れることはでき得ないのである。また、国王の「……ウィッテンベルクへ再び留学したいというお前の志は、わしの最も好まぬところ、どうかまげてこの国に留まってほしいということ」、また、王妃も、「……ハムレット、お母さんのお願いを無にしないで頂戴。どうぞわたしたちのそばに留まって、ウィッテンベルクには行かないでね」という、この「再び留学する」ということだけは、ハムレットは、「……はいはい。つとめて母上のおおせに従います」と素直に従っているが、しかし、「……わしたちの慈愛の眼になぐさめられ、はげまされて、わしの側臣のもっとも重きをなす者、親身の者、かついとしの息子となっておくれでないか？」ということに関しては、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）でははっきりと強い「拒絶反応」を示しているのである。

＊　＊

　さて、国王は、ハムレットの「……はいはい。つとめて母上のおおせに従います」という言葉を聞いて、「……これは、またとない色よい返事でうれしいぞ。デンマークに留まって、わし同様に王者のように振舞いなさい。さあ、妃、ハムレットが素直に心よく承諾してくれて、わしも愁眉が開けてうれしいわい。その心祝いに、今日デンマーク王が挙げる祝杯は、一つ一つ、大砲を曇の上に打ち上げて、われわれの賀宴を知らせよう。天もデンマーク王の乾杯に木魂して、地上のとどろきに答えさせよう。さあ、行こう」と晴れやかに退場していくのである。……

　ラッパの吹奏のうちに、ハムレット一人を除き一同退場していく……

　さて、ハムレットは、「……ああ、このあまりにも汚れた肉体が溶けて崩れて、一しずくの露となったらいいのに。それとも、自殺を罪とするおきてなどを、神がきめなければよかったのに。あゝ、ああ！　この世の有様は何もかも面白くない。つまらない、味気ない、生き甲斐がない。あゝいやだ、いやだ、雑草の生え放題、世にもあさましい醜草どもに完全に占領されている。ああ、こんなことになろうとは！　亡くなってからわずか二月。いや、まだ二月もたっていない。あんなすぐれた王様。あれとこれとは、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いだ。お母さんの顔に風がきつく当ることさえ気にされたほど愛情のこまやかな方だったのに。ああ！　思い出すのもいやだ、お母さんは食べる程食欲が募りでもしたように、おとうさま（の愛情）にかじりついていたものだ。それが、なんだ、一ヶ月もたたないうちに。もう思うまい。弱き者よ、汝の名は女なり！　やっと一ヶ月、ナイオビのように全身涙にかきくれて、おとうさまの亡骸を送って行かれた時の靴がまだ

古くもならない内に、あのお母さんが、叔父さんと結婚してしまった。ああ、理性の力を持たない獣でさえ、もう少し長く喪に服したろうに、兄弟とは言うものの、このおれとヘラクレスのように似てもつかない人と、しかも一月もたたない内に。偽の涙の塩が泣きただれた目元にまだ赤い色をとどめている内に結婚してしまった。破倫の床へあのように素早く急いで行くなんて、全くけしからん罪の早業だ！　よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ！　しかし、待て、この胸が張りさけても、おれは黙ってなければならぬわ」と言うのであった。（本文）

＊　＊

さて、この場面は、非常に有名な「場面」であり、それゆえ、その一つ一つを丁寧に考えてみたいと思うが、まず、「……ああ、このあまりにも汚れた肉体が溶けて崩れて、一しずくの露となったらいいのに、それとも、自殺を罪とするおきてなどを、神がきめなければよかったのに」とある。これは、いかにもハムレットの「自殺願望」のように思われがちであるが、しかし、決してそうではなく、それは、例えば、実際に首を吊って死のうとか、また、高い所から実際に飛び降りて死のうとか、あるいは、実際に自分の胸を短刀で刺して死のうとか、その他、そのように実際に具体的に「自殺」を考えているというのではなく、そうではなくて、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）には様々な「疑惑や不信」などがあって、ハムレットは、そのために「自分の心」を実に様々に「悩まし苦しめてい」て、もう何もかもが嫌になって、いっそ死にたいという一般的な心理に近く、それは、まさに「相対的な感情」（気分）であり、決して具体的な「自殺願望」とは違うのである。次に、「……ああ、この世の有様は何もかも面白くない。つまらない、味気ない、生き甲斐がない。あゝいやだ、いやだ、雑草の生え放題、世にもあさましい醜草どもに完全に占領されている」とある。これは、例えば、国王や王妃などをはじめ、この世の「有様」は、まさに「雑草の生え放題」（碌でもない人間たち）で満ち、しかも、世にもあさましい醜草ども（俗悪ども）に完全に占領されている。だからこそ、「……この世の有様は、何もかも面白くない。つまらない、味気ない、生き甲斐がない」となるのである。そして、ハムレットの「心の中」をそういう「気分」にしている、まさにその直接の「原因」が次に語られているのである。それは、次のようなものである。

　つまり、「……ああ、こんなことになろうとは！　亡くなってからわずか二月。いや、まだ二月もたっていない。あんなすぐれた王様。それは、アポロンの神と半人半獣の怪物ほどの違いであり。お母さんの顔に風がきつく当ることさえ気にされたほど愛情のこまやかな方だったのに。ああ！　思い出すのもいやだ、お母さんは食べる程食欲が募りでもしたように、おとうさま（の愛情）にかじりついていたものだ。それが、なんだ、一ヶ月もたたないうちに。もう思うまい。弱き者よ、汝の名は女なり！　やっと一ヶ月、ナイオビのように全身涙にかきくれて、おとうさまの亡骸を送って行かれた時の靴がまだ古くもならない内に、あのお母さんが、叔父さんと結婚してしまった。ああ、理性の力を持たない獣でさえ、もう少し長く喪に服したろうに、兄弟とは言うものの、このおれとヘラクレスのように似てもつかない人と、しかも一月もたたない内に。偽の涙の塩が泣きただれた目元にまだ赤い色をとどめている内に結婚してしまった。破倫の床へあのように素早く急いで行くなんて、全くけしからん罪の早業だ！　よくないことだ、断じてよいことにはならないぞ！　しかし、待て、この胸が張りさけても、おれは黙ってなければならぬわ」となる

のである。そして、これこそは、まさにハムレットの「憂鬱」の直接の原因にもなっているものである。

ちなみに、「葬儀」と「婚儀」と「戴冠式」との「関係」であるが、それは、次のようになるかと思う。――つまり、「葬儀」（それは「わずか二月ぐらい前に」）→「婚儀」（それは「一月もたたない内に」）→「戴冠式」（それは「約二月ぐらい後の今日」）になるのである。

――ホレーシオ、マーセラスおよびバーナードの登場となる――

まず、ホレーシオは、「……ご健勝を御祝い申し上げます」と言う。ハムレットは、「……みんなも元気で結構。あっ、ホレーシオ！　それともぼくの眼の狂いか？」と言うと、ホレーシオは、「……仰せの通りの者で、常に忠実な臣下ホレーシオでございます」と言う。ハムレットは、「……いや、君は僕の友人だよ。君とぼくとはお互いにそう呼び合いたいものだ。（両人握手する）。時に、ホレーシオ。ウィッテンベルクを飛び出して何をしているんだ！　あっ、マーセラスか」と言い、（ハムレット手をさしのべる）。マーセラスは、「殿下！」と言い、ハムレットは、「……や、ようこそ、君もようこそ、（バーナードに会釈する）。だが、実際、ウィッテンベルクを飛び出して何をしているのか？」と聞く。すると、ホレーシオは、「……殿下、抜け遊びなのです」と言う。すると、ハムレットは、「……ぼくは君の敵にさえ、そんなことを言わせては置かないよ。また、君の自己中傷をばぼくの耳に信じさせようなんて、ふざけすぎるよ。いや、君は抜け遊びする学生ではない。しかし、エルシノアになんの用があったのだ？　帰るまでに大酒をあおることでも仕込んでやるぞ」と言う。ホレーシオは、「……殿下、父君のご葬儀を拝観に参りました」と言う。ハムレットは、「……君、学友たる僕をなぶってはいけない。ほんとうは、母上の結婚式を見に来たのだろう？」と言う。ホレーシオは、「……確かに、間近う続いて上げられましたな」と言う。それに対して、ハムレットは、「……倹約だよ、倹約……。お葬式の時の焼き肉が冷えて婚礼の宴会に出たのさ。あんないやな日にめぐり合わせるくらいなら、天国で憎い敵にめぐりあった方がましだ！　ホレーシオ。僕の父が、ああ、父の姿が目に見えるようだ」と言うのであった。（本文）

＊　＊

さて、先王の「亡霊」を見た、三人（バーナードとマーセラスそれにホレーシオ）、特にハムレットの親友（学友）でもあるホレーシオは、「……今夜見たこと何もかも、王子ハムレットに知らそうじゃない」かということで、今、ここに来ているのである。そして、そのホレーシオの姿を見たハムレットは、「……あっ、ホレーシオ！　それともぼくの眼の狂いか？」と言うと、ホレーシオは、「……仰せの通りの者で、常に忠実な臣下ホレーシオでございます」と言う。ハムレットは、「……いや、君は僕の友人だよ。君とぼくとはお互いにそう呼び合いたいものだ。（両人握手する）。時に、ホレーシオ。ウィッテンベルクを飛び出して何をしているんだ！」と聞く。――まず、ここまでの「会話」だけを見てみると、ハムレットは、ホレーシオがデンマークに来ていることを全く知らなかったことになる。そして、今、初めて「会った」という感じになっている。だからこそ、「……ホレーシオ。ウィッテンベルクを飛び出して何をしているんだ！」ということになるの

である。すると、ホレーシオは、「……殿下、抜け遊びなのです」と言う。この「抜け遊び」というのは、まさに「……授業（学業）を抜け出して、遊びに来ている」ということであるが、それを聞いたハムレットは、「……ぼくは君の敵にさえ、そんなことを言わせては置かないよ。また、君の自己中傷をばぼくの耳に信じさせようなんて、ふざけすぎるよ。いや、君は抜け遊びする学生ではない。しかし、エルシノアになんの用があったのだ？」と、再び、聞いている。これは、一体、どういうことなのかと問えば、それは、ハムレットという人は、心から愛する先王の「死後」は、余りにもそのことばからに囚われ過ぎてしまい、つまり、自分の「心の中」に深く閉じ籠もって、その「心」を閉ざしていたので、まわりの様々な「様子」が普段よりはあまりよく見えてはいなかったということであり、普段であれば、多くの人たちの中からホレーシオの姿を見つめることもでき得たかも知れないが、いつも「伏目勝ち」にしていたハムレットの「目」には、ホレーシオの姿はなかなか見えてはこなかったということになるのだろう。

　ところで、その「ホレーシオ」という人は、一体、どのような人物であるのか、という問題が生じるが、それは、次のようになるかと思う。――まず、ハムレットは、先王（父親）の突然の「崩御」により、今は、デンマークに戻っているが、それまではドイツの「ウィッテンベルクの大学」に留学していて、その時の「学友」こそは、まさに「ホレーシオ」という人物であり、しかも、その「大学」というのは、いわば「神学校」であり、それゆえ、ハムレットの学友でもある「ホレーシオ」という人物は、大学で「神学や哲学」などを本格的に勉強や研究をしている人物になるのである。その場合、「ホレーシオ」という人物は、そのまま「学生」なのか？ それとも、最初の記述の「学者」ということになるのか？ それとも両方を兼ねているのか？ そして、ハムレットの話しぶりからすれば、ホレーシオという人物は、非常に優秀でまじめな性格であり、また、酒もそれほどは飲まず、しかも、ハムレットにとって最も信頼できる人物という設定になっているかと思う。

　さて、ホレーシオは、「……殿下、父君のご葬儀を拝観に参りました」と言う。つまり、先王の「葬儀」を見に来たのですと言うと、ハムレットは、「……君、学友たる僕をなぶってはいけない。ほんとうは、母上の結婚式を見に来たのだろう？」と言う。ホレーシオは、「……確かに、間近う続いて挙げられましたな」と言う。――これは、本来であれば、ある一定期間、喪に服するのが通例かと思うが、今回は、「間近う続いて挙げられましたな」とある。だとすれば、全く「同じ日、同じ時」ではなく、極めて短い間に、まさに「葬儀」と「婚儀」とがいわば立て続けに行なわれたということであり、それに対して、ハムレットは、「……倹約だよ、倹約……。お葬式の時の焼き肉が冷えて婚礼の宴会に出たのさ」と、皮肉たっぷりに言うのである。――つまり、先王の「葬儀」で使い残った「料理」（焼き肉）が、母親と叔父の「婚儀」の時にその「料理」（焼き肉）が冷えて出て来たということであり、それくらい「短期間」に「葬儀」と「婚儀」とが続けて行なわれたと言いたいのである。それとも、文字通りの意味なのかは判別しがたい。そして、ハムレットは、「……あんないやな日（結婚式）にめぐり合わせるくらいなら、天国で憎い敵にめぐりあった方がまだましだ！」と言うのである。そのくらい「いやだった」ということである。そして、ハムレットが、「……ホレーシオ。僕の父が、ああ、父の姿が目に見えるようだ」と言うと、ホレーシオは、その「言葉」に敏感に反応するのである。

さて、ここからは、「ハムレット」と「ホレーシオ」の交互の「対話」になるが、まず、ハムレットが、「……ああ、父の姿が見に見えるようだ」と言うと、ホレーシオは、「……ど、どこにです？　殿下？」と聞くと、「……ぼくの心の眼にさ」と言う。ホレーシオは、「……私も一度はお目にかかったことがありますが、ご立派な王様であらせられました」、「……どの点から見ても、再びああいう人物は見られまい」、「……殿下、じつは昨夜お目にかかったように思うのですが」、「……お目にかかった？　だれに？」、「……おん父君陛下です」、「……なに、父君に！」、「……さ、その驚きをしばらく鎮められて、申上げる不思議な話をよくお聞き下さい。証拠人はこのご両人です」、「……ふむ、ぜひとも聞かして貰いたい」、「……じつは、このマーセラスとバーナードの両君が二晩続けて、しんしんと更け渡った真夜中の見張時に見られたのです。おん父君によく似た姿が、頭からつま先まですきもなく甲冑で固められて、現れたのでした。そして、いかめしい足取りで、ふたりの傍をしずしず、堂々と往ききなさいました。迷い驚く眼と鼻の先を三度まで通られました。ふたりはあまりの恐ろしさに寒天のようにブルブルふるえ、口もきけずしゃちこばったままで、言葉もかけられなかったのです。この事を御両君は恐る恐る内密に私に報告されました。そこで三日目の晩、私もともどもに見張に出ました。ところが、時間と言い、姿、形と言い、聞いた通りに、現れたのです。私は御父君を存じ上げていますが、この手とこの手だって、あれ程似てはいません」、「……しかし、そりゃどこで起こったことなのか？」、「……夜警をしましたあの城壁の上です」、「……ものを言ってみなかったのか？」、「……言いました。ですが、なんとも答えません。ただ一度だけ、頭をあげ、ものを言いたげに、口元を動かす気配を見たようでしたが、丁度鶏が大きな声で時をつくったので、その声にひるんで、あわてて姿をかき消しました」、「……変な話だな！」、「……殿下、まさしくこれはほんとうのことなのです。そして私どもは、殿下にお知らせ申す義務があると思いましたので」と言うのである。（本文）

＊　＊

さて、ハムレットの親友（学友）でもある「ホレーシオ」は、ハムレットに、深夜十二時過ぎに現れた、先王の「亡霊」の話をすることになるが、まず、ハムレットが、「……ああ、父の姿が見に見えるようだ」と言うと、ホレーシオは、「……ど、どこにです？　殿下？」と聞く。これは、実際に「……先王の姿が見えているのか」と一瞬思っている状態であるが、もちろん、ハムレットは、「……ぼくの心の眼にさ」と言うのを聞いて、ホレーシオは、あらためて、「……殿下、じつは昨夜お目にかかったように思うのですが」と語り始めるのである。この「お目にかかったように思うのですが」というのは、さすがに「亡霊」の話なので少しためらいがちにという感じであり、すると、「……お目にかかった？　だれに？」、「……おん父君陛下です」、「……なに、父君に！」、「……さ、その驚きをしばらく鎮められて、申上げる不思議な話をよくお聞き下さい。証拠人はこのご両人です」となるのである。そして、ハムレットは、「……ふむ、ぜひとも聞かして貰いたい」、「……じつは、このマーセラスとバーナードの両君が二晩続けて、真夜中の見張時に見られたのです。おん父君によく似た姿が、頭からつま先まですきもなく甲冑で固められて、現れたのでした。そして、いかめしい足取りで、ふたりの傍をしずしず、堂々と往ききなさいました。ふたりはあまりの恐ろしさに寒天のようにブルブルふるえ、口もきけずしゃちこばったままで、言葉もかけられなかったのです」となって行くのである。

そして、「……この事を御両君は恐る恐る内密に私に報告されました。そこで三日目の晩、私もともどもに見張に出ました。ところが、時間と言い、姿、形と言い、聞いた通りに、現れたのです。私は御父君を存じ上げていますが、この手とこの手だって、あれ程似てはいません」、「……しかし、そりゃどこで起こったことなのか？」、「……夜警をしましたあの城壁の上です」、「……ものを言ってみなかったのか？」、「……言いました。ですが、なんとも答えません。ただ一度だけ、頭をあげ、ものを言いたげに、口元を動かす気配を見たようでしたが、丁度鶏が大きな声で時をつくったので、その声にひるんで、あわてて姿をかき消しました」と言う。すると、ハムレットは、「……変な話だな！」と言い、ホレーシオは、「……殿下、まさしくこれはほんとうのことなのです。そして私どもは、殿下にお知らせ申す義務があると思いましたので」と続くのである。

この「場面」は、まさに書いてある通りであるが、面白いと思うのは、全く「同じ話」を聞いた時の、二人（ホレーシオとハムレット）の「反応」の違いであり、まず、ホレーシオは、「……僕らが二度も見たこの怖ろしいものを、われわれの錯覚に過ぎないと言って、てんで信じようとしなかった」、また、「……つまらないことを、そんなもの出やしないよ」と言って、全く興味も関心も示さなかったのである。――一方、ハムレットは、「……変な話だな！」と言いながらも、その「話」にやがて興味や関心を示すようになるが、その「違い」は、一体、何なのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、ホレーシオにとって、先王の「亡霊」の出現話は、学問上は、なかなか「考え難い」とともに、ホレーシオとは直接は関係ない先王の「亡霊」の出現話でもあるからであるが、一方、ハムレットにとっては、確かに、ホレーシオと同じように、学問上は、なかなか「考え難い」と思っても、それが、まさに「……変な話だな！」ということであるが、しかし、心から愛していた先王（実の父親）の「亡霊」の出現話であってみれば、いやが上にも興味や関心を示さざるを得ないようになっていくのは当然のことである。

さて、ホレーシオの、「……私どもは、殿下にお知らせ申す義務があると思いまして」という言葉を受けて、ハムレットは、「……もっとも至極。だが、ぼくは胸騒ぎがして来る。今夜も見張りをするのか？」、バーナードとマーセラスは、「さようです」、「……甲冑で固め、というのだな？」、バーナードとマーセラスは、「仰せの通りで」、「……頭からつま先まで？」、バーナードとマーセラスは、「……では、顔は見なかったのだね？」と聞くと、ホレーシオは、「……いや、見ました。顔当を上げていましたから」、「……ほう！　不機嫌そうに見えたか？」、「……怒りというよりは悲しみを帯びた顔でした」、「……青ざめていたか？　赤かったか？」、「……大へん青ざめて」、「……そして、じっと君を見つめていたのか？」、「……はい、じっと」、「……ぼくはその場に居合わせたかった」、「……ほんとうにびっくりされたことでしょう」、「……そうだろう、そうだろう、長く留まっていたか？」、「……さよう、普通の速さで百数えるくらいでしたろう」、バーナードとマーセラスは、「……いや、いや、もっと長かった」と言う。ホレーシオは、「……僕が見た時はそう長くはなかった」、「……ひげは灰色だった、そうでなかった？」、ホレーシオは、「……御在世中に拝した通り、灰色がまじった黒いおひげでした」言うと、ハムレットは、「……今夜はぼくも夜警に立とう。もしかしたら、また現れるだろう」、ホレーシオは、「……必ず出るに相違ありません」と言う。ハムレット

は、「……もしも父君のおん姿を帯びて出るなら、たとえ、地獄が口をあけて、黙れ！　と言おうとも、ぜひ話しかけてみよう。君たちがこのまぼろしについて今までだれにも言わなかったのなら、今後も同様固く内密にしていて貰いたい。また、今夜、ほかに何事が起ころうとも、決して吹聴しないで、ただ胸の中に納めておいてくれ給え。諸君の行為に対しては後日報いるつもりだ。ではさよなら。城壁の上で、十一時と十二時の間に、君たちに会いに行こう」と言う。すると、一同、「……かしこまりましてございます」と言う。ハムレットは、「……そんなもの言いはしないで。われわれは友人同士の仲じゃないか？　では、さよなら」と告げる。――ハムレット一人を除いて一同退場――。

　ハムレットは、「……父君の亡霊が甲冑に身を固めて！　なんかあるんだ。なんか、けしからん事があるんだ。夜の来るのが待ち遠しい。それまでは、心よ、じっと落付いておれ。悪い行いは、たとえ大地がおおい匿そうとも、人の眼に顕れて来るものだ」と言うのであった。　――ハムレット退場――　（本文）

＊　　＊

　さて、「第二場」の最後の場面であるが、ホレーシオの、「……私どもは、殿下にお知らせ申す義務があると思いまして」という言葉を受けて、ハムレットは、「……もっとも至極。だが、ぼくは胸騒ぎがして来る。今夜も見張りをするのか？」と聞く。……

　まず、ハムレットは、ホレーシオの、先王の「亡霊」の出現話を聞いて、「……ぼくは胸騒ぎがして来る」というように、はっきりと「興味や関心」を示すようになるとともに、今度は、それを一つ一つ具体的に「検証」するかのように、ハムレットは、「……甲冑で固め、というのだな？」、「さようです」、「……頭からつま先まで？」、「仰せの通りで」、「……では、顔は見なかったのだね？」、「いや、見ました。顔当を上げていましたから」、「……不機嫌そうに見えたか？」、「怒りというよりは悲しみを帯びた顔でした」、「……青ざめていたか？　赤かったか？」、「大へん青ざめて」、「……そして、じっと君を見つめていたのか？」、「はい、じっと」、「……ぼくはその場に居合わせたかった」、「ほんとうにびっくりされたことでしょう」、「……そうだろう、そうだろう、長く留まっていたか？」、「さよう、普通の速さで百数えるくらいでしたろう」、「……いや、いや、もっと長かった」、「……僕が見た時はそう長くはなかった」、「……ひげは灰色だった、そうでなかった？」、「……御在世中に拝した通り、灰色がまじった黒いおひげでした」と、続くのである。そして、ここまで聞いて、ハムレットは、彼らの話に「虚言」はないと、はっきりと「確信」が持てたからこそ、次のように言うのである。

　つまり、ハムレットは、「……今夜はぼくも夜警に立とう。もしかしたら、また現れるだろう」、ホレーシオは、「……必ず出るに相違ありません」と言う。その確信に充ちた言葉を聞いて、ハムレットは、「……もしも父君のおん姿を帯びて出るなら、たとえ、地獄が口をあけて、黙れ！　と言おうとも、ぜひ話しかけてみよう」と、決心するのであった。それは、なぜ、深夜、先王の「亡霊」が連夜出没するのか？　その「理由」を何が何でも聞きたいということであり、また、「……君たちがこのまぼろしについて今までだれにも言わなかったのなら、今後も同様固く内密にしていて貰いたい。また、今夜、ほかに何事が起ころうとも、決して吹聴しないで、ただ胸の中に納めておいてくれ給え。諸君の行為に対しては後日報いるつもりだ。ではさよなら。城壁の上で、十一時と十二時の間に、君たちに会いに行こう」と言う。――それでは、なぜ、「……君たちがこのまぼろ

しについて今までだれにも言わなかったのなら、今後も同様固（かた）く内密にしていて貰いたい」と言うのだろうか？　それは、先王の「亡霊」が自分だけ（ハムレットだけ）に話しかけたいと切に願っているとすれば、それは、恐らく、「国王や王妃」などに知られることを何よりも恐れているからに違いないと直感しているからである。

　そして、ハムレットは、次のように「自問自答」するのである。「……父君（ちちぎみ）の亡霊が甲冑（かっちゅう）に身を固めて！　なんかあるんだ。なんか、けしからん事があるんだ。夜の来るのが待ち遠しい。それまでは、心よ、じっと落付（おちつ）いておれ。悪い行いは、たとえ大地がおおい匿（かく）そうとも、人の眼に顕（あらわ）れて来るものだ」と言うのであった。

＊　＊（第一幕第二場・終了）

第三場　ポローニアス邸の一室

第三場　ポローニアス邸の一室

レアティーズとその娘のオフィーリアの登場。

さて、内大臣（ポローニアス）の息子（レアティーズ）の登場であるが、彼は、留学先のフランスへ戻るということで、「……もう手廻りの品々は積込んだ。じゃ、さよなら。順風で便船がある限り、精出して便りをおくれよ」と言う。オフィーリアは、「大丈夫よ」と言い、レアティーズは、「……それからハムレットがお前にいい加減なお愛想をいっているようだが、ありゃ血の気の多い若い者がだれでもやる手で、気まぐれだと思ったらよい。人生の春のすみれみたよなもので、早咲きだが永くは続かない。香いはよいが持ちが悪い。ちょっとの間楽しませてくれる香水みたよなもので、それ以上のものではないよ」と言う。妹のオフィーリアは、「……ただそれだけのもの？」と聞くのであった。（本文）

＊

まず、最初、ポローニアスという人物であるが、この人物は、「宰相」とも「内大臣」とも「侍従長」とも呼ばれているかと思うが、その「官職」は、ここでは「国王のそばに仕えて、国王を補佐する最高位の官吏」ということであり、しかも、ポローニアスは、現国王（クローディアス）からは、「……デンマークの王座とお前の父上との関係は、頭と心よりもっと近しく、手が口の用を務める以上に密接な仲なのだ」と、絶大の「信頼」を寄せられているとともに、その息子（レアティーズ）に対しても、「……お前が所望するたいていの事は、所望ではなくて、わしの方から進上したい程だ」と、父親同様に国王からは高い「信頼」を得ているのである。そして、そのレアティーズは、妹のオフェーリアに向って、「……ハムレットがお前にいい加減なお愛想をいっているようだが、ありゃ血の気の多い若い者がだれでもやる手で、気まぐれだと思ったらよい。人生の春のすみれみたよなもので、早咲きだが永くは続かない。香いはよいが持ちが悪い。ちょっとの間楽しませてくれる香水みたよなもので、それ以上のものではないよ」と言うのである。

ところで、その「せりふ」の中に、「……ありゃ血の気の多い若い者がだれでもやる手で、気まぐれだと思ったらよい。人生の春のすみれみたよなもので、早咲きだが永くは続かない。香いはよいが持ちが悪い。ちょっとの間楽しませてくれる香水みたよなもので、それ以上のものではない」とあるが、それを少し直すと、「……ありゃ血の気の多い若い者が誰でもやる手で、気まぐれだと思ったらよい。人生の春のすみれのようなもので、早咲きだが永くは続かない。また、香いはよいが持ちは悪く、ちょっとの間楽しませてくれる香水のようなもので、それ以上のものではない」ということである。すると、妹のオフィーリアは、「……ただそれだけのもの？」と疑問を投げかけることになるが、それは、もっと何かがあると思いたいということである。

すると、兄のレアティーズは、「……それだけのものと思うがよい。育ちざかりの人間は、肉や柄ばかりが大きくなるのではない。この肉体という殿堂は、ふとるにつれて、中の心や魂の力も同時に大きくなる。そりゃ多分、今はお前を愛しているだろう。その純粋な気持をけがすような汚い心や偽りは全然ないだろう。しかし、考えにゃならんことは、ハムレットの高い身分を思うと、万事自分の心の通りにはならないのだ。生れが生れ故に、

しもじものするように、自分勝手に切盛りの出来ない方なのだ。あの人の心一つで、国全体の安全と福祉とが左右されるのだ。だから、元首といただく国民の承認や賛成の上でなければ、妻の選択も出来かねるんだ。お前を愛するとおっしゃっても、特別な地位にあって気ままに振舞えない人が約束した事はどれだけ実現が出来るか、その範囲において、信じて置く方が賢明だよ。デンマーク国民全体の賛成をまって初めて実現されるのだから。うっかりあの人の恋の歌に耳を貸し、愛を捧げたり、大事な操を、みだらな口説に投げ出したら、それこそお前の名誉がどんなに傷つくか考えてみるがいい。ねえ、オフィーリア、恐ろしいことだよ。まあ、愛情の後陣に下って、愛欲の矢玉から遠ざかっているのがよいね。慎み深い乙女は、お月様に綺麗な顔をあらわに見せるだけでもみだらなことだよ。貞操そのもののような女でも、世間の悪口の毒矢は逃れないもの。春の若草も、つぼみの開かない内に、悪い虫に食われてしまうことがよくあるからね。うら若い青春の朝の露に、悪い毒気が一番ひどく当るものだ。だから警戒するがよい。万全の策は用心にあり、青春はとかく己れに謀反したがるもの、そばに誘惑する人が居なくとも」と言う。

オフィーリアは、「……兄さんの御もっともなお諭しは心の番人として、大事にこの胸のうちにたたんで置きますわ。けれど、兄さん、罰当りの坊さんのように、人には天国へ登る険しいいばらの道を教えながら、御自分はその忠告を棚に上げて、脂太りした道楽者のように歓楽の花咲く道を歩きなさいますなよ」と言う。（ポローニアスの登場）（本文）

＊　＊

さて、兄のレアティーズは、「……それだけのものと思うがよい。（中略）、そりゃ多分、今はお前を愛しているだろう。その純粋な気持をけがすような汚い心や偽りは全然ないだろう。しかし、考えにゃならんことは、ハムレットの高い身分を思うと、万事自分の心の通りにはならないのだ。生れが生れ故に、しもじものするように、自分勝手に切盛りの出来ない方なのだ。あの人の心一つで、国全体の安全と福祉とが左右されるのだ。だから、元首といただく国民の承認や賛成の上でなければ、妻の選択も出来かねるんだ。お前を愛するとおっしゃっても、特別な地位にあって気ままに振舞えない人が約束した事はどれだけ実現が出来るか、その範囲において、信じて置く方が賢明だよ。デンマーク国民全体の賛成をまって初めて実現されるのだから。うっかりあの人の恋の歌に耳を貸し、愛を捧げたり、大事な操を、みだらな口説に投げ出したら、それこそお前の名誉がどんなに傷つくか考えてみるがいい。ねえ、オフィーリア、恐ろしいことだよ。まあ、愛情の後陣に下って、愛欲の矢玉から遠ざかっているのがよいね。（中略）、春の若草も、つぼみの開かない内に、悪い虫に食われてしまうことがよくあるからね。うら若い青春の朝の露に、悪い毒気が一番ひどく当るものだ。だから警戒するがよい。万全の策は用心にあり、青春はとかく己れに謀反したがるもの、そばに誘惑する人が居なくとも」と言う。――これは、心の底から妹のオフィーリアのことを心配しているのであり、「……大事な操を、みだらな口説に投げ出したら、それこそお前の名誉がどんなに傷つくか考えてみるがいい。ねえ、オフィーリア、恐ろしいことだよ。世間の悪口の毒矢は逃れられないもの」であり、だからこそ、「……警戒するがよい。万全の策は用心にあり、青春はとかく己れに謀反したがるもの、そばに誘惑する人が居なくとも……」となるのである。これは、これで兄としての立派な忠告であり、それゆえ、妹のオフィーリアも、「……兄さんの御もっともなお諭しは心の番人として、大事にこの胸のうちにたたんで置きますわ。けれど、兄さん、罰当

りの坊さんのように、人には天国へ登る険しいいばらの道を教えながら、御自分はその忠告を棚に上げて、脂太りした道楽者のように歓楽の花（女性たちの）咲く道を歩きなさいますなよ」と、今度は逆に妹から兄へと切り返しているのである。

　レアティーズは、「……なあに、ぼくのことは心配ないよ。だがつい長居しすぎた。やっ、おとうさんがいらしった。重ねて祝福を受けることは、重ねて神から恵まれることで有難い。もう一度お別れを告げるよい機会が舞い込んだというもの」と言う。

　ポローニアスは、「……レアティーズ、まだここにかい？　困った奴だな！　さあ、乗り込んだり、乗り込んだり。帆はとうに風をはらんで、みんなが待っている。それ！　わしの祝福を受けなさい。（レアティーズの頭に手を置く）。これから言って聞かせる戒めを心にちゃんと刻み付けておくがよい。――自分の考えをめったに口外せぬこと、また、突飛な考えを実行するもんじゃない。うちとけるのはよいが、決してなれなれしくするなよ。良いと思った友だちが出来たら、鋼のたがでしっかり心へ巻付けておけ。だが、まだ卵からかえったばかりのひよっこのような仲間のだれかれと手を握って、掌が馬鹿になってしまってはいかぬぞよ。けんかにはいるなよ。だが、はいった上は、相手がお前を警戒するようになるまでやってのけろ。だれの言葉にも耳を貸すのはよいが、いろんな人に口をきくものじゃない。みんなの意見は聞いて、自分の判断はひかえなさい。財布の許す限り身装には金目をかけていい。しかし、派手や気障に金をかけるものじゃない。華美を避け、質の良い物を着なさい。服装で人柄が分るからな。フランスの上流の人たちは、この道のあか抜けした、生れながらのくろうとだよ。それから、金の貸手にも借手にもなるなよ。金を貸すと、金も友だちもなくしてしまう。金を借りると、倹約の心が鈍くなる。最後に何よりも大事なことは、己れに忠実であれということ、すれば、自然、夜が昼に続くように間違いなく、だれにも不忠実にはなれないものだ。では、機嫌よう――願わくばこの戒めが、お前の心に深くしみ込むよう神に祈ります」と言う。（本文）

＊　＊

　さて、今度は、父親（ポローニアス）から息子（レアティーズ）への、まさに「餞別の言葉」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……これから言って聞かせる戒めを心にちゃんと刻み付けておくがよい。――自分の考えをめったに口外せぬこと、また、突飛な考えを実行するもんじゃない。うちとけるのはよいが、決してなれなれしくするなよ。良いと思った友だちが出来たら、鋼のたがでしっかり心へ巻付けておけ。だが、まだ卵からかえったばかりのひよっこのような仲間のだれかれと手を握って、掌が馬鹿になってしまってはいかぬぞよ。けんかに入るなよ。だが、入った上は、相手がお前を警戒するようになるまでやってのけろ。だれの言葉にも耳を貸すのはよいが、いろんな人に口をきくものじゃない。みんなの意見は聞いて、自分の判断はひかえなさい。財布の許す限り身装には金目をかけていい。しかし、派手や気障に金をかけるものじゃない。華美を避け、質の良い物を着なさい。服装で人柄が分るからな。それから、金の貸手にも借手にもなるなよ。金を貸すと、金も友だちもなくしてしまう。金を借りると、倹約の心が鈍くなる。最後に何よりも大事なことは、己れに忠実であれということ、すれば、自然、夜が昼に続くように間違いなく、だれにも不忠実にはなれないものだ」ということである。これは、これで人生経験の豊かな父親からまだ世間をよく知らない若い息子への「立派な

忠告」になっているのであり、「……願わくばこの戒めが、お前の心に深くしみ込むよう神に祈ります」となるのである。

レアティーズは、「……では行って参ります」と言うと、ポローニアスは、「……万事好都合である。従僕どもも待っている」と言う。レアティーズは、「……オフィーリア、さよなら、ぼくの言ったことを忘れないでね」と言う。オフィーリアは、「……この胸の中に錠を下ろしてそのかぎは兄さんにお預けいたしますわ」と言う。レアティーズは、「……さよなら」と言い、レアティーズは退場する。――ポローニアスは、「……なんだい、兄さんがお前に言ったこととは？」と聞くと、オフィーリアは、「……あの、別に、それは、ハムレット様のことでございます」と言うのであった。

するとポローニアスは、「……いかにも、いい事に気がついた。王子が近頃よく、お前の所へお忍びで、お前の方も、えろう気前よくお迎えして、お相手になっているそうだな。じつは、用心の為にわしに告げてくれた人があるのじゃが、もしその通りなら、お前に言って聞かせにゃならぬことがある。お前はわしの娘として、また処女として、心得ねばならぬことをはっきりわきまえて居りませぬぞ。二人の仲はどうなのか？　さあ、何もかも打ち明けなさい」と言う。

すると、オフィーリアは、「……あの方はね、おとう様、近頃おやさしいお気持をいろいろわたしに言って下さいますのよ」と言う。ポローニアスは、「……なに、おやさしいお気持、たわけたことを！　こういう危ない目にまだ出遇うたことのない生ぶな娘らしい口をききおる。一体、お前はそのおやさしいお気持とやらを、そのまま信じているのか？」と聞く。オフィーリアは、「……おとう様、わたしには分からないのでございます」と言う。すると、ポローニアスは、「……よしよし、教えてやる。お前はな、まだ赤ん坊だと心得なさい、にせ金同様な、そのおやさしい贈物とやらを、ほんものの貨幣と思い込むなんて。自分というものを、もっと高く考えなさい。でないと、わしは阿呆の業ざらしとなるよ」と言う。オフィーリアは、「……おとう様、あの方は立派な気持でわたしに言い寄りなさいましたのです」と言うと、ポローニアスは、「……たわけたことを。一時の気まぐれだろうさ」と言う。オフィーリアは、「……うそいつわりは無いと、あらゆる神聖な誓いを立てて、おっしゃいました」と言うのである。

ポローニアスは、「……そりゃ、むく鳥を引っかけるわなだわい。わしも身に覚えがある、血が燃え立つ時は、心も出たらめに、いろんな誓いを口に言わせるものさ。娘や、この誓いという、ぱっと燃え立つほのおはな、光るほど熱は無うて、文句を並べているうちにさえ、光も熱もさめてしまう、こんなものを火だと思ってはいかんよ。これからは、処女の身として出しゃばらず、少しつつましやかにするがよい。御命令ならば談判に応じますというのでなく、もっと高くかまえて面会を許して上げるくらいに思ったらよい。ハムレット王子はまだお年も若い上に、お前などより、もっと自由に振舞える御身分柄ということを、しっかり腹に入れて、おっしゃることをいい加減に信じてお置き。早い話が、王子の誓いなんか信じなさるなよ。ありゃ、着飾った表の色と裏とは大違い、人をだますために聖者ぶって、口には殊勝なことを唱えながら、じつはけがらわしい要求をねだる、不義の取持役だよ。くどくは言わぬ、これだけはよく聞きなさい。ざっくばらんに言えばだな、今後は、みだりに、ちょっとでも、ハムレット王子に言葉をかけたり、語ろうては

相成らぬぞよ。よいか、きっと申渡して置くぞよ。さあ、さあ、お出で」と言う。オフィーリアは、「……おとう様の仰せ通りに致します」と言うのであった。（両人退場）（本文）

＊　＊

　さて、今度は、父親（ポローニアス）が娘（オフィーリア）に王子ハムレットとの関わり方について延々と言って聞かせている場面であるが、それは、次のようなものである。まず、父親（ポローニアス）は、「……王子が近頃よく、お前の所へお忍びで、お前の方も、えろう気前よくお迎えして、お相手になっているそうだな。じつは、用心の為にわしに告げてくれた人があるのじゃが、もしその通りなら、お前に言って聞かせにゃならぬことがある。お前はわしの娘として、また処女として、心得ねばならぬことをはっきりわきまえて居りませぬぞ。二人の仲はどうなのか？　さあ、何もかも打ち明けなさい」と言うと、娘のオフィーリアは、「……あの方はね、おとう様、近頃おやさしいお気持をいろいろわたしに言って下さいますのよ」と言う。すると、ポローニアスは、「……なに、おやさしいお気持、たわけたことを！　こういう危ない目にまだ出遇うたことのない生ぶな娘らしい口をききおる。一体、お前はそのおやさしいお気持とやらを、そのまま信じているのか？」と聞くと、オフィーリアは、「……おとう様、わたしには分からないのでございます」と言う。すると、ポローニアスは、「……よしよし、教えてやる。お前はな、まだ赤ん坊だと心得なさい、にせ金同様な、そのおやさしい贈物とやらを、ほんものの貨幣と思い込むなんて。自分というものを、もっと高く考えなさい。でないと、わしは阿呆の業ざらしとなるよ」と言う。オフィーリアは、「……おとう様、あの方は立派な気持でわたしに言い寄りなさいましたのです」と言うと、ポローニアスは、「……たわけたことを。一時の気まぐれだろうさ」と言う。オフィーリアは、「……うそいつわりは無いと、あらゆる神聖な誓いを立てて、おっしゃいました」と言うのである。

　すると、ポローニアスは、「……そりゃ、むく鳥を引っかけるわなだわい。わしも身に覚えがある、血が燃え立つ時は、心も出たらめに、いろんな誓いを口に言わせるものさ。娘や、この誓いという、ぱっと燃え立つほのおはな、光るほど熱は無うて、文句を並べているうちにさえ、光も熱もさめてしまう、こんなものを火だと思ってはいかんよ。これからは、処女の身として出しゃばらず、少しつつましやかにするがよい。御命令ならば談判に応じますというのでなく、もっと高くかまえて面会を許して上げるくらいに思ったらよい。ハムレット王子はまだお年も若い上に、お前などより、もっと自由に振舞える御身分柄ということを、しっかり腹に入れて、おっしゃることをいい加減に信じてお置き。早い話が、王子の誓いなんか信じなさるなよ。ありゃ、着飾った表の色と裏とは大違い、人をだますために聖者ぶって、口には殊勝なことを唱えながら、じつはけがらわしい要求をねだる、不義の取持役だよ。くどくは言わぬ、これだけはよく聞きなさい。ざっくばらんに言えばだな、今後は、みだりに、ちょっとでも、ハムレット王子に言葉をかけたり、語ろうては相成らぬぞよ。よいか、きっと申渡して置くぞよ。さあ、さあ、お出で」と言う。オフィーリアは、「……おとう様の仰せ通りに致します」と言うのであった。

　さて、兄（レアティーズ）も父親（ポローニアス）も、王子（ハムレット）と娘（オフィーリア）との「恋愛」に関しては、はっきりと賛成しかねる意志を表明している。その理由としては、まず、何と言っても、一国の王子とでは余りにも「身分」が違い過ぎるということであり、それは、一体、何を意味するのかと問えば、……例えば、ある国の王子

と他の国の王女とが、いわゆる「政略結婚」をするというようなことは、いつの時代のどこの国でも当たり前のことであり、好きだから結婚をするというような自由な身分ではないのである。また、絶対的な権威を持つ父親から誰々と結婚しなさいと言われれば、いやでもその娘はそれに従うしかないのであり、その父親に真っ向から逆らえば、その娘はとても生きてはいけないのである。――ただ、王子（ハムレット）と娘（オフィーリア）との結婚は、もしハムレットの先王（父親）の「敵討ち」（復讐）を果たすという思いや行為などがなかったならば、あるいは可能だったかも知れない。というのも、国王も王妃も王子（ハムレット）と内大臣（ポローニアス）の娘（オフィーリア）との関係について、それに強く反対するような言動は一つもなく、むしろ、はっきりと好意的に見ているからである。

＊　＊（第一幕第三場・終了）

第四場　城の城壁の上

第四場　城の城壁の上

ハムレット、ホレーシオおよびマーセラス、一方の小塔から登場。

ハムレットは、「……ひどくかみつくような冷たい空気だね。おお、寒い」と言うと、ホレーシオも、「……まったく、指がちぎれそうな、きつい寒さです」と言う。ハムレットは、「……何時頃かね？」と聞くと、ホレーシオは、「……まだ十二時にはなりますまい」と言う。すると、マーセラスは、「……いや、十二時は打ちました」と言う。ホレーシオは、「……ほう、もうそんなか？　ぼくは聞かなかった。では、そろそろ亡霊が例によって出歩く頃だ」と言う。（本文）、――この場面は、寒々とした冬の「城壁の上」であり、そこに「三人」（ホレーシオとマーセラスそれにハムレット）がやって来る。そして、深夜十二時を過ぎたということで、そろそろ亡霊が例によって出歩く頃になる。

奥にてラッパの吹奏、大砲の打ち上げられる物音がする。

まず、ホレーシオは、「……殿下、あれはなんの騒ぎですか？」と聞くと、ハムレットは、「……今夜は国王が徹夜で大杯の乾杯を重ね通し、此頃流行の乱痴気さわぎに興じているのさ。そして、国王がラインの酒をのどへ流し込むたびに、ラッパや釜形太鼓が万歳をはやし立てているのだ」と言う。ホレーシオは、「……そういう習慣なのですか？」と聞くので、ハムレットは、「……いかにも、習慣さ。ぼくはこの国に生まれ、この風俗には慣らされているが、こいつは守るより破った方が名誉な習慣だ。あのように馬鹿酒をやるから、この国民が東西の外国人からとがめられ非難され、酔っ払いだの、豚だのとの汚名を着せられるのさ。せっかく、われわれが功名手柄を立てて国威を輝かしても、その名誉を骨抜きにしてしまうのさ。個人の場合にもよくあるが、なんか生れつきの傷があって、例えば、生れた時から――そりゃ、生れる者は自分の誕生を勝手に選ぶわけには行かないから、当人の罪ではないが――何か一いろの気質が勝ち過ぎて、それがだんだんこうじて、理性を踏み外すとか、または、一癖あって、それが好ましい風俗をあまりにも破るような時には、その個人が自然の戯れか星の悪いせいで、そういう一つの傷を背負い込んでいる限り、ほかにどんなに純粋で限りなく貴い美徳があろうとも、それは、その特別な傷に禍されて、世間の目には腐ったものに見えてしまうのだ」と言う。（本文）

＊　＊

まず、ホレーシオは、「……殿下、あれはなんの騒ぎですか？」と聞くと、ハムレットは、「……今夜は国王が徹夜で大杯の乾杯を重ね通し、此頃流行の乱痴気さわぎに興じているのさ」と言う。すると、ホレーシオは、「……そういう習慣なのですか？」と聞くので、ハムレットは、「……いかにも、習慣さ。ぼくはこの国に生まれ、この風俗には慣らされているが、こいつは守るより破った方が名誉な習慣だ」と言う。――これは、一体、どのような「意味合い」になるのかと言えば、それは、次のようなことである。まず、ホレーシオという人物は、そもそもデンマーク人なのか？　それとも、それ以外の外国人なのか？　この問題は、第五幕第二場で、ホレーシオは、死にかかっているハムレットの後を追って、自分も毒を盛った杯（酒）を飲んで死のうとするが、その時の「台詞」が、「…

…わたしは、デンマーク人であるよりも、古代のローマ人でありたい」と、はっきりと言っているので、普通に考えれば、ハムレットの親友（ホレーシオ）という人物は、まさに「デンマーク人」ということになるかと思うが、ただ、ホレーシオは、どちらかと言えば、あまり酒も飲まないまじめな学者タイプの人であり、それゆえ、王室のことにも世間のことにもどこか疎いところがあるという設定なのかも知れない。

それはともかく、デンマークには、あのような馬鹿酒を飲んで乱痴気さわぎに興じる習慣があり、その「習慣」のために、「……この国民が東西の外国人からとがめられ非難され、酔っ払いだの、豚だのとの汚名を着せられるのさ。せっかく、われわれが功名手柄を立てて国威を輝かしても、その名誉を骨抜きにしてしまうのさ」と言うのである。それは、個人の場合でも同じであり、例えば、「……何か一いろの気質が勝ち過ぎて、それがだんだんこうじて、理性を踏み外すとか、または、一癖あって、それが好ましい風俗をあまりにも破るような時には、そのような一つの傷を背負い込んでいる限り、ほかにどんなに純粋で限りなく貴い美徳があろうとも、それは、その特別な傷に禍されて、世間の目には腐ったものに見えてしまうのだ」と言うのである。――例えば、余りにも「酒癖が悪過る、女癖が酷過る、賭事狂い、金に汚い、金遣いが酷い、高慢ちき、性格が酷過る、暴力を振う、極端に偏屈、言葉遣いが酷い、人を人とも思わない、トラブルメーカー、その他」、そのような「性格や性質」などが余りにも勝ち過ぎると、ほかにどんなに純粋で限りなく貴い美徳があろうとも、それは、その特別な傷に禍されて、世間の目には腐ったものに見えてしまうのである。

亡霊現る

ホレーシオは、「……殿下！　ご覧なさい、出ました！」と言う。すると、ハムレットは、「……おお！　もろもろの天使たちよ、われわれを守り給え！　さても、なんじは天の善魂か、地獄の悪魂か！　天の霊気か、地獄の毒気か？　目的が悪意であれ親切であれ、物言いたげな姿して来るとは不思議。さ、なんじにもの問うて見る。われ、なんじをハムレットとも、国王とも、父とも、デンマーク王とも呼ぼうぞ。さあ答えよ。不可解に悩むおれの心を破産させないで、さあ知らせてくれ。如何なれば、死して棺に納められ、儀式通りに葬られた遺骸が、墓衣を破って出たのか？　何故あって、安らかになんじを埋葬した墓が、その重い大理石の口を開けて、再びなんじを吐き出したのか？　しかばねとなったなんじが再び甲冑に全身を固めて、月は雲間から洩れ光る、かような陰に籠る夜を、更に物凄う訪れ現れるは如何なる故か？　自然にもてあそばれてるわれわれの理性をもっては解き難い、このような恐ろしいなぞに、心をかき乱されるとは何故だ？　どういうわけだ？　言え！　われわれはどうしたらよいのか？」と問う。（本文）

＊　　　＊

さて、この場面は、先王の「亡霊」の出現により、ハムレットとその先王の「亡霊」とが直接に対峙する、まさに一つの「クライマックス」場面であるが、その最初の「せりふ」は、次のようなものである。それは、「……おお！　もろもろの天使たちよ、われわれを守り給え！　さても、なんじは天の善魂か、地獄の悪魂か！　天の霊気か、地獄の毒気か？

目的が悪意であれ親切であれ、物言いたげな姿して来るとは不思議。さ、なんじにもの

問うて見る。われ、なんじをハムレットとも、国王とも、父とも、デンマーク王とも呼ぼうぞ。さあ答えよ。不可解に悩むおれの心を破産させないで、さあ知らせてくれ。如何なれば、死して棺に納められ、儀式通りに葬られた遺骸が、墓衣を破って出たのか？　何故あって、安らかになんじを埋葬した墓が、その重い大理石の口を開けて、再びなんじを吐き出したのか？　しかばねとなったなんじが再び甲冑に全身を固めて、月は雲間から洩れ光る、かような陰に籠る夜を、更に物凄う訪れ現れるは如何なる故か？　自然にもてあそばれてるわれわれの理性をもっては解き難い、このような恐ろしいなぞに、心をかき乱されるとは何故だ？　どういうわけだ？　言え！　われわれはどうしたらよいのか？」と叫ぶのであった。……では、その一つ一つを考えてみたいと思う。

　まず、「……おお！　もろもろの天使たちよ、われわれを守り給え！」と叫んでいる。これは、何か霊的な不可思議なものや途轍もない緊急事態に直面したような時には誰でも、例えば、亡霊（幽霊）などをはじめ、飛行機がまさに墜落していくような時、海で暴風雨に遭遇して船がまさに転覆しそうな時、また、超巨大地震やハリケーン或いは大津波などで今まさに身の危険を直に感じている時には、誰でも、「……おお、神よ、われわれを（われを）守り給え！」と、叫ばずにはいれない心境になるだろう。次に、「……なんじは天の善魂か、地獄の悪魂か！　天の霊気か、地獄の毒気か？　目的が悪意であれ親切であれ」と叫んでいる。――これは、出現した「亡霊」がどういう「霊」なのかよく分からないので、まず、「天の善魂」（天から舞い下りた「善い霊」）なのか、それとも、「地獄の悪魂」（地獄から抜け出た「悪い霊」）なのか、また、「天の霊気」（天の澄んだ霊気）なのか、それとも、「地獄の毒気」（地獄の腐った毒気）なのか、また、その目的は、「悪意」のための出現なのか、それとも、「親切」のための出現なのか、そのどちらなのかと、まず、先王の「亡霊」にそう問いかけているのである。

　そして、「……物言いたげな姿して来るとは不思議。さ、なんじにもの問うて見る」ということで、ハムレットは、「……われ、なんじをハムレットとも、国王とも、父とも、デンマーク王とも呼ぼうぞ」とある。――これは、先王の名前もハムレット（王）であり、それゆえ、「……なんじをハムレットとも、国王とも、父とも、デンマーク王とも呼ぼうぞ」となるのであり、そして、「……さあ答えよ。不可解に悩むおれの心を破産させないで、さあ知らせてくれ。如何なれば、死して棺に納められ、儀式通りに葬られた遺骸が、墓衣を破って出たのか？　何故あって、安らかになんじを埋葬した墓が、その重い大理石の口を開けて、再びなんじを吐き出したのか？　しかばねとなったなんじが再び甲冑に全身を固めて、月は雲間から洩れ光る、かような陰に籠る夜を、更に物凄う訪れ現れるは如何なる故か？　自然にもてあそばれてるわれわれの理性をもっては解き難い、このような恐ろしいなぞに、心をかき乱されるとは何故だ？　どういうわけだ？　言え！　われわれはどうしたらよいのか？」と叫ぶのである。――つまり、一度、死んだ人間が、丁重に埋葬されたはずなのに、その墓石から抜け出て、深夜、なぜ、甲冑姿の「亡霊」となって再び出現するのか？　その「理由」を聞かせてくれ！　と真剣に叫んでいるのである。

　すると、亡霊、ハムレットを手招きする。

ホレーシオは、「……あなたについて来いと手招いています。何事かあなただけに打ち

明けたいことでもあるかのようです」と言うと、マーセラスも、「……あんなに丁寧な手つきで、もっと離れた別な処へ殿下を手招いています。しかし、ついてお出でになりますな」と言う、ホレーシオも、「……断然、それは相成りません」と言う。ハムレットは、「……物を言おうとしない。よし、おれはついて行く」と言うと、ホレーシオは、「……殿下、およしなさい」と言う。ハムレットは、「……どうしてだ？　一体、何がこわいのだ？　ぼくは命なんか一本の針ほどにも思ってないよ。ぼくの魂は、あれと同様に不死身だもの、（そのぼくに）何をなしえようぞ。ほら、しきりに手招く。ついて行こう」と言うと、ホレーシオは、「……でも、あれが殿下を河へでも、また、荒海へ突出た恐ろしい絶壁の上へおびき寄せて、そこで悪鬼夜叉の姿にでも変化して、あなたの理性の力を奪い気を狂わせたらどうなさいますか？　考えても御覧なさい。ああいう場所そのものが、ほかに誘惑がなくても、千尋の底に海を見下ろし、また、波のとどろく音を聞くだけでも、ややもすれば飛び込んで見たい妙な気持を起こさせるものです」と言う。

　ハムレットは、「……まだ招いている。さあ、どこへでも行け、ついて行くぞ」と言うと、マーセラスは、「……殿下、お出でになってはいけません」と言い、ハムレットは、「……えい、手を放せ」と言う。ホレーシオは、「……言うことをお聞き下さい。行ってはなりません」と言うと、ハムレットは、「……おれの運命が呼んでいるのだ。この体内の血管は力に満ちあふれ、かのニミアの獅子の筋骨のように張りつめている。まだおれを招いている。みんな、手を放せ！　（彼らを振切って、剣を抜く）。邪魔をする奴は、容赦なく亡霊にするぞ！　えい、どけ！　さ、行け、行け、ついていくぞ」と叫ぶのであった。

　亡霊、一方の小塔へ入る。ハムレットが続く。

　ホレーシオは、「……殿下は妄想に取り憑かれ、気が違ったようだ」と言うと、マーセラスは、「……われわれも後をついて行こう。このまま御命令に従っているわけには行かぬ」と言う。すると、ホレーシオも、「……そうだ、ついて行こう。この先、一体、どうなるのだろうか？」と言うので、マーセラスは、「……何かが腐っている。このデンマークの国では……」と言う。ホレーシオは、「……結局、神様が導き給うでしょう」と言うと、マーセラスも、「……ともかく、われわれは、後をついて行きましょう」と言うのであった。（本文）

＊　＊

　さて、先王の「亡霊」が手招きをする。それを見て、ホレーシオは、「……あなたについて来いと手招いています。何事かあなただけに打ち明けたいことでもあるかのようです」と言うと、マーセラスも、「……あんなに丁寧な手つきで、もっと離れた別な処へ殿下を手招いています。しかし、ついてお出でになりますな」と言う。ハムレットは、「……断然、それは相成りません」と言う。ハムレットは、「……物を言おうとしない。よし、おれはついて行く」と言うと、ホレーシオは、「……殿下、およしなさい」と言う。ハムレットは、「……どうしてだ？　一体、何がこわいのだ？　ぼくは命なんか一本の針ほどにも思ってないよ。ぼくの魂（そのもの）は、本来、あれと同様に不死身だもの、（そのぼくに）何をなしえようぞ。ほら、しきりに手招く。ついて行こう」と言うと、ホレーシオは、「……でも、あれが殿下を河へでも、また、荒海へ突出た恐ろしい絶壁の上へおびき

寄せて、そこで悪鬼夜叉の姿にでも変化して、あなたの理性の力を奪い気を狂わせたらどうなさいますか？　考えても御覧なさい。ああいう場所そのものが、ほかに誘惑がなくても、千尋の底に海を見下ろし、また、波のとどろく音を聞くだけでも、ややもすれば飛び込んで見たい妙な気持を起こさせるものです」と言うのである。

　さて、先王の「亡霊」の「手招き」は、もちろん、ハムレットだけを呼び寄せ、そして、ハムレットだけに何か話したいことがあるからであるが、「……あんなに丁寧な手つきで」というのは、何が何でもついて来て欲しいという思いの表れであり、しかも、「もっと離れた別な処へ殿下を手招いています」というのは、すなわち、ほかの人がいるところでは話が出来ないからであり、それゆえ、誰もいない「二人だけになれる場所」へとしきりに手招いているのである。それを察したように、ハムレットも、「……ほら、しきりに手招く。ついて行こう」とするが、一方、ホレーシオとマーセラスは、それに強く反対をするのである。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、出現した「亡霊」がどういう「霊」なのかよく分からないからであり、それは、「天の善魂」（天から舞い下りた「善い霊」）なのか、それとも、「地獄の悪魂」（地獄から抜け出た「悪い霊」）なのか、また、その目的は、「悪意」のための出現なのか、それとも、「親切」のための出現なのか、そのどちらなのかよく分からないからであり、ホレーシオも、「……でも、あれが殿下を河へでも、また、荒海へ突出た恐ろしい絶壁の上へおびき寄せて、そこで悪鬼夜叉の姿にでも変化して、あなたの理性の力を奪い気を狂わせたらどうなさいますか？」と言うように、もし「地獄の悪魂」（地獄から抜け出た「悪い霊」）であり、しかも、その目的が「悪意」のための出現だとしたらと、まさにハムレットの「身の危険」を心配しているのである。

　ところで、マーセラスが、「……何かが腐っている、このデンマークの国では……」というような「せりふ」を言う場面があるが、それは、先王を密かに「毒殺」して、その「王位と生命と王妃」を奪い取った大罪人が、何と「現国王」となって国を統治している。その恐るべき「事実」を、まさに「ハムレット」だけに知らせるためにこそ、今、まさに「亡霊」となって出現して、誰もいない「二人だけになれる場所」へとしきりに手招いて、そこで先王以外「誰も知らない事実（真実）」を語ろうとしているのである。

＊　＊（第一幕第四場・終了）

第五場　城壁の下の空地

第五場　城壁の下の空地

城壁の下の空地、城壁の戸口が開き、亡霊が現れる。
ハムレット、刀身と柄で十字形をつくりあとに続く。

ハムレットは、「……おい、どこへおれを連れて行くつもりか？　もうこれ以上、ついて行かないぞ」と言うと、亡霊は、「……（振り返って）よく聞け」と言う。ハムレットは、「……うむ、聞こう」と答える。ここから「ハムレット」と「亡霊」のお互いの「会話」が交互になされるが、まず、亡霊は、「……すでに時刻は迫って、再び硫黄燃える焦熱地獄の呵責へもどらねばならない」と言うと、ハムレットは、「……あわれ、気の毒な亡霊！」と言う。亡霊は、「……わしを不びんがらずともよい。ただ、わしが話すことをよく耳をすまして聞けよ」と言う。ハムレットは、「……さあ話せ、聞かずにいられようか」と言うと、亡霊は、「……聞いたら敵を討つことを怠るまいぞ」と言う。ハムレットは、「……何んと？」と驚くが、「亡霊」は、やがて、次のように語るのである。……

それは、「……われこそはなんじの父の霊なるぞ。夜のある時刻だけ迷い出て、昼間は地獄の業火の中に縛られて餓鬼道の呵責をなめ、在りし世の罪業の清められるを待つ身の上。われに地獄の秘密を語る自由さえあらば、そのただ一言を聞いただけで魂は苦しみ、若い血潮は氷り、二つの眼の玉は流れ星のように孔から飛び出し、からみ合った髪の毛は解けほぐれて、やまあらしの針毛のように一本一本逆立つような、恐ろしい話を聞かそうものを。しかし、この地獄の世界のことは生身の人間の耳にすべきではない。では、聞け、聞け、ようく聞け。なんじ、もし、父を愛したことあらば――」と言う。

ハムレットは、「……さては？」と言い、亡霊は、「……父が無残にも非道にも殺害されたそのあだを討ち果せよ」と言う。すると、ハムレットは、「……殺害とな！」と驚く。亡霊は、「……殺害は如何にひいき目に見ても、道にそむいた悪じゃ。だが、これこそは最も暴虐非道の、ただならぬ殺害じゃ」と言う。ハムレットは、「……早く、早く聞かせて下さい。恋人たちが思いをはせるよりも早い翼を駆って、復讐へと飛び立ちますから」と言う。亡霊は、「……それは頼もしい心がけじゃ。もしお前が復讐の挙に奮い立とうとしないようなら、物忘れ川の岸にのびのびと根を下ろして、馬鹿太りする雑草よりも、よっぽど鈍いわい。さて、ハムレット、ようく聞けよ。……わしは庭で昼寝の際、へびにかみ殺されたと発表され、デンマークの全国民の耳も、このような虚言ですっかりだまされているが、じつは、お前の父をかみ殺したへびは、現に今、父の王冠を頂いているのだぞ」と言う。ハムレットは、「……やっぱり、虫の知らせが当っていたか！　叔父めが！」と言う。亡霊は、「……そうだ。あの畜生にも劣った不倫の不義の男が、奸智と反逆の腕を振って――あれ程までに女を誘惑する魔力のある腕を振って――わしの貞淑に見えた妃の心を、奴の恥ずべき欲望へと折れさせてしまった。ああ、ハムレット、なんという堕落した寝返りだろう。わしの愛は結婚式の誓いからいささかもはずれたことがないほどに気高いものであったのに、そのわしから離れて、わしに比べて天性のあんなに劣っている奴へ心を移してしまうとは！　しかし、貞女はたとえ肉欲が天神の姿をして誘惑しても動かされないのに反して、みだらな女は輝やかしい天使と縁を結んでも、天上の契りに飽いて、ごみ溜をあさるものなのだ。が、待てよ、あたりの空気がもう夜明けのようだ。手短かに話

そう。わしは午後のいつもの習いで、庭で寝ていた。その油断に乗じてお前の叔父は、のろわしい劇薬を小びんに入れて忍び寄り、らい病のように肉を腐らすその液体をわしの耳の孔へ注ぎ込んだのだ。それには人間の血とは相容れない力があって、体内の血管の中を水銀のように速くめぐって、乳の中へ酸を落としたように、清い血を濁らせこごらせるもの。わしの血もそのように働いた。そして忽ちわしの滑かな膚はらい病のように全身かさぶたにおおわれてしもうた。このように、わしは仮寝の間に、弟の手にかかって、生命も王冠も妃も一時に奪い去られてしもうた。まだ聖餐式もすまさず、臨終の聖油も塗られず、死出の旅に赴く用意も無く、罪業の真盛りに命を刈り取られ、万の罪障を背負ったまま神のみ前に引出されさばかれる破目に落ちたのだ。ああ、デンマーク王の寝屋を肉欲破倫の床たらしめるなよ。さりながら、お前はいかにこの復讐に邁進するとも、取り乱したり、母に害を加えようとたくらんではならぬぞよ。母のことは天に任しなさい。あれの胸のうちに宿る良心のいばらの針から呵責を受けさせなさい。さらば、もはや急ぎ別れを告げん。ほたるも光りを鈍らし始め、朝の間近かさを告げている。おお、さらば、さらばじゃ、ハムレット、わしのことを忘れるなよ」と言う。

＊　＊

さて、いよいよ先王の「亡霊」が、その恐るべき「死の真相」を自ら語るという、まさに一つの「クライマックス」場面であるが、それは、次のようなものである。――まず、ハムレットは、「……もうこれ以上、ついて行かないぞ」と言うと、亡霊は、「……（振り返って）よく聞け」と言う。これは、ここなら誰もいないので話をしてもよい場所に来たという判断からであり、そして、初めて、亡霊は、「（振り返って）よく聞け」と言葉を発するのである。ハムレットは、「……うむ、聞こう」と素直に答えるが、それは、もちろん、そのためにこそついてきたからであるが、さらに、「……さあ話せ、聞かずにいられようか」と言うと、亡霊は、「……聞いたら敵を討つことを怠るまいぞ」と言う。ハムレットは、「……何んと？」と驚くが、それは、「……聞いたら敵を討つことを怠るまいぞ」と言うからには、何かよほど「凶悪なこと」があったに違いないという驚きである。

　すると、亡霊は、「……われこそはなんじの父の霊なるぞ。夜のある時刻だけ迷い出て、昼間は地獄の業火の中に縛られて餓鬼道の呵責をなめ、在りし世の罪業の清められるを待つ身の上。われに地獄の秘密を語る自由さえあらば、そのただ一言を聞いただけで魂は苦しみ、若い血潮は氷り、二つの眼の玉は流れ星のように孔から飛び出し、からみ合った髪の毛は解けほぐれて、やまあらしの針毛のように一本一本逆立つような、恐ろしい話を聞かそうものを。しかし、この地獄の世界のことは生身の人間の耳にすべきではない。では、聞け、聞け、ようく聞け。なんじ、もし、父を愛したことあらば――」と言う。

　例えば、亡霊というのは、この世に未練があればこそ出没するのであり、それゆえ、その思いを果たしてやらなければ、その「魂」はいつまでも「成仏」できず、この地上をさまよい続けて、あの世へと旅立つことが出来ないのであり、そのための「仇討ち」（或いは「敵討ち」）でもあるのである。それは、有名な「忠臣蔵」などでも同じことである。そして、仏教でもキリスト教でも、「葬式」というのは、死者の「魂」を懇ろに「弔い」、その死者の「魂」を清めて、「成仏」（この世に未練を残さず仏となるように）させてから、あの世へと送り込むという一つの「儀式」になるのである。

　さて、先王の「亡霊」は、「……父が無残にも非道にも殺害されたそのあだを討ち果せ

よ」と言うと、ハムレットは、「……殺害とな！」と驚く。亡霊は、「……殺害は如何にひいき目に見ても、道にそむいた悪じゃ。だが、これこそは最も暴虐非道の、ただならぬ殺害じゃ」と言う。――つまり、いろいろな「殺害」方法はあるが、自分が受けた「殺害」方法は、まさに「……これこそは最も暴虐非道のただならぬ殺害」であり、例えば、相手と戦って殺害されるならば、それは、自分の力不足で仕方がないとしても、また、目が覚めている時に、不意を突かれて殺害されるにしろ、それは、自分にも隙があったということにもなるが、今度の自分が受けた「殺害」方法は、まさに余りに卑劣極まりない「殺害」方法であり、それゆえ、どうしても「許せない」のであり、だからこそ、まさに「亡霊」となって出没しているのであり、「……父が無残にも非道にも殺害されたそのあだを討ち果せよ」となるのである。すると、ハムレットは、「……早く、早く聞かせて下さい。恋人たちが思いをはせるよりも早い翼を駆って、復讐へと飛び立ちますから」と言う。亡霊は、「……それは頼もしい心がけじゃ。もしお前が復讐の挙に奮い立とうとしないようなら、物忘れ川の岸にのびのびと根を下ろして、馬鹿太りする雑草よりも、よっぽど鈍いわい。さて、ハムレット、ようく聞けよ。……わしは庭で昼寝の際、へびにかみ殺されたと発表され、デンマークの全国民の耳も、このような虚言ですっかりだまされているが、じつは、お前の父をかみ殺したへびは、現に今、父の王冠を頂いているのだぞ」と言う。ハムレットは、「……やっぱり、虫の知らせが当っていたか！　叔父めが！」となる。

これは、先王の死後、二月も、ずっと「ハムレットの顔に曇がかかっている状態が続いていた」のも、それは、心から愛する先王の突然の死、それがまさに「腑に落ちない」からであり、何かおかしいという感じであり、また、「葬儀」から「婚儀」へが余りにも早過ぎるという感じ、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）には叔父（クローディアス）に対する様々な「疑念や不信」などが最初からはっきりとあったのであり、だからこそ、「……やっぱり、虫の知らせが当っていたか！　叔父めが！」となるのである。

すると、亡霊は、「……そうだ。あの畜生にも劣った不倫の不義の男が、奸智と反逆の腕を振って――あれ程までに女を誘惑する魔力のある腕を振って――わしの貞淑に見えた妃の心を、奴の恥ずべき欲望へと折れさせてしまった。ああ、ハムレット、なんという堕落した寝返りだろう。わしの愛は結婚式の誓いからいささかもはずれたことがないほどに気高いものであったのに、そのわしから離れて、わしに比べて天性のあんなに劣っている奴へ心を移してしまうとは！　しかし、貞女はたとえ肉欲が天神の姿をして誘惑しても動かされないのに反して、みだらな女は輝やかしい天使と縁を結んでも、天上の契りに飽いて、ごみ溜をあさるものなのだ」とある。――これは、実の弟（クローディアス）と王妃（ガートルード）の両方に対して激しい「怒り」をぶつけているのである。

そして、「……あたりの空気がもう夜明のようだ。手短かに話そう。わしは午後のいつもの習いで、庭で寝ていた。その油断に乗じてお前の叔父は、のろわしい劇薬を小びんに入れて忍び寄り、らい病のように肉を腐らすその液体をわしの耳の孔へ注ぎ込んだのだ。それには人間の血とは相容れない力があって、体内の血管の中を水銀のように速くめぐって、乳の中へ酸を落としたように、清い血を濁らせこごらせるもの。わしの血もそのように働いた。そして忽ちわしの滑かな膚はらい病のように全身かさぶたにおおわれてしもうた。このように、わしは仮寝の間に、弟の手にかかって、生命も王冠も妃も一時に奪い去られてしもうた」のである。――つまり、「……午後のいつもの習いで、庭で昼寝をし

ている時に、その油断に乗じてお前の叔父は、のろわしい劇薬を小びんに入れて忍び寄り、わしの耳の孔へ注ぎ込んでは、殺害されてしまった」のである。その結果として、「……わしは仮寝の間に、弟の手にかかって、生命も王冠も妃も一時に奪い去られてしまった」のである。だからこそ、その「敵」を「怨念」を晴らしてくれということである。

それに加えて、許せないのは、「……まだ聖餐式もすまさず、臨終の聖油も塗られず、死出の旅に赴く用意も無く、罪業の真盛りに命を刈り取られ、万の罪障を背負ったまま神のみ前に引出されさばかれる破目に落ちたのだ。ああ、デンマーク王の寝屋を肉欲破倫の床たらしめるなよ。さりながら、お前はいかにこの復讐に邁進するとも、取り乱したり、母に害を加えようとたくらんではならぬぞよ。母のことは天に任しなさい。あれの胸のうちに宿る良心のいばらの針から呵責を受けさせなさい」とある。――それでは、なぜ、王妃（ガートルード）には「害を加えようとたくらんではならぬ」となるのだろうか？それは、もちろん、王妃（ガートルード）への愛情もあるだろうが、それに加えて、王妃（ガートルード）を実際に危害（殺害）すれば、それは、まさに実の「母親殺し」となり、一生ぬぐい去ることのでき得ない「罪を背負う」ことになるからである。

そして、亡霊は、「……さらば、もはや急ぎ別れを告げん。ほたるも光りを鈍らし始め、朝の間近かさを告げている。おお、さらば、さらば、さらばじゃ、ハムレット、わしのことを忘れるなよ」と言う。――この「わしのことを忘れるな」というのは、原文では、まさに「Remember me」であり、そして、あの有名な「パールハーバーを忘れるな」の、「Remember Pearl Harbor」にも直結する表現になるのである。

亡霊大地の中へ消ゆ。ハムレット、ぼう然と打たれて、どっと膝をつく。

そして、ハムレットは、「……おお、もろもろの天使たちよ！　おお、大地よ、そのほかに何か？　地獄にも呼びかけるか？　馬鹿な！　心よ、しっかりせい！　筋肉も、にわかにもうろくしないで、しっかりおれを支えてくれい！　（立ち上る）、『わしのことを忘れるなよ』！　哀れ不びんな亡霊よ、この乱れた頭の中に記憶力が座っている限り大丈夫。『わしのことを忘れるなよ』！　ようし、おれの記憶の手帳から、つまらぬ愚な書込みは一切抹殺してやる。書物から抜き書きした一切の金言名句も、若い頃、観察して写し置いた物の姿や過去の印象も一切ぬぐい消して、ただ父上の命令だけをおれの脳髄の手帳にいつまでも書留めて置くのだ。ほかのくだらないものとごっちゃにしないで。ようし、天に誓って！　それにつけても、なんという浅間しい女か！　おお、悪人！　悪人だ！　やさしい微笑を浮べながら、罰当りの悪人だ！　おれの手帳（剣をさやに納む）――いくらやさしい微笑を浮べても悪人たる者世に在り。少なくも、デンマークにおいては確かにそれが在り得る（手帳に記す）――こう手帳に書留めて置けばよい。さあ、叔父め、お前のことを書いて置いたぞ。次は大事な文句だ。『さらば、さらばじゃ、わしのことを忘れるなよ』（膝まづき手を剣の柄に置く）もう誓ってしまった（祈る）」とある。（本文）

＊　＊

さて、この部分は、先王の「亡霊」の言葉が、ハムレットの「頭の中」（或いは「心の中」）に未だ「こだま」している状態であり、それゆえ、幾度も「わしのことを忘れるなよ」「Remember me」！　という「言葉」が思い出されて来るとともに、「……いくらやさ

しい微笑を浮べても悪人たる者世に在り」というのは、表面的には笑顔（善人）を装いながらも、その実は、内面は悪人であるということであり、それは、国王（クローディアス）も王妃（ガートルード）も、その両方を指し示すとともに、忘れない為に、おれの脳髄の手帳にそれらを書き留めて置くということである。

　ホレーシオとマーセラス、城から来て、暗がりの中にて叫ぶ。

　ホレーシオは、「……殿下！　殿下！」と叫び、マーセラスも、「……ハムレット王子様！」と叫ぶ。ホレーシオは、「……天よ、殿下を守らせ給え」と言うと、ハムレットは、「……そうじゃ、それがいい！（何事か決心して立ちあがる）」と、マーセラスは、「……ヒロー、ホー、ホー、殿下！」と言う。ハムレットも、「……ヒロー、ホー、ホー、来い来い、ここへ」と言う。（両人、ハムレットを見る）。マーセラスは、「……殿下、お障り御座いませんか？」と言い、ホレーシオも、「……どうでした、殿下！」と言う。ハムレットは、「……ああ、驚くべきことだ」と言う。ホレーシオは、「……どうぞお聞かせ下さい」と言う。ハムレットは、「……相成らぬよ。ほかへ漏らすだろうから」と言う。ホレーシオは、「……私は誓って漏らしません」と言い、マーセラスも、「……私も漏らしません」と言う。ハムレットは、「……それなら、君たちどう思うかね、一体、人の心がこんなことを考えるだろうか？　だが、君たちは他言すまいね？」と言う。ホレーシオとマーセラスは、「……殿下、誓って他言は致しません」と言う。ハムレットは、「……デンマーク国中に住んでる悪人どもは、残らずみな大悪党なのだ」と言う。ホレーシオは、「……それしきのことに、亡霊が迷うて出る必要もありますまい」と言うと、ハムレットは、「……いかにも、その通り、君の言うことはもっともだ。では、もう廻りくどい言い方はよして、お互いに手を握り合って、別れる頃合じゃないかね。君たちだってそれぞれ用事や、したいことをしなけりゃなるまい。だれしも何かしらそれぞれ用事や、したいことがあるものだ。そして、しがない身のぼくは、これからお祈りでもしに行こう」と言う。ホレーシオは、「……これはこれは途方もないざれ言」と言う。ハムレットは、「……気に障ったら御免、ぼくが悪かった、ほんとうに悪かった」と言う。ホレーシオは、「……とんでもない。気に障ったことなど御座いません」と言うのであった。（本文）

＊　＊

　さて、王子（ハムレット）を追ってきたホレーシオとマーセラスは、夜明け前の暗がりの中で、「……殿下！　殿下！」と叫ぶのであった。そして、ホレーシオが、「……天よ、殿下を守らせ給え」と言うと、ハムレットは、「……そうじゃ、それがいい！（何事か決心して立ちあがる）」とある。——さて、何を決心したかは分からないが、恐らく、先王の「亡霊」が言った内容は、誰にも（ホレーシオにも）話さない方がよいという決心ではないかと思う。そして、マーセラスが、「……ヒロー、ホー、ホー、殿下！」と呼ぶと、ハムレットも、「……ヒロー、ホー、ホー、来い来い、ここへ」と呼ぶ。この「……ヒロー、ホー、ホー」というのは、鷹匠が「鷹」を呼ぶ寄せる時のかけ声であるらしく、恐らく、（夜明け前の暗がりの中なので）、お互い「おーい」というような「呼び声」として使用していると共に、ハムレットは、相手の「言葉」に呼応（合わせて）いるのである。

　そして、ホレーシオが、「……どうでした、殿下！」と聞くと、ハムレットは、「……

ああ、驚くべきことだ」と言う。ホレーシオは、「……どうぞお聞かせ下さい」と言うが、ハムレットは、「……相成らぬよ。ほかへ漏らすだろうから」と言う。ホレーシオは、「……私は誓って漏らしません」と言い、マーセラスも、「……私も漏らしません」と言う。すると、ハムレットは、「……それなら、君たちどう思うかね、一体、人の心がこんなことを考えるだろうか？」と言うが、「こんなこと」とは、「……人が庭で昼寝をしている時に、その耳の孔の中に『劇薬』を注ぎ込んで人を殺すという『殺害』方法のこと」であり、それは語らず、ハムレットは、「……君たちは他言すまいね？」と聞く。ホレーシオもマーセラスも、「……殿下、誓って他言は致しません」と言う。ハムレットは、「……デンマーク国中に住んでる悪人どもは、残らずみな大悪党なのだ」と言う。ホレーシオは、「……それしきのことに、亡霊が迷うて出る必要もありますまい」と言うと、ハムレットは、「……いかにも、その通り、君の言うことはもっともだ。では、もう廻りくどい言い方はよして、お互いに手を握り合って、別れる頃合じゃないかね。君たちだってそれぞれ用事や、したいことをしなけりゃなるまい。だれしも何かしらそれぞれ用事や、したいことがあるものだ。そして、しがない身のぼくは、これからお祈りでもしに行こう」と言う。

これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、ホレーシオもマーセラスも十分に信頼できる人物ではあるが、しかし、彼らにすべてを話して、それが万々が一にも外に漏れて、国王（クローディアス）や王妃（ガートルード）などの「耳」に入ったら、それこそ、すべてが「台無し」になってしまうので、敢えて何も話さないという決心をしているのである。だから、ハムレットは、「……いかにも、その通り、君の言うことはもっともだ。では、もう廻りくどい言い方はよして、お互いに手を握り合って、別れる頃合じゃないかね。君たちだってそれぞれ用事や、したいことをしなけりゃなるまい。だれしも何かしらそれぞれ用事や、したいことがあるものだ。そして、しがない身のぼくは、これからお祈りでもしに行こう」と言いながら、何とか何も話さずに済まそうとしているのではあるが、一方、ホレーシオは、「……これはこれは途方もないざれ言」と言って、そんなにぼくたちが信頼できないのですかと、腹を立てているのである。それに対して、ハムレットは、「……気に障ったら御免、ぼくが悪かった、ほんとうに悪かった」と言い、ホレーシオは、「……とんでもない。気に障ったことなど御座いません」と言うのである。

ハムレットは、「……いや大いにある。しかも大いに悪い事がある。今夜のまぼろし、あれは悪くない亡霊だった。それだけは君たちに知らせて置く。しかし、われわれの間で何があったかについては、定めて知りたかろうが、それだけは我慢してくれ。ところで、君たちは僕の親友で学者で軍人であるならば、ぼくの一つの頼みを聞いてくれ」と言う。ホレーシオは、「……お聞きいたしますとも。どんなことで御座いますか？」と聞く。「……今夜君たちが見たことを、夢にも世間に知らさないことだ」と言う。ホレーシオとマーセラスは、「……決して知らせは致しません」と言う。ハムレットは、「……いや、誓って貰いたいよ」と言う。ホレーシオは、「……真実、致しません」と言うと、マーセラスも、「……私も、真実、致しません」と言う。ハムレットは、「……（剣を抜く）この剣にかけて」と言い、マーセラスも、「……殿下、私どもはもう誓いました」と言い、ハムレットは、「……ほんとうに、この剣にかけてほんとうに」と言う。亡霊は、「……（下から叫ぶ）誓え」と言う。ハムレットは、「……ははあ！　やっこさん、お前がそう言う

のか？　そんな所にいるのかい、正直小僧？　さあ、君たちも聞いたか、地の中で誓えと言っているぜ。さあさあ、君たちも誓え」と言う。ホレーシオは、「……殿下、誓いの文句をお示し下さい」と言う。ハムレットは、「……君たちが見たことを、夢にも他言しないと、この剣にかけて誓い給え」と言う。亡霊も、「……（下から叫ぶ）誓え」と言う。ハムレットは、「……よく言った、もぐらどの！　馬鹿に早く地の下を掘って歩くじゃないか？　（二人は黙って二度目の誓いをする）。あっぱれ、大した鉱夫ぶりだ！　もう一度、場所を変えてみよう」と言う。ホレーシオは、「……おお、これが不思議でなくて何が不思議だ！」と言うのであった。（本文）

＊　＊

　まず、ハムレットは、「……今夜のまぼろし、あれは悪くない亡霊だった。それだけは君たちに知らせて置く。しかし、われわれの間で何があったかについては、定めて知りたかろうが、それだけは我慢してくれ」と言う。――つまり、先王の「亡霊」は、「悪くない亡霊」であり、それだけは君たちに知らせて置くが、それ以外の、「……われわれの間で何があったかについては、定めて知りたかろうが、それだけは我慢してくれ」ということである。そして、ハムレットは、君たちは僕の親友で学者で軍人であるならば、ぼくの一つの頼みを聞いてくれということで、「………君たちが見たことを、夢にも他言しないと、この剣にかけて誓い給え」と言う。つまり、「……言葉だけではなく、剣にかけて」と言う。それでは、「言葉だけの誓い」と「剣にかけての誓い」とでは、一体、何がどう違うのかと問えば、それは、「言葉だけの誓い」の場合は、その「誓いを破った」時には、相手から様々な「批判や非難」などを浴びるだろうが、しかし、自分の「生命」まで奪われることはない。一方、「剣にかけて誓う」場合は、その「誓いを破った」時には、その剣を以て自分の「生命」が奪われても仕方がないという「重み」があるのである。

　さて、ホレーシオは、「……おお、これが不思議でなくて何が不思議だ！」と言う。それは、亡霊の、「……（下から叫ぶ）誓え」という現象であり、ハムレットは、「……だから、不思議の珍客だと思って、懇ろに歓迎してやり給え。ねえホレーシオ、この天地間には哲学では夢にも考えられないことが沢山あるんだよ。さあ、こんどはこちらへ来給え。ここでさっきと同様、神にかけて、次のことを誓ってくれ給え。それは、僕がどんな不思議な行動をしても――多分これからは随分奇怪な振舞をせずばなるまいと思うが――そんな場合に、決して、このように腕を組んだり、頭を振ったり、または、なぞめいた文句を、例えば、『ふむ、これには訳がある』とか、『話そうと思えば話せないことはないが』とか、『口に出して言おうと思えば』とか、『口止めされてなければ、訳を話せる人もいるんだ』などと、あいまいなことを言って、ぼくの秘密を何か知っていそうな素振を見せてはいけない。さ、そういうことを決してしないと、誓ってくれ給え」と言う。亡霊は、「……（下から叫ぶ）誓え」と。

　ハムレットは、「……ほう、いらだって御座るな亡霊殿、鎮まれ、鎮まれ、（二人は三度目の誓いをする）。では、諸君、ぼくは真心をもって君たちの行為に報いるつもりだ。そして、このようなしがない男でも、友愛を示す為になすことは、神明の助けによって、事欠かさないつもりだ……。さあ、一緒に出掛けよう。くどいようだが、どうか、いつも口に指を当てて、気をつけていてくれ給え．――世の中は関節（箍）が外れてしまったのだ。

ああ、なんという因果か！　おれがそれを直す役割りに生れて来たなんて！　——いや、なに、さあ一緒に行こう」と言う。——一同、城内に入る。（本文）（第一幕終了）

＊　＊

さて、ハムレットは、「……だから、不思議の珍客だと思って、懇ろに歓迎してやり給え。ねえホレーシオ、この天地間には哲学では夢にも考えられないことが沢山あるんだよ。さあ、こんどはこちらへ来給え。ここでさっきと同様、神にかけて、次のことを誓ってくれ給え。それは、僕がどんな不思議な妙な行動をしても——多分これからは随分奇怪な振舞をせずばなるまいと思うが——そんな場合に、決して、このように腕を組んだり、頭を振ったり、または、なぞめいた文句を、例えば、『ふむ、これには訳がある』とか、『話そうと思えば話せないことはないが』とか、『口に出して言おうと思えば』とか、『口止めされてなければ、訳を話せる人もいるんだ』などと、あいまいなことを言って、ぼくの秘密を何か知っていそうな素振を見せてはいけない。さ、そういうことを決してしないと、誓ってくれ給え」と言うのであった。

つまり、「三度の誓い」をすることになるが、一回目は、「言葉」だけで、「……今夜君たちが見たことを、夢にも世間に知らさないこと」を誓い、二度目は、「剣にかけて」、「……君たちが見たことを、夢にも他言しないと、この剣にかけて誓い給え」となり、そして、三度目は、「……多分これからは随分奇怪な振舞をせずばなるまいと思うが、ぼくの秘密を何か知っていそうな素振を見せてはいけない。さ、そういうことを決してしないと、誓ってくれ給え」ということである。そして、この「……多分これからは随分奇怪な振舞をせずばなるまい」ということが、まさにハムレットが「狂気を装う」という事になって行くのである。しかも、「……世の中は関節（箍）が外れてしまったのだ。ああ、なんという因果か！　おれがそれを直す役割りに生れて来たなんて！」となるが、——それは、現国王（クローディアス）の卑劣きわまりない「悪事」（毒殺）を白日の下に暴くとともに、無念のうちに崩御された先王の「敵討ち」を行ない、その先王の「怨念」（恨み）を晴らすということでもあるのである。（第一幕第五場・終了）

＊　＊

（第二幕へと続く）

シェイクスピアの世界

（ハムレットⅢ）

ハムレットⅢ

（第二幕）

はじめに

さて、今回は、シェイクスピアの世界（ハムレットⅢ）の「第二幕」になるが、その内容は、次のようなものである。――まず、内大臣（ポローニアス）は、パリに行った息子に「金と手紙」を送り届けるためと、息子のパリでの生活ぶりをよく見てくるようにと召使い（レナルド）に細々とした注意を与えて送り出した直後、娘（オフィーリア）が顔色を変えてあわてて登場するが、それは、ハムレット様が服装なども乱れてどこが異常だったと告げると、ポローニアスは、さては「……失恋で、気が狂われたか」と間違った判断をして、早速、国王に報告しに行くのである。一方、大広間では、国王に呼び出されたハムレットの学友二人（ローゼンクランツとギルデンスターン）は、最近、ハムレットがすっかり変わってしまったので、その「原因」を探って欲しいと頼まれるのであった。

その後、ノルウェーへの「二人の使者」が戻ってきて、国王に「吉報」（戦争が回避されたこと等）を報告したあと、今度は、内大臣（ポローニアス）は、国王と王妃に、ハムレット様は、わが娘との「……失恋で、気が狂われました」と告げるのであった。そこにハムレットが廊下に現れると、ポローニアスは、まず、私が探って見ましょうと、ハムレットと会話を重ねて別れるところに、丁度、そこにハムレットの学友二人（ローゼンクランツとギルデンスターン）とがやってきて、ハムレットと三人で会話を重ねていくが、やがて、なぜ、ここに来たと問い詰められると、学友の一人は、終に、実は国王に頼まれたと告白してしまう。その後、旅役者の話になるが、そこに旅役者たちの一行が到着すると、ハムレットは、早速、さわりを一くさり聞かせてほしいと頼むと共に、この旅役者たちを利用して、国王や王妃に「芝居」（それは「先王殺害を模した芝居」）を観せて、どのような「反応」を示すのか、国王の「本心」を見極めようという計画を思いつくという内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

如月翔悟

平成三十一年三月吉日（決定版）

目　次

はじめに

ハムレット　Ⅲ

第一幕

第一場……エルシノア城の城壁の上
第二場……城内会議の大広間
第三場……ポローニアス邸の一室
第四場……城の城壁の上
第五場……城壁の下の空地

第二幕

第一場……ポローニアス邸の一室
第二場……城内拝謁の間

第三幕

第一場……拝謁の間の廊下
第二場……城内の広間
第三場……拝謁の間の外（そと）
第四場……王妃の居間

第四幕

第一場……王妃の居間（しばし後のこと）
第二場……城内の別の一室
第三場……城内の別の一室
第四場……デンマークのある港に近き平野
第五場……前の時より数週間を経過す
第六場……城内の別の一室
第七場……城内の別の一室

第五幕

第一場……墓場
第二場……城内大広間

※　参考文献

ハムレットⅢ

（第二幕）

第二幕

第一場　ポローニアス邸の一室

ポローニアスとレナルド（召使い）が登場する。

内大臣（ポローニアス邸）の一室、自宅にくつろいだポローニアスは、召使い（レナルド）を相手に話をしている。パリに行った息子に「金と手紙」を届けるために、レナルドを遣わそうとしているのである。そのレナルドに細々な注意を与えている。――お互い交互に二人だけの「会話」が続いていく。……

まず、ポローニアスは、「……せがれにこの金と手紙を届けてくれ、レナルド」と言うと、レナルドは、「かしこまりました」と応える。すると、ポローニアスは、「……うまく立ち回るつもりならば、せがれに会う前に、まずあれの行状を密かに探っておくのがいいぞ」と言う。レナルドは、「……閣下、じつはそのつもりでおりました」と応える。ポローニアスは、「……うむ、そいつは結構！　大いに結構。いいかね。まず第一に、パリにどんなデンマーク人がいるか聞いてみるのだ。だれだれが、どんな風に、どんな仕送りで、どんな処に宿をとって、どんな友だちとつき合って、どの程度の物入りでやっているか」など。……こうして遠まわしにそれとなく聞くうちに、相手がせがれを見知っているとわかったら、一歩すすめて、単刀直入に切りこむのだ。多少はもう薄々知っているような様子をして、――「……父親のことも友だちもよく存じているので、本人のことも少しは知っております」と、分かったね！　と言うと、レナルドは、「……ええ、よく分かりました」と応える。すると、ポローニアスは、「……本人も多少は知っておりますが」とつづけてな、しかし、「……よくは知りません、ただもしその男だとすると、ありゃ乱暴者で、これこれの道楽があって」と、なんでもいい、出まかせに悪口を並べるのだ。むろん、あれの名誉を傷つけるようなひどいことは言うなよ。自由な若者にありがちな放らつや、乱暴や、ふつうの欠点だけにしておくのがよい」と言う。レナルドは、「……例えば、賭け事をなさる、とか」と言うと、ポローニアスは、「……そうじゃ、また酒を飲むとか、決闘の真似をするとか、乱暴な口を利く、喧嘩をする、女を買う、まあ、そこらまではいいだろうよ」と言う。すると、レナルドは、「……でも、閣下、それは名誉を傷つけましょう」と言うと、ポローニアスは、「……いや、傷つけはせぬ、そこはお前の言い廻し一つでどうにでもなる。だが、それ以上に余計な汚名をせがれに着せては成らぬぞよ――色におぼれるたちだなぞと。そんなことを申すのはわしの本意ではない。あれの落度はな、自由な境遇にあるものの疵、つまり、激しい気性の勢いのあまり、しつけの足らぬ若者の血気に逸ってなど、だれにでもありがちなものと聞こえるように言うのだ」と語るのであった。（本文）

＊　　　＊

まず、内大臣（ポローニアス）は、パリに行った息子に「金と手紙」を届けさせるため

に、召使い（レナルド）を遣わそうとしているのである。その「目的」はと言えば、もちろん、一つは、息子（レアティーズ）に直接「金と手紙」を確実に手渡すことであるが、もう一つの「大きな目的」は、親元から離れて、自由の身になった息子（レアティーズ）が、パリで一体どのような生活をしているのか？　その息子の「行状」を出来るだけ正確に探り出せという使命を受けているのである。その「正確に探り出す方法」として、ポローニアスは、次のような「方法」を具体的に伝授するのである。――それは、例えば、息子（レアティーズ）に直接会って、パリの生活はどうですかと聞いたところで、ほんとうのこと（自分に都合の悪いこと）など言うはずもない。だからこそ、最初は、「……息子に会う前に、まずあれの行状を密かに探っておくのがいいぞ」となるのである。そして、その「方法」というのは、「……パリにどんなデンマーク人がいるか聞いてみるのだ。だれだれが、どんな風に、どんな仕送りで、どんな処に宿をとって、どんな友だちとつき合って、どの程度の物入りでやっているか」など。……こうして遠まわしにそれとなく聞くうちに、相手がせがれを見知っているとわかったら、一歩すすめて、単刀直入に切りこむのだ」とある。――これは、まず、パリにいるデンマーク人たちがどのような生活をしているのか？　その「全体の様子を知る」ことが大事であり、それによって、息子に送る「仕送りの額」もどのくらいにしたらよいのか？　また、何か悪いことに耽っているようなら、それに対して、どのような忠告をしたらよいかの「判断材料」になるのである。

　そして、「……相手がせがれを見知っているとわかったら、一歩すすめて、単刀直入に切りこむのだ」とある。その「切り込み方」こそは、まさに「……父親のことも友だちもよく存じているので、本人のことも少しは知っておりますが、よくは知りません、ただもしその男だとすると、ありゃ乱暴者で、これこれの道楽があって」と、なんでもいい、出まかせに悪口を並べるのだ。そうすれば、相手は、必ず、その「話し」に乗ってきて、実は、これこれこういうことがありましたと、息子の様々な「行状」を話し始めるに違いないと読んでいるのである。相手に息子の「行状」を直接聞いても、相手は警戒をして、どこまで本当のことを言うか分からないが、この「方法」であれば、間違いなく、相手は実際にあった息子の様々な「行状」を話し始めるに違いないと見ているのである。

　さて、本文に戻ると、レナルドは、「……しかし、閣下……」と言うと、ポローニアスは、「……なぜこんなことをする必要がある、と言うのか？」と言う。すると、レナルドは、「……はい、それが知りたいのです」と応える。ポローニアスは、「……いかにも、わたしの真意はこうなんだ。なかなか巧妙だと思うのだが、例えば、物を使っているうちに傷がついたように、せがれに少しの傷をつけるとじゃ、お前が探りを入れる相手は、お前から傷をつけられた若者（倅）が、そのような悪事を犯す現場を見ていたならば、きっとこういう風に相づちを打つよ。『きみ』とか、『だんな様』とか、それは身分や土地柄の言いまわしで変わるだろうが」と言うと、レオナルドは、「……そうでしょうな」と応じる。すると、ポローニアスは、「……そこでだ、相手はこう言う――こう――ええと、なんと言いかけていたっけな？　何か言おうとしていたが、どこで話が途切れたかな？」と言うので、レナルドは、「……こういう風に相づちを打って、きみとか、旦那様とか、あたりでございました」と言う。ポローニアスは、「……相づちを打って」のところか、それそれ。相手はこう相づちを打って来る。「……あの人なら存じていますよ。昨日だっ

たか、この間だったか、いつだったか、お目にかかりましたよ。しかじかの人とご一緒で。そして、お話の通り、どこそこで賭け事をなさっていましたよ」とか、「どこそこで酔いつぶれていましたよ」とか、「テニスでけんかしていました」とか、はては、「怪しげな店に入るところも見ましたよ」とも言うじゃろ。即ち女郎屋のことさ。そら、ね、この手を使えば、嘘の餌で真実という鯉が釣り上がるわけだ。まあ、こんなふうにして、知恵と手腕のあるわしどもは、球ころがしでやるように、真直ぐに狙わないで、しかも的を当てるわざを心得ているんだ。さあ、わしが今口授したこの秘伝を使って、せがれの様子を突き止めてくれ。どうだ、よく分ったかね？」と言うので、レナルドは、「……よく分りました」と応えるのであった。ポローニアスは、「……では首尾よく。ご機嫌よう」と言い、レナルドは、「……閣下、おいとま致します」と言う。ポローニアスは、「……せがれの様子を、おまえの眼でよく見て来るんだぞ」と念を押すと、レナルドは、「……必ず見て参ります」と応える。ポローニアスは、「……せがれは、まあ、好きに踊らせておきなさい」と言い、レナルドは、「……心得ました」と応え、ポローニアスは、「……さあ、行け」と言うのであった。――（レナルド退場する）。（本文）

＊　＊

さて、ポローニアスの「方法」である、例えば、「……父親のこともよく存じているので、本人のことも少しは知っておりますが、よくは知りません、ただもしその男だとすると、ありゃ乱暴者で、これこれの道楽があって」と、なんでもいい、出まかせに悪口を並べるのだ。そうすれば、相手は、必ず、その「話し」に乗ってきて、「……あの人なら存じていますよ。昨日だったか、この間だったか、いつだったか、お目にかかりました。しかじかの人とご一緒で……」と。そして、お話の通り、「どこそこで賭け事をなさっていましたよ」とか、「どこそこで酔いつぶれていましたよ」とか、「テニスでけんかしていました」とか、はては、「怪しげな店に入るところも見ましたよ」とも言うじゃろ。即ち女郎屋のことさ。そら、ね、この手を使えば、嘘の餌で真実という鯉が釣り上がるわけだ。まあ、こんなふうにして、知恵と手腕のあるわしどもは、球ころがしでやるように、真直ぐに狙わないで、しかも的を当てるわざを心得ているんだ。さあ、わしが今口授したこの秘伝を使って、せがれの様子を突き止めてくれ、と言うのであった。

まず、面白いと思うのは、「……知恵と手腕のあるわしどもは、球ころがしでやるように、真直ぐに狙わないで、しかも的を当てるわざを心得ているんだよ」と言う。この「球ころがし」というのは、むろん、「ビリヤード」のことであり、それは、まさに「……真直ぐに的を狙わないで、しかも的を当てるわざを心得ている」のであり、それは、「……相手に直接聞いてもなかなか本当のこと（自分に都合の悪いこと）など言うはずもない」のである。だからこそ、ポローニアスが伝授する「秘伝」を使用すれば、必ず、まさに「……嘘の餌で真実という鯉を釣り上げる」ことができ得るということである。――例えば、或る「虚言」をついて、相手の「反応」（本心）を探るという方法もあるのである。それはともかく、内大臣（ポローニアス）は、親元から離れて、自由の身になった息子（レアティーズ）が、一体、パリでどのような生活をしているのか？　その息子の真の「性格や資質或いは本心」などを探り出す絶好のチャンスと見ているのである。だからこそ、ポローニアスは、「……せがれの様子を、おまえの眼でよく見て来るんだぞ」と念を押しているのであり、それに対して、レナルドは、「……必ず見て参ります」という返事になるの

である。それは、息子（レアティーズ）の将来のこと（例えば政治家に向いているのかどうか）の資質などを見極める「絶好のチャンス（機会）」でもあると見ているのである。

――オフィーリアが驚きの体にて登場する。――

ポローニアスは、「……あ、オフィーリアか、ど、どうしたんだ？」と聞くと、オフィーリアは、「……ああ、おとう様、怖いわ、怖いわ」と言う。ポローニアスは、「……はてな、一体、なんで怖いのだ？」と聞く。すると、オフィーリアは、「……お部屋で縫い物をしていますと、おとう様、ハムレット様が、上着の胸のひもも結ばず、帽子もかぶらず、汚れたくつ下は、止めひもも締めず、かかとまで垂れさがり、お顔色はシャツのように青ざめ、両膝はガタガタふるえ、まるで地獄から抜け出して、怖いことを告げに来た人のように、それは哀れっぽい顔付きでわたしの前へいらっしゃるのです」と言う。ポローニアスは、「……お前を恋して気が狂ったか？」と聞くと、オフィーリアは、「……存じませぬ、そんなこと、でも、そうかと気がかりですの」と応える。すると、ポローニアスは、「……して、なんと言われた？」と聞くので、オフィーリアは、「……私の手首をぎゅと痛いほどつかんで、それから腕をいっぱい伸ばしただけ身をひいて、片手を額にかざし、まるで肖像画でもお描きになるかのように、私の顔をじっと見つめなさるのです。長いことそのままでおいででしたが、やがて、わたしの腕を軽く振って、三度もこううなずいてから、たいそう悲しそうな深い溜息をつかれました。今にもお体が崩れて消えてしまいそうな。それでやっと手を放しなさいましたの。そして、肩越しに顔だけこちらへ向けたまま、前を見ずともわかるかのように、戸口のほうへ出ていらっしゃいました。最後まで私の顔を見つめたままでした」と言う。ポローニアスは、「……さあ一緒においで、こりゃ、王様のところへ行かねばならぬわ。これはまさに恋ゆえの狂気、これが嵩じると、自暴自棄となって、われとわが身を破滅に導きかねない。人の身をそこねるどんな激情もかなわぬほどだ。しまったわい、して、近頃、お前は何かつれない言葉でも言わなかったかい？」と聞く、すると、オフィーリアは、「……いいえ、ただ、おとう様のご命令通り、これまでのお文をお返しして、遇いにいらしってもお断りしただけです」と言う。すると、ポローニアスは、「……それで気が狂われたのだ。ええ、もっとよく注意して、御様子をみるべきだった。わしはな、ほんの気まぐれで、お前が疵物にされてはとばかり思っていたが、ああ、その邪推が悔やまれるわい！　どうもわしら年よりは、つい取越苦労で考え過ぎてしまう悪い癖がある。これでは若い者の無分別に文句が言えぬわ。さあさあ、王様の御前に参ろう。この恋のいきさつをお耳に入れれば、おしかりを受けるだろうが、なまじ匿し立てをすると、もっと大きな不幸を招くかも知れぬからな」と言うのであった。

（本文）

＊　＊

さて、今度は、オフィーリアが顔色を変えてあわてて登場するという場面であるが、それは、次のようなものである。――まず、オフィーリアは、「……ああ、おとう様、怖いわ、怖いわ」と言うので、ポローニアスは、「……はてな、一体、なんで怖いのだ？」と聞くと、オフィーリアは、「……お部屋で縫い物をしていますと、おとう様、ハムレット様が、上着の胸のひもも結ばず、帽子もかぶらず、汚れたくつ下は、止めひもも締めず、かかと

まで垂れさがり、お顔色はシャツのように青ざめ、両膝はガタガタふるえ、まるで地獄から抜け出して、怖いことを告げに来た人のように、それは哀れっぽい顔付きでわたしの前へいらっしゃるのです」と言う。――これは、一体、ハムレットに何があったというのだろうか？　例えば、この日は、先王の「亡霊」に遇った日とは違うのである。というのも、ハムレットが先王の「亡霊」に遇った日は、オフィーリアの兄（レアティーズ）がパリへと昼間旅立った日の、その日の深夜に遇っているのである。それゆえ、先王の「亡霊」に遇って、それでハムレットは、乱れた服装で現われたというのではないのである。つまり、オフィーリアの兄（レアティーズ）がパリへと旅立ってからは、それなりの日数は経っているのであり、そこで、ポローニアスは、召使い（レナルド）に「金と手紙」とを持たせて、息子（レアティーズ）がパリでどのような生活をしているかをよく見て来るようにと、パリへ遣わそうとしているのである。それでは、ハムレットは例の「狂気を装って」、乱れた服装でオフィーリアの前にわざと現われたのだろうか？　その辺の説明が全くなされていないので、ハムレットがなぜ乱れた服装でオフィーリアの前に突然現われたのかは、よく分からないのである。――ただ、ここで大事なことは、父親（ポローニアス）は、娘（オフィーリア）から、その話を聞いて、さては、ハムレット王子は、「……お前を恋して気が狂われたか？」と思い込んだということである。そのことによって、この「ハムレット」という物語（ストーリー）は、新たな展開（場面）へと向かっていくのである。

それは、まず、ポローニアスは、「……して、（ハムレット様は）なんと言われた？」と聞くと、オフィーリアは、「……私の手首をぎゅと痛いほどつかんで、それから腕をいっぱい伸ばしただけ身をひいて、片手を額にかざし、まるで肖像画でもお描きになるかのように、私の顔をじっと見つめなさるのです。長いことそのままでおいででしたが、やがて、わたしの腕を軽く振って、三度もこうなずいてから、たいそう悲しそうな深い溜息をつかれました。今にもお体が崩れて消えてしまいそうな。それでやっと手を放しなさいましたの。そして、肩越しに顔だけこちらへ向けたまま、前を見ずともわかるかのように、戸口のほうへ出ていらっしゃいました。最後まで私の顔を見つめたままでした」と言う。

これは、一体、どのようなことを意味するのだろうか？　例えば、ハムレットは、もし先王（父親）の復讐を実際に果たそうとするならば、遅かれ早かれ、オフィーリアとは「別れ」なければならない。オフィーリアを「事件」（復讐）に巻き込むわけにはいかないからだ。それゆえ、オフィーリアとは「別れ」なければならない。そのオフィーリアとの「別れ」をいわば心密かに「決意」して、最後に、せめてその愛するオフィーリアの「姿」を自分の「頭の中」（或いは「心の中」）にしっかりと刻み付けておこうと、じっと長く見ていたということなのか？　というのも、これからは、正気で会うこともできず、狂気を装った「姿」（言動）でしかオフィーリアとは会うことができないからである。つまり、ハムレットは、心密かにオフィーリアに「別れ」を告げに来たのであり。それでは、なぜハムレットの服装は乱れているのだろうか？　それは、もうおれのことなどは忘れろと言いたいのかも知れない。そのための「狂気を装った」服装になるのかも知れない。

すると、ポローニアスは、「……さあ一緒においで、こりゃ、王様のところへ行かねばならぬわ。これはまさに恋ゆえの狂気、これが嵩じると、自暴自棄となって、われとわが身を破滅に導きかねない。（中略）、して、近頃、お前は何かつれない言葉でも言わなかったかい？」と聞くと、オフィーリアは、「……いいえ、ただ、おとう様のご命令通り、

これまでのお文をお返しして、遇いにいらしってもお断りしただけです」と言うと、ポローニアスは、「……それで気が狂われたのだ。ええ、もっとよく注意して、御様子をみるべきだった。わしはな、ほんの気まぐれで、お前が疵物にされてはとばかり思っていたが、ああ、その邪推が悔やまれるわい！　（中略）、さあさあ、王様の御前に参ろう。この恋のいきさつをお耳に入れれば、おしかりを受けるだろうが、なまじ匿し立てをすると、もっと大きな不幸を招くかも知れぬからな」と言うのであった。――つまり、この「出来事」を切っ掛けとして、内大臣（ポローニアス）という人物は、ハムレット王子は、娘（オフィーリア）との「恋の破綻」（つまり失恋）のためにこそ、まさに「……気が狂われた」と心の底からそう確信（信じ込む）ことになるのである。その結果、このことを国王や王妃様に急いで知らせようと、娘を連れて、王様の御前へと向かおうとしているのである。というのも、ハムレットの顔になぜいつも雲がかかっているのか？　その真の「理由」がどうしてもよく解らず、国王や王妃様の心を深く「悩まし苦しめ」続けているのであり、その真の「理由」が遂にはっきりと解ったということで、内大臣（ポローニアス）は、一刻も早く、娘を連れて、王様の御前へと向かおうとしているのである。

＊　＊（第二幕第一場・終了）

第二場　城内拝謁（はいえつ）の間

第二場　城内拝謁の間

さて、城内拝謁の間、正面入口の後方は、大廊下で、
入口の左右に幕があり、その突きあたりが扉になっている。
今、ラッパの吹奏。国王と王妃は、ローゼンクランツと
ギルデンスターンおよび廷臣たちを従えて登場する。……

まず、国王は、「……おお、ようこそ、ローゼンクランツとギルデンスターン。以前から一度ぜひ会いたかったところへ、急に二人の力を借りなければならないことが起って、急ぎ使いを出した次第。うすうす聞いてもおられようが、ハムレットはすっかり変わってしまった。というのは、表ばかりではない、心のうちまでも昔とは似ても似つかぬ変わりようなのだ。その原因はなにか、さしあたり父親の死以外に、おのれを失うほどあれの理性を狂わせたものは、これと言って思い当たらぬのだ。そこで二人に折り入って頼みたい。幼い頃からずっと一緒に育ち、あれの若い頃の気心もよく分っているはず、しばらく宮廷にとどまり、そして、ハムレットのそばにいて、あれの心を慰めてはくれまいか。そのうちに機会があれば、それとなく探りを入れてもらいたい。まだわれわれの知らぬ意外な悩みの種が見つかるかも知れぬ。その原因が分かれば、それをなおす手立てもつかめるかもしれぬ」と言うのであった。

また、王妃も、「……あなた方お二人の噂は、ハムレットからよく聞いておりますよ。いちばん気の合った親友だと言っておりました。もしお二人が、私どもへの好意から、しばらくここに滞在をして、私どもの頼みを聞き入れて力を貸してくだされば、必ず国王もお喜びになり、あなた方に相応のお礼をいたしますよ」と言う。すると、ローゼンクランツは、「……お頼みとは恐れ多いこと、両陛下にはその至上の大権をもって、御意のまま御命令を仰せ付けられてこそ、然るべきかと存じます」と言う。また、ギルデンスターンも、「……さすれば、われわれ両人喜んでご命令に従い、骨身惜まずあらん限りの力を振るってご奉公いたします」と言う。それを聞いて、国王は、「……かたじけないぞ、ローゼンクランツ、ギルデンスターン」と言い、王妃も、「……礼を申します。ギルデンスターン、ローゼンクランツ。では、これから、すぐに変り果てたあの子のところへ行ってやって下さい。だれか、お両方をハムレットのところへご案内して……」と言う。ギルデンスターンは、「……願わくはハムレット様が私どものお相手を喜ばれ、私どものすることがお役に立ちますよう、天に祈ります」と言うと、王妃も、「……どうぞそうなりますように（アーメン）……」と言うのであった。（本文）

＊　＊

さて、この場面は、ハムレットの顔になぜいつも雲がかかっているのか？　その真の「理由」がどうしてもよく解らず、国王や王妃様の心を深く「悩まし苦しめ」続けているのであり、それゆえ、幼い頃からずっと一緒に育ち、気心をよく知れている「ローゼンクランツとギルデンスターン」のこの二人に急遽「使者」を送り、宮廷に呼び寄せているのである。そして、本文では、「……おお、ようこそ、ローゼンクランツとギルデンスターン。以前から一度会いたかったところへ、急に二人の力を借りなければならないことが起って、急ぎ使いを出した次第」となり、その「理由」としては、「……うすうす聞いてもおられ

ようが、ハムレットはすっかり変わってしまった。というのは、表ばかりではない、心のうちまでも昔とは似ても似つかぬ変わりようなのだ。その原因はなにか、さしあたり父親の死以外に、おのれを失うほどあれの理性を狂わせたものは、これと言って思い当たらぬのだ。そこで二人に折り入って頼みたい。幼い頃からずっと一緒に育ち、あれの若い頃の気心もよく分っているはず、しばらく宮廷にとどまり、そして、ハムレットのそばにいて、あれの心を慰めてはくれまいか。そのうちに機会があれば、それとなく探りを入れてもらいたい。まだわれわれの知らぬ意外な悩みの種が見つかるかも知れぬ、その原因が分かれば、それをなおす手立てもつかめるかもしれぬ」と言うのであった。

　また、王妃も、「……あなた方お二人の噂は、ハムレットからよく聞いておりますよ。いちばん気の合った親友だと言っておりました。もしお二人が、私どもへの好意から、しばらくここに滞在をして、私どもの頼みを聞き入れて力を貸してくだされば、必ず国王もお喜びになり、あなた方に相応のお礼をいたしますよ」と言うのであった。

　これは、まず、一つは、ハムレットは、ほんとうに「狂気を帯びてしまったのか？」、それとも、いわば「狂気を装っている」だけなのか？　それを真に「見極めたい」ということであり、そのためにこそ、幼い頃からずっと一緒に育ち、気心をよく知れている「ローゼンクランツとギルデンスターン」のこの二人に急遽「使者」を送り、宮廷にわざわざ呼び寄せているのである。この「二人」ならば、恐らく、その微妙な「違い」を感じ分けることができ得るだろうと見ているのである。そして、もう一つは、まさに「狂気を装っている」のであれば、それは、一体、何のためなのか？　まさか「先王殺し」がばれているはずもないと思うが、そのようなことが「不安」になっているのである。――つまり、ハムレットは、その「頭の中」（或いは「心の中」）で、一体、何を考えているのか？　その「本心」がぜひとも知りたいということであり、そのためにこそ、「二人」を呼び寄せて、ハムレットにはわからないように探りを入れてほしいということである。――一方、「二人」は、「……われわれ両人喜んでご命令に従い、骨身惜まずあらん限りの力を振るってご奉公いたしまする」となるのである。

　　そして、ローゼンクランツとギルデンスターンはお辞儀をして、
　　数名の廷臣に案内させて退場する。一方、ポローニアスが登場して、
　　国王だけに語りかける。……

　まず、ポローニアスは、「……陛下、ノルウェーから使者が戻りました。よい知らせをもってでございます」と告げる。国王は、「……おお、そちはいつも吉報をもたらす福の神だな」と言うと、ポローニアスは、「……さようでございますか？　恐れながら、私は務めを後生大事に神と陛下とに専ら捧げている者でございます。そしてまた、私はハムレット王子の狂気の真の原因を突き止めましたように考えます。もしそれが間違っていますなら、この私の頭は以前のように抜かりなく、政治の道をかぎ分けて進んで行くことは、もう出来なくなったのでしょう」と言う。すると、国王は、「……おお、それを話してくれ、ぜひとも聞きたい」と言うが、ポローニアスは、「……まずは使者にお目通りを、私の話は、その大御馳走の後に出ます果物ということに」と言う。国王は、「……では、そち自身が懇ろに迎えに行って、ここへ連れて来るように」と言う。（ポローニアスは退場

し）、続けて、国王は、「……ガートルード、そなたの息子の気鬱の原因を、見事に突き止めたと申しておるぞ」と言う。それに対して、王妃は、「……さ、どうですか。やはり、父の死とか私たちの早すぎる結婚とか、それ以外は考えられませんが」と言う。国王も、「……うむ、まあいずれ詳しく問いただしてみよう」と言うのであった。（本文）

＊

さて、この「場面」は、国王にとって二つの「吉報」がもたらされる場面であるが、その一つは、かねて派遣していたノルウェーへの二人の使者たちからの「吉報」であり、そして、もう一方は、ハムレット王子の狂気の真の原因を突き止めましたという、内大臣（ポローニアス）からの「吉報」である。――まず、最初の「吉報」であるが、それは、かつて奪われた「領土」を奪還しようとする若輩のフォーティンブラスの企てに対して、その若輩のフォーティンブラスの叔父に当たるノルウェー王に、甥のその行動を取り抑えるように認めた「親書」をノルウェー王へ持参することになるが、その使者として、二人（コーネリアスとヴォルティマンド）を派遣し、無事に使命を果すことになるが、それは、国王（＋内大臣）の「最善の策」のお陰であり、最悪の事態である「戦争」を回避することになるのである。そして、もう一つの「ハムレット王子の狂気の真の原因を突き止めました」という「吉報」の方は、結果、思いもかけないような「新たな方向」へと物語を展開させる契機となるもので、この二つの「吉報」のより詳しい説明が次に続くのである。

＊

――ポローニアス、ヴォルティマンドとコーネリアスを伴い登場する。

さて、国王は、「……ご苦労であった。早速だが、ヴォルティマンド、ノルウェー王からの返事は？」と聞くと、ヴォルティマンドは、次のように答えるのであった。つまり、「……まずは丁重なごあいさつ、陛下によろしくとのこと。それから第一回の交渉で、王はただちに甥御に使いを送り、募兵をさし止められました。王はそれを対ポーランドの戦備のためと思っておりましたが、調査の結果、陛下に対して事を起こすためのものとの事実をつかみ、病弱と老齢ゆえになすことなく欺かれておったと、いたくお嘆きになりました。そこで甥御フォーティンブラスにご命令を出され、甥御も結局はその王命に従い募兵を中止され、老王のおとがめに服し、もう二度と陛下に対して兵を挙げようという無謀な試みはしないと、叔父上の前で固く誓言をなさいました。ノルウェー王は、それを聞いてことのほかお喜びになり、年金三千クラウンを賜い、すでに集めた軍勢を、そのままポーランド攻略のために用いる権限をお許しになりました。つきましては、委細はこの書面に記されておりますが、その出兵のために陛下のご領土内を通過したく、安全の保証と進軍の許可を、ここにしたためた条件によって、ご承認いただきたいとの申し出でございます」と報告する。それを聞いて、国王は、「……（書面を受け取り）、うむ、満足であるぞ。この件については、いずれ十分吟味し、熟慮した上で返答することにしよう。守備よく使命を果たされた骨折り、ご苦労であった。さ、さがって休むがよい。夜には祝杯の宴を張ろうぞよ」と言うのであった。（本文）

＊

さて、これは、かねて派遣していたノルウェーへの二人の使者たちからの「吉報」であり、そして、そのノルウェー王との交渉の詳しい「内容」説明になっているかと思うが、

その主な「内容」は、「……第一回の交渉から、王はただちに甥御に使いを送り、募兵をさし止められた。王はそれを対ポーランドの戦備のためと思っていたが、調査の結果、実はわが国（デンマーク）相手とわかり、病弱と老齢のためすっかり欺かれていたことを、老王はいたくお嘆きになるとともに、甥御フォーティンブラスにご命令を出され、甥御も結局はその王命に従い募兵を中止され、もう二度と陛下に対して兵を挙げようという無謀な試みはしないと、老王の前で固く誓言された」ということによって、最悪の事態、つまり、ノルウェーとの「戦争」は回避されたと同時に、かえって、二国間の「信頼と友好」がより深まったということでは、まさに正真正銘の「吉報」になるのである。

次に、「……ノルウェー王は、それを聞いてことのほかお喜びになった」とあるが、それは、甥御が自分の命令に素直に従ってくれたことが、老いたノルウェー王にとってはこの上もなく嬉しいことであり、それは、命令に従わないどころか、反逆や謀反、その他、どのようなことをあり得るからである。そして、「……すでに集めた軍勢を、そのままポーランド攻略のために用いる権限をお許しになった」とあるが、それは、すべてを「禁止」したら、甥御の「心の中」に実に様々な「不平や不満」などが蓄積され、終には自分への「反逆」ともなりかねないことを十分に考慮に入れてのことである。そして、「……出兵のために陛下のご領土内を通過したく、安全の保証と進軍の許可を、ここにしたためた条件によって、ご承認いただきたいとの申し出でございます」ということに対しては、「……いずれ十分吟味し、熟慮した上で返答すること」として、守備よく使命を果たされた二人の労をねぎらい、そして、夜には祝杯の宴を張ろうぞよ」となるのである。

——ヴォルティマンドおよびコーネリアスの退場——

さて、ポローニアスは、「……この件は首尾よく片づきましたな。さて、両陛下、国王の主権とは何か？　臣下の義務とは何か？　なにゆえ、昼は昼、夜は夜、時は時であるのか、などを論じるのは、夜を、昼を、時を、空費するのみです。簡潔は知恵の精髄、冗漫はいわば手足、うわべの飾りに過ぎませぬによって、私は簡潔に申上げます。即ち、王子は狂気なのでございます。あえて狂気と申上げます。何故かと申しますと、真の狂気を定義いたしますと、それは何であるかと言えば、ただ狂気以外の何物でもないということになります。が、それはそれとしましょう」と言うと、王妃は、「……もっと肝心の用件を、言葉のあやは少くして」と言う。ポローニアスは、「……いや、陛下、少しも言葉のあやは使ってはおりませぬ。王子様の狂気はまこと、まことにお気の毒、——これこそ愚かしい言葉のあやですが、もう一切言葉のあやはやめて、とにかく、王子様は狂気、ということに一応いたして、次に残る問題は、かかる結果の原因は、と言うよりも、かかる欠陥の原因を突き止めることでございます。なぜかと申せば、この欠陥的結果には原因あってこそ生じたものであり、残る問題はこれであり、そして、その残された問題の結論は、こうなのであります。いざ、御考慮の程を、と言い、（上着より紙切を取り出す。）

私は一人の娘を持っております——あれがまだ私の娘でいる限り、私が持っておりますが、その娘が親孝行で素直にも、まあ、御覧下さい、こんなものを私に手渡しました。いざ、御賢察下されませ」と言って読み始める。それは、「……天使のごときわが心の偶像、美の化身、オフィーリアよ」——これは、拙いですな、へたな言い回しですな、「美の化

身」とはいかにも拙いですな。だが、次をお聞き下さい、こうあります。「……そのたおやかなる真白き胸の中に、これなる文を……」と読むと、王妃は、「……それは、ハムレットからオフィーリアへの文ですか？」と聞く。ポローニアスは、「……陛下、しばらくお待ち下され。ありのままに読んでお聞かせいたしますから」と言う。それは、次のような内容のものである。――つまり、「……星の燃ゆるを疑おうとも、太陽の動くを疑おうとも、真実のまことなるを疑おうとも、わが愛を疑うなかれ。おお、オフィーリア、私は詩を作るのは苦手であり、胸の想いを行別に書き顕すなんて出来っこない。だが、私はお前を愛している。誰よりも何よりも愛している。それだけは信じてくれ！　さようなら。この体が自分のものである限り、いとしきオフィーリアよ、永遠にお前のものである、ハムレットより」とある。――「……この手紙を、娘は言いつけ通り見せまして、その上、いつ、いかように、どこで言い寄られたか、一部始終を打ち明けてくれました」と言う。

（本文）

＊　＊

　さて、ポローニアスは、最初、「……さて、両陛下、国王の主権とは何か？　臣下の義務とは何か？　なにゆえ、昼は昼、夜は夜、時は時であるのか、などを論じるのは、夜を、昼を、時を、空費するのみです。簡潔は知恵の精髄、冗漫はいわば手足、うわべの飾りに過ぎませぬによって、私は簡潔に申上げます」とあるが、これは、「私は簡潔に申上げます」という言葉を導き出すための、まさに「話の枕」（前置き）に過ぎず、「本題」は、その次にあるのであり、それは、すなわち、「……王子は狂気なのでございます。あえて狂気と申上げます。何故かと申しますと、真の狂気を定義いたしますと、それは何であるかと言えば、ただ狂気以外の何物でもないということであり」、それでは、なぜ、「……王子は狂気となられたのか？」、その直接の「原因」として、ポローニアスは、自分の娘（オフィーリア）との「恋の破局」（つまり失恋）にあると見ているのである。その「証拠の品」として、まさに「ハムレットからオフィーリアへの文」（紙切）を上着から取り出して、まさに読み上げているのである。その「内容」は、次のようなものである。つまり、「……天使のごときわが心の偶像、美の化身、オフィーリアよ！　そのたおやかなる真白き胸の中に、これなる文（言葉）を……。ああ、たとえ、星の燃ゆるを疑おうとも、太陽の動くを疑おうとも、真実のまことなるを疑おうとも、わが愛を疑うなかれ！　おお、オフィーリアよ！　私は詩を作るのは苦手であり、胸の想いを行別に書き顕すなんて出来っこない。だが、私はお前を愛している。誰よりも何よりも愛している。それだけは信じてくれ！　さようなら。この体が自分のものである限り、いとしきオフィーリアよ、永遠にお前のものである」（ハムレットより）となるのである。

　すると、国王は、「……で、オフィーリアはこの恋をどう迎えたのか？」と聞く。ポローニアスは、「……陛下は私をどのような人間だとお思いで？」と聞くので、国王は、「……立派な忠義の臣と心得ておるが」と言う。ポローニアスは、「……そのようなお鑑識にかないますよう、私も心懸けております。ですが、私がこのすさまじい恋の翼が羽ばたきを始めたのを見ました時――実は、娘が打ち明ける前から、もう、私はこの恋を感じていましたので――もしも私が机や便箋よろしく、この恋に対して目をつぶって黙認していたとしたら、両陛下はどうお思いになるでしょう？　滅相もない！　私は即座に処置にとり

かかり、娘にはこう申し聞かせました。「……ハムレット様は一国の王子、お前なぞとは星が違う。もってのほかじゃ」と。そして、娘にいろいろ申し付けて、王子がいつも足を向けられるところからは身を避け、お使いが参っても会うな、恋のしるしの贈物も頂くなと、よく戒めて置きましたので、娘もようそれを守りましたおかげで、過失もせずすみました。ところが、王子は、手短に申せば、恋を斥けられて憂うつになり、それから食欲不振、それから不眠症、それから心身衰弱、それから気がふらふらになられ、かように転落してついに御発病ということになり、目下それでうわごとを言うておられまする最中、われわれ一同が悼み嘆いているわけでございます」と言う。国王は、「……（妃に向い）おまえはどう思う？」と聞くと、王妃は、「……そうかも知れませんね、全くありそうなことです」と言う。すると、ポローニアスは、「……これまでに、私がそうだと断言したことで、そうでなかった試しがありましたでしょうか？　あったならば承りたいものです」と言う。国王は、「……わしはないと思うぞ」と言う。ポローニアスは、「……（自分の首と肩を指さして）、万一そうでなければ、これをここから切り離して下さいませ。何か手ががりさえあれば、どんな秘密の真相でも、たとえそれが地球のまん中に匿されていようと、探し出して御覧に入れます」と言うのであった。（本文）

＊　＊

　さて、この「場面」で最も大事な「言葉」は、一体、何かと問えば、それは、一つは、内大臣（ポローニアス）の、「……陛下は私をどのような人間だとお思いで？」と聞くと、国王（クローディアス）は、「……立派な忠義の臣と心得ておるが」と答える部分と、もう一つは、内大臣（ポローニアス）の、「……これまでに、私がそうだと断言したことで、そうでなかった試しがありましたでしょうか？　あったならば承りたいものです」と言うと、国王（クローディアス）は、「……わしはないと思うぞ」と言う部分である。それでは、なぜ、この「部分」が何より大事かと問えば、それは、国王（クローディアス）と内大臣（ポローニアス）との「信頼関係」、特に国王（クローディアス）は、内大臣（ポローニアス）を、まさに「全面的に信頼している」という「確たる証拠」となるからである。それでは、その「全面的な信頼」は、一体、どこから生じて来たのだろうか？　それは、次のようなことである。――まず、先王の突然の「崩御」、実際は、現国王の「毒殺」であるが、恐らく、内大臣（ポローニアス）は、その事実は知らないでいるのであり、それは、王妃（ガートルード）もそうなのかも知れない。つまり、毒ヘビに噛まれて死んだとばかり思っているのである。だからこそ、二人とも、現国王（クローディアス）にはこれという疑いを持つこともなく、現国王に全面的に寄り添うことができ得るのである。

　そして、その先王の突然の「崩御」の後、例えば、先王の「葬儀」をはじめ、婚儀（結婚式）、そして、「戴冠式」、それに加えて、今度のノルウェー問題、その他、それらすべてを「仕切っていた」のは、まさに「内大臣」（ポローニアス）であるとともに、それらすべてがうまくいっているからこそ、現国王（クローディアス）からは、まさに「絶対的な信頼」を勝ち得ているのであり、その確かな「証しの言葉」が、まさに「……立派な忠義の臣と心得ておる」という言葉と、もう一つは、「……これまでに、私がそうだと断言したことで、そうでなかった試しがありましたでしょうか？　あったならば承りたいものです」と言うと、国王（クローディアス）は、「……わしはないと思うぞ」という言葉になるのである。そして、今度の「ハムレットの問題」についても、次のような「絶対的な

確信」を以って、次のように語るのである。つまり、「……ハムレット王子は、手短に申せば、恋を斥けられて憂うつになり、それから食欲不振、それから不眠症、それから心身衰弱、それから気がふらふらになられ、かように転落してついに御発病ということになり、目下それでうわごとを言うておられまする最中、われわれ一同が悼み嘆いているわけでございます」という結論になるのである。——それでは、なぜ、内大臣（ポローニアス）は、その「判断」を間違えてしまったのだろうか？　それは、「……先王は、庭園でたまたま昼寝をしている時に、毒ヘビに噛まれて死んだのではなく、実は、現国王（クローディアス）によって、昼寝をしている時に、耳から劇薬を流されて殺されてしまった」という、この「事実」を知らないからである。それゆえ、ハムレット王子の「狂気」の原因は、まさに自分の娘（オフィーリア）との「恋の破局」（つまり失恋）にあると見ているのである。——また、この内大臣（ポローニアス）は、やがて、国王と間違えられて、ハムレットによって殺害されてしまうが、それは、一見、いわば「理不尽に殺されてしまった」という展開になっているが、しかし、国王（クローディアス）と内大臣（ポローニアス）との関係は、ほとんど「一心同体の関係」であり、たとえ先王「毒殺の事実」は知らなかったとしても、結果として、先王の「生命と王位と王妃」とを毒殺で奪った叔父（クローディアス）を、何と「国王」に祭り上げたのは、まさに内大臣（ポローニアス）であり、それゆえ、ハムレットに、一見、いわば「理不尽に殺されてしまった」という展開になっているが、しかし、作者（シェイクスピア）にしてみれば、それもまた「天罰」という「意味合い」があったのである。

　さて、ハムレットは、だらしない着こなしで書物を読みながら、後方の戸から廊下へ登場する。部屋の中の話し声を聞きつけて、カーテンの傍らにしばし立ち止まる。誰もそれに気づかない様子である。……

　国王は、「……だが、その真偽を試す方法はあるのだろうか？」と聞くと、ポローニアスは、「……ハムレット様は、よくこの廊下を長いことぶらつかれます」と言うと、王妃も、「……ええ、たしかに」と言う。ポローニアスは、「……そういう折りに、一つ娘を王子のところへ放って見ましょう。陛下と私とはカーテンの陰に隠れて、二人の出会いを密かにうかがうのです。王子が娘に言い寄ることもなく、恋の物狂いでもないと分れば、私をもう大臣から免じて下さい。牛馬を相手に百姓でもいたしましょう」と言う。すると、国王は、「……その手を試して見ようぞ」と言うのであった。（本文）

＊　＊

　さて、ハムレットの登場であるが、ハムレットは、だらしない着こなしで書物を読みながら、後方の戸から廊下へ登場するとある。——この「だらしない着こなしで」というのは、ある程度、狂気を装っているということなのかも知れない。そして、「……ハムレット様は、よくこの廊下を長いことぶらつかれますので、そのような折りに、一つ娘を王子のところへ放って見ましょう。陛下と私とはカーテンの陰に隠れて、二人の出会いを密かにうかがうのです」と言う、この「思いつき」（アイデア）こそは、ハムレット劇、最大の「見せ場」でもある、あの余りにも有名な「……生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ。……」という名場面へとつながって行くのである。……その前に、ポローニアス自

身が、ハムレット王子に直接話しかけて、そのハムレット王子の「様子に探りを入れる」という展開になっていくのである。

――ハムレット書物に目を注ぎながら前に出る。――

王妃は、「……あれ、ご覧なさいませ、あそこにハムレットが暗い顔つきで、何か読みながら来ましたよ」と言う。すると、ポローニアスは、「……さあ、両陛下とも、早うお身を匿しなさいませ、私がさっそく当って見ましょう」と言う。（王と妃は、急ぎその場を去る）。そして、ポローニアスは、「……これは、ハムレット様、ご機嫌はいかかですか？」と聞くと、ハムレットは、「……ああ、どうやら元気だ、おかげでな」と言う。ポローニアスは、「……私がおわかりですかな？」と聞くと、ハムレットは、「……ようわかっておる、魚屋だろう」と言う。ポローニアスは、「……いえ、とんでもございません」と言うと、ハムレットは、「……そうか、ではせめて魚屋ぐらい正直者であってほしいな」と言う。ポローニアスは、「……正直者であれと仰せられますか？」と聞く。ハムレットは、「……そうだ、君、この世の中じゃ、正直者は一万人に一人ぐらいだよ」と言うと、ポローニアスは、「……いかにも、その通りですな」と言う。ハムレットは、「……太陽が犬の死骸に口づけして蛆虫をわかせるように、（人間も）好ましい腐れ肉に口づけして蛆虫を生じせしめるが……。おまえには娘があるか？」と聞く。ポローニアスは、「……はい、ございます」と答えると、ハムレットは、「……あまり日向を歩かせるなよ。世の中を知ることは結構だが、知り過ぎて妊むのはよくないからな。まあ、気をつけるのだな」と言う。（再び読む）。ポローニアスは、「……（傍らを向いて）、それ見たことか。相変わらず娘に思いを寄せているわ。だが、最初、わしを見て、魚屋だなぞと言われた。大分狂っておられるわい。いや、わしも若い頃には、恋ゆえに、これに近う似た、苦しい思いをしたものだ。もう一度話して見よう。殿下、何を読んでいらっしゃいます？」と聞くのであった。（本文）

＊　＊

まず、最初は、王妃がハムレットの姿を見つけて、「……あれ、ご覧なさいませ、あそこにハムレットが暗い顔つきで、何か読みながら来ましたよ」と言うと、ポローニアスは、さあ、両陛下はこちらへ、「……私がさっそく当って見ましょう」ということで、「……これは、ハムレット様、ご機嫌はいかかですか？」と聞くと、ハムレットは、「……ああ、どうやら元気だ、おかげでな」と言う。ここまでは普通の会話であるが、その後、ポローニアスは、いきなり、「……私がおわかりですかな？」と聞く。これは、余りにも露骨で、いかにも「探りを入れている言葉」であり、それゆえ、ハムレットも、「……ようわかっておる、魚屋だろう」と皮肉たっぷりに言い返すのである。そして、この「魚屋」というのは、当時は「女郎屋」（或いは「女郎屋の亭主」）という「意味合い」もあったらしく、それでは、なぜ「女郎屋」（或いは「女郎屋の亭主」）になるのか？　それは、すでに国王と王妃の「婚儀」（淫らな情欲）を取り持ったことがあると共に、今度は、娘（オフィーリア）をハムレットの前に放って、その二人の「反応」を見ようとしているのである。

一方、ポローニアスは、ハムレットの「……魚屋だろう」という言葉を受けて、当然、「……いえ、とんでもございません」と言うと、ハムレットは、「……そうか、ではせめ

て魚屋ぐらい正直者であってほしいな」と言う。ポローニアスは、「……正直者であれと仰せられますか？」と聞く。ハムレットは、「……そうだ、君、この世の中じゃ、正直者は一万人に一人ぐらいだよ」と言うと、ポローニアスは、「……いかにも、その通りですな」と言う。この「正直者であれ」というのは、国王や王妃をはじめ、呼び寄せられた二人の学友、そして、今、まさに探りを入れているポローニアス、その他、揃いも揃ってみな嘘つきばかり、唯一、ハムレットが心の底から「信頼」しているのは、恐らく、親友（学友）でもある「ホレーシオ」一人ぐらいなのである。そして、ハムレットは、「……太陽が犬の死骸（腐肉）に口づけして蛆虫をわかせるように、（人間も）好ましい「腐肉」（女体）に口づけして蛆虫（子供）を生ませるが、……おまえには娘があるか？」と聞く。ポローニアスは、「……はい、ございます」と答えると、ハムレットは、「……あまり日向を歩かせるなよ。世の中を知ることは結構だが、知り過ぎて妊むのはよくないからな。まあ、気をつけるのだな」と言う。――これは、世間を知ることはよいが、世間を知り過ぎて、世間ずれすれば、人間はますます腐っていくのであり、女性の場合、妊娠することにもなるので、注意しろということである。すると、ポローニアスは、「……それ見たことか。相変わらず娘に思いを寄せているわ」と受けとめるのである。だが、「……最初、わしを見て、魚屋だなぞと言われた。大分狂っておられるわい」とあるが、これは、ハムレット王子は気が狂っていると決め込んでいるために、ふつうであれば、何か皮肉を言われたと感じると思うが、ポローニアスは、むしろ、「……大分狂っておられるわい」と解釈するのである。そして、ポローニアスは、自分の若い頃を思い出しては、「……いや、わしも若い頃には、恋ゆえに、これに近う似た、苦しい思いをしたものだ」と言い、そして、もう一度話して見よう、となるのである。

さて、ポローニアスが、「……ハムレット様、なにをお読みですな？」と聞くと、ハムレットは、「……言葉、言葉、言葉」と答える。ポローニアスは、「……いえ、その内容のことで？」と聞きなおすと、ハムレットは、「……内容？　おれにはあるように思えるが」と言う。ポローニアスは、「……いや、今お読みになっている事柄は何かと尋ねていますので」と言うと、ハムレットは、「……悪口だよ。悪口、口の悪いやつがこう書いている。老人は、髭は白く、顔は皺だらけで、目からは松脂のような目脂を出し、知能ははなはだしく退化し、あわせて膝関節に衰弱が見られる。これは確かに動かしようのない事実だが、こう書き立ててはあまりに失礼ではないかな。お前だって、かにみたいにうしろ向きに歩くことができれば、おれと同じ年（若さ）になれるはずだからな」と言う。（再び読む）。ポローニアスは、「……（傍らを向いて）、狂ってはいるが、言うことにちゃんと筋が通っているわい。殿下、外の空気はお体に毒、内へお入りなられては？」と言うと、ハムレットは、「……自分の墓穴にか」と言う。ポローニアスは、「……なるほど、そこは風が当たりませぬな。（傍らを向いて）、打てば、ひびくような返事がはね返ってくるわい、狂人というものはよくまあまぐれ当たりにうまいことを言うものだ。正気の人間には思いもよらぬ言葉が飛び出すからな。ここはひとまず切り上げて、さっそく娘と出会わせる算段をしよう。それでは、殿下、これでお暇を頂きとうございます」と言うと、ハムレットは、「……ああ、そのお暇ぐらいぼくが喜んでおまえに進上したいものは何もないぞ。だが、おれの命は別だがな。おれの命、おれの命は……」と言う。ポローニアスは、

「……では、ご機嫌よろしゅう」と言って、丁寧にお辞儀する。ハムレットは、「……うるさい老いぼれだ！」と呟くのであった。（本文）

＊　＊

さて、ポローニアスが、「……ハムレット様、なにをお読みですな？」と聞くと、ハムレットは、「……言葉、言葉、言葉」と答える。これは、「本を読む」とは、まさに「言葉」（文字）を読むことに他ならないが、ポローニアスは、「……いえ、その内容のことで？」と聞きなおすと、今度は、ハムレットは、「……内容？　おれにはあるように思えるが」と言う。これは、「ないよう」と「あるよう」との言葉のあやであり、この部分は、色々な「翻訳」があり、例えば、「……いえ、どういう問題でございます？」と聞くと、「……問題？　娘が問題を起したのか」とか、「……いえ、その中にはどんなことが」と聞くと、「……なか？　誰と誰とのなか」とか、その他、この部分は、そういう「言葉のあや」になっているだけで、その「本題」は、次のところにあるのである。つまり、「……悪口だよ。悪口、口の悪いやつがこう書いている。老人は、髭は白く、顔は皺だらけで、目からは松脂のような目脂を出し、知能ははなはだしく退化し、あわせて膝関節に衰弱が見られる。これは確かに動かしようのない事実だが、こう書き立ててはあまりに失礼ではないかな。お前だって、かにみたいにうしろ向きに歩くことができれば、おれと同じ年（若さ）になれるはずだからな」と言う。――これは、もちろん、ポローニアスの「悪口」を「本の内容」（うその内容）に当てつけて言っているのであり、ハムレットは、そのしつこく質問をして来る「ポローニアス」をいやがっているのであり、だからこそ、「……これでお暇を頂きとうございます」と聞くと、「……ああ、そのお暇ぐらいぼくが喜んでおまえに進上したいものは何もないぞ」となるが、ここで大事なことは、その続きで、一つは、「……お暇でも、何でもやる。命だってやる。命でも、命でもな」というのと、もう一つは、「……だが、おれの命は別だがな。おれの命、おれの命は……」という、いわば二つの「翻訳」があり、ここでは、取り敢えず、後者を選んだということである。

　さらに、ポローニアスは、「……狂ってはいるが、言うことにちゃんと筋が通っているわい。殿下、外の空気はお体に毒、内へお入りなられては？」と言うと、ハムレットは、「……自分の墓穴にか」と言う。ポローニアスは、「……なるほど、そこは風が当たりませぬな。……打てば、ひびくような返事がはね返ってくるわい、狂人というものはよくまあまぐれ当たりにうまいことを言うものだ。正気の人間には思いもよらぬ言葉が飛び出すからな」と言う。――これは、結局、ハムレット王子は「気が狂っている」とそう決め込んでいるために、ふつうであれば、何か皮肉を言われているなと感じると思うが、ポローニアスは、むしろ、「……狂人というものはよくまあまぐれ当たりにうまいことを言うものだ。正気の人間には思いもよらぬ言葉が飛び出すからな」と逆に解釈してしまう。――例えば、「……打てば、ひびくような返事がはね返ってくる」とすれば、それは、真の「狂気」ではなく、むしろ「狂気を装っている」だけかも知れないという「疑い」が生じて来ても不思議はないが、ポローニアスのように、一度、こうだと決めつけてしまうと、その「決めつけ」からしか物事が見えないために、大きな「判断ミス」を犯すことは、現実にもいくらでもあることであり、だからこそ、柔軟さを欠いた、一方的な「決めつけ」こそは、何よりも「怖い」のであり、それは、致命的な「判断ミス」を犯すことになるからである。

――ローゼンクランツおよびギルデンスターンの登場となる。――

ポローニアスは、「……ハムレット様をお尋ねですかい？　そら、あそこにおいでだ」と言う。（退場）、ローゼンクランツは、「……（ポローニアスへ）、閣下、では失礼します」と言う。それから、ギルデンスターンは、「……殿下！」と言い、ローゼンクランツも、「ハムレット様！」と言う。ハムレットは、「……（顔を上げて）、やあ、君たち、元気か！　ギルデンスターン？　（書物を閉じ）、ああ、ローゼンクランツ？　両人とも、この頃はどうなのだ？」と聞く。ローゼンクランツは、「……まあまあ世間並みというところです」と言うと、ギルデンスターンも、「……あまり仕合せ過ぎないのが仕合せといったところです。運命の女神の帽子のてっぺんの飾りというわけにはいきません」と言う。ハムレットは、「……そして、女神のくつの底でもないか？」と聞くと、ローゼンクランツは、「……そのとおりです」と言う。ハムレットは、「……では、君たちは彼女の腰のあたりか、彼女の寵愛の真中あたりで生活しているのだな？」と聞く。ギルデンスターンは、「……まあ、ほどよくかわいがられているほうで」と言う。ハムレットは、「……ほどよく？　情慾でかわいがられているほうだろう。ありそうなことだ。運命の女神は淫婦だからな。ところで、何か変った話でもないか？」と聞く。すると、ローゼンクランツは、「……何もありませんが、ただ世の中も大分まともになってきました」と言う。ハムレットは、「……とすれば、この世の終りも近いわけだな。だが、その情報は間違っているぞ。一つたずねてみるが、一体、君らは運命の女神からどんな怨みを受けて、こんな牢獄へ送られたのかい？」と聞く、ギルデンスターンは、「……牢獄とおっしゃいますと？」と聞くと、ハムレットは、「……デンマークは牢獄だよ」と言う。ローゼンクランツは、「……それならば、世界は牢獄です」と言う。ハムレットは、「……うむ、大きな牢獄だ。その中には座敷牢も監房も地下牢もある。そして、デンマークが一番ひどい牢獄だよ」と言う。ローゼンクランツは、「……ぼくたちはそうは思いません」と言う。ハムレットは、「……じゃ、君たちはそうじゃないのだ。物の善悪はただ考え方一つで、ぼくにとっては牢獄なのだ」と言う。ローゼンクランツは、「……そりゃ、殿下の御理想が高いせいでしょう。殿下の御気象にとっては、この国が狭すぎるのでしょう」と言う。ハムレットは、「……とんでもない。ぼくは、くるみのからの中に閉じ込められても、無限の大宇宙の主人公と思っていられる性だよ――ただ悪い夢さえ見なければね」と言う。ギルデンスターンは、「……その夢が、実は、理想なのです。理想家の求めるものそれ自体は、夢の影に過ぎませんから」と言う。ハムレットは、「……夢それ自体影じゃないか？」と言う。ローゼンクランツは、「……その通りです、そして、大理想はあまりにも空漠として、影の影に過ぎませぬ」と言う。ハムレットは、「……それなら、乞食が実体で、世の王侯貴族英雄たちは乞食の影ということになるな、これから宮廷の広間にでも行こうか？　理屈っぽい話は、もう、たくさんだからな」と言う。ローゼンクランツとギルデンスターンは、「……はい、お供いたします」と言うのであった。（本文）

＊　＊

さて、ローゼンクランツおよびギルデンスターンの二人が尋ねてきて、お互いにあいさつをし合ったあと、ハムレットは、「……この頃はどうなのだ？」と聞くと、ローゼンク

ランツは、「……まあまあ世間並みというところです」と言い、ギルデンスターンも、「……あまり仕合せ過ぎないのが仕合せといったところです。運命の女神の帽子のてっぺんの飾りというわけにはいきません」と言う。ハムレットは、「……そして、女神のくつの底でもないか？」と聞くと、ローゼンクランツは、「……そのとおりです」と言う。ハムレットは、「……では、君たちは彼女の腰のあたりか、彼女の寵愛の真中あたりで生活しているのだな？」と聞く。ギルデンスターンは、「……まあ、ほどよくかわいがられているほうで」と言う。ハムレットは、「……ほどよく？　情慾でかわいがられているほうだろう。ありそうなことだ。運命の女神は淫婦だからな」とある。

　まず、ここまでを見てみたいと思うが、例えば、「……運命の女神の帽子のてっぺんの飾りのところ」であるならば、それは、この上もなく運命の女神の寵愛を一身に受けて無上の仕合せな生活をしている情況であり、一方、「……運命の女神のくつの底である」ならば、それは、運命の女神の寵愛からは完全に見放されて、まさにどん底の生活を強いられている情況であるが、二人（ローゼンクランツとギルデンスターン）の場合は、丁度、「……運命の女神の寵愛の真中あたりを受けて生活をしている情況」であり、それゆえ、「……まあ、ほどよくかわいがられているほうで」となり、ハムレットは、「……ほどよく？　情慾でかわいがられているほうだろう」とあるが、これは、「……ほどよく情慾（下半身部分）でかわいがられているほうだろう」となり、そして、「……運命の女神は淫婦だからな」とあるが、これは、「……女神とは言えども、女性は女性、淫婦（淫慾）の運命からは、逃れられない」という「意味合い」も含むのである。

　次に、ハムレットは、「……ところで、何か変った話でもないか？」と聞くと、ローゼンクランツは、「……何もありませんが、ただ世の中も大分まともになってきました」と言う。ハムレットは、「……とすれば、この世の終りも近いわけだな。だが、その情報は間違っているぞ。一つたずねてみるが、一体、君らは運命の女神からどんな怨みを受けて、こんな牢獄へ送られたのかい？」と聞く、ギルデンスターンは、「……牢獄とおっしゃいますと？」と聞くと、ハムレットは、「……デンマークは牢獄だよ」と言うのであった。――例えば、ローゼンクランツが、「……世の中も大分まともになってきました」と言うと、なぜ、ハムレットは、「……この世の終りも近いわけだな。だが、その情報は間違っているぞ」となるのか？　それは、デンマークでは、現実に残虐な「国王毒殺」という事件が起きているのに、それが「まとも」だとすれば、まさに「この世の終りも近い」ということであり、それゆえ、「……世の中も大分まともになった」という情報も、まさに「間違い」になるのである。そして、ハムレットは、なぜ、「……一つたずねてみるが、一体、君らは運命の女神からどんな怨みを受けて、こんな牢獄へ送られたのかい？」と聞く。――これは、当然、国王や王妃に呼ば出されて、わざわざ自分の様子を探りに来ていると見抜いているからであり、それでは、なぜ、「デンマークは牢獄なるのか？」と問えば、それは、一つは、まさに先王を毒殺した犯罪者が国王として支配している国だからであり、そして、もう一つは、例えば、国王や王妃をはじめ、内大臣のポローニアス、そして、呼び出された二人の学友、その他、ハムレットは、絶えず周囲の目に「監視」されている情況であり、それを、いわば「牢獄」と見ているのである。

　さて、ハムレットが、「……これから宮廷の広間（御前）にでも行こうか？」と言うと、

ローゼンクランツもギルデンスターンも、「……はい、お供いたします」と言うのを聞いて、ハムレットは、「……いや、とんでもないこと。君たちをほかの召使と同類とは考えたくない。じつを言えば、ぼくはもう恐ろしいほどに附きまとわれているのだ。それはそうと、君たちはエルシノアになんのようで来たのだ？　昔のよしみに、ほんとうのことを言ってくれ」と言う。ローゼンクランツは、「……殿下の御機嫌を伺いますためで、別にわけとて何もありません」と言う。ハムレットは、「……ぼくは現にこの通り乞食の身分なので、お礼の言葉にさえ乏しい。しかし、まあ、有難う。だが、ぼくのお礼はたった一銭でも高すぎる。時に、君たちは呼ばれたのじゃないか。それとも、自発的なのか？　全く自由意志から尋ねて来てくれたのか？　さあ、正直に言って貰いたい。さあ、さあ、言ってくれ」と言う。ギルデンスターンは、「……なんと申上げてよろしいやら……」と言うと、ハムレットは、「……なんとでもよい、ただ要領を得た答えをしてくれ。使いが行ったんだな？　さすがに恥を知っている君たちは、匿し切れないで、顔色が白状しているよ。国王や王妃から使いが来たんだろう？」と言う。ローゼンクランツは、「……なんの為にでしょうか？」と聞く。ハムレットは、「……それはこちらが聞いているのだ。幼なじみの友情に訴えて、親友の信義に訴えて、その他、もっと弁舌さわやかな者がまくし立てる、あらゆる有力なものに訴えて頼む、包み匿さず白状してくれ、使いがきたのか、そうでないのか？」と聞く。ローゼンクランツは、「……（傍らを向いてギルデンスターンへ）、なんとしたらいいのか？」と言う。ハムレットは、「……だめだ、だめだ、ちゃんと見ているぞ！　（普通に）ぼくの友だちなら、そんな水くさい真似をするな」と言う。ギルデンスターンは、「……殿下、お使いが参りましたのです」と言う。ハムレットは、「……そのわけをぼくが話してやろう。そうすれば、君たちが漏らしたと言うことにもなるまいし、国王や王妃に君たちが誓った秘密の信義もはげずにすむわけだ。ぼくは、最近、どうしてか、すっかり陽気でなくなって、日頃たしなんでいたスポーツなどもやめてしまったんだ。全く気がふさいでむしゃくしゃして、この素晴しい地球という建造物（大地）も、荒涼たる岩端（岬）のように思われ、この立派な青空も、そら、見給え、金色に輝く星をちりばめた大天井も、ぼくには濁った毒気の集まりとしか思われないのだ。それにまた、人間とは自然の何と驚くべき傑作だろう！　高貴な理性と無限の能力、見事な姿と立派な動き、その振舞いはさながら天使だ！　知恵はさながら神様だ！　世界を飾る美の極致、万物の霊長だ！　だが、ぼくにとっては、その人間が多寡の知れた塵芥としか思われない。人間を見ても楽しくはないのだ。女だって同じだ。にやにや笑っているのは、女ならば（そうではあるまい）と言いたいのだろう」と言う。（本文）

＊　　＊

さて、この「場面」は、ハムレットが、「……君たちはエルシノアになんのようで来たのだ？　昔のよしみに、ほんとうのことを言ってくれ」と言うと、ローゼンクランツは、「……殿下の御機嫌を伺いますためで、別にわけとて何もありません」と言うのを聞いて、ハムレットは、これでは埒があかないと思って、ハムレットは、思い切って、「……時に、君たちは呼ばれたのじゃないか。それとも、自発的なのか？　全く自由意志から尋ねて来てくれたのか？　さあ、正直に言って貰いたい。さあ、さあ、言ってくれ」と強く迫るのである。すると、ギルデンスターンは、「……なんと申上げてよろしいやら……」とうろたえるので、ハムレットは、「……なんとでもよい、ただ要領を得た答えをしてく

れ。使いが行ったんだな？　さすがに恥を知っている君たちは、匿し切れないで、顔色が白状しているよ。国王や王妃から使いが来たんだろう？」と迫る。ローゼンクランツは、「……何の為にでしょうか？」と苦し紛れに言うと、ハムレットは、「……それはこちらが聞いているのだ。幼なじみの友情に訴えて、親友の信義に訴えて、その他、もっと弁舌さわやかな者がまくし立てる、あらゆる有力なものに訴えて頼む、包み匿さず白状してくれ、使いがきたのか、そうでないのか？」と問いただされて、結局、ギルデンスターンは、

「……殿下、お使いが参りましたのです」と白状してしまうのである。

すると、ハムレットは、「……そのわけをぼくが話してやろう。そうすれば、君たちが漏らしたと言うことにもなるまいし、国王や王妃に君たちが誓った秘密の信義もはげずにすむわけだ。ぼくは、最近、どうしてか、すっかり陽気でなくなって、日頃たしなんでいたスポーツなどもやめてしまったんだ。全く気がふさいでむしゃくしゃして、この素晴しい地球という建造物（大地）も、荒涼たる岩端（岬）のように思われ、この立派な青空も、そら、見給え、金色に輝く星をちりばめた大天井も、ぼくには濁った毒気の集まりとしか思われないのだ。それにまた、人間とは自然の何と驚くべき傑作だろう！　高貴な理性と無限の能力、見事な姿と立派な動き、その振舞いはさながら天使だ！　知恵はさながら神様だ！　世界を飾る美の極致、万物の霊長だ！　だが、ぼくにとっては、その人間が多寡の知れた塵芥としか思われない。人間を見ても楽しくはないのだ。女だって同じだ。にやにや笑っているのは、女ならば（そうではあるまい）と言うたいのだろう」と続く。

さて、ハムレットが、まさにこの「言葉通り」の「心的状態」であったとすれば、それは、今日の「医学用語」で言えば、それは、まさに「うつ状態」（或いは躁うつ状態）に近いものであり、それは、今までは活発に活動していた人が、あることをきっかけとして、例えば、ハムレットの場合は、先王の突然の死、それに伴う国王や王妃などに対する様々な「疑念や不信」など、それに加えて、先王の「亡霊の言葉」などによって、ハムレットという人は、次のような「精神状態」に深く陥ってしまったのである。

つまり、「……ぼくは、最近、どうしてか、すっかり陽気でなくなって、日頃たしなんでいたスポーツなどもやめてしまったんだ。全く気がふさいでむしゃくしゃして、この素晴しい地球という建造物（大地）も、荒涼たる岩端（岬）のように思われ、この立派な青空も、そら、見給え、金色に輝く星をちりばめた大天井も、ぼくには濁った毒気の集まりとしか思われないのだ。それにまた、人間とは自然の何と驚くべき傑作だろう！　高貴な理性と無限の能力、見事な姿と立派な動き、その振舞いはさながら天使だ！　知恵はさながら神様だ！　世界を飾る美の極致、万物の霊長だ！　だが、ぼくにとっては、その人間が多寡の知れた塵芥としか思われない。人間を見ても楽しくはないのだ。女だって同じだ。にやにや笑っているのは、女ならば（そうではあるまい）と言いたいのだろう」と。

つまり、ハムレットという人は、一面では、狂気を装いながらも、一面では、いわば「うつ状態」（或いは躁うつ状態）に近い「心的状態」でもあったということであり、それゆえ、ハムレットの「精神状態」というのは、百％「健全な精神」状態であったというよりは、むしろ、多分に「うつ状態」（或いは「躁うつ状態」）をも含んだ「精神状態」であったということである。――これは、極めて大事な認識であり、一般に、ハムレットの「精神状態」というのは、極めて「健全なもの」であり、ただ「狂気を装っている」だけに過ぎないと考えがちであるが、実際はそうではなく、かなりの「うつ状態」（或い

は「躁うつ状態」）をも含んだ「精神状態」になっていたということである。

　さて、ハムレットが、「……人間を見ても楽しくはないのだ。女だって同じだ。にやにや笑っているのは、女ならば（そうではあるまい）と言いたいのだろう」と言うと、ローゼンクランツは、「……そんなことは夢にも」と言うので、ハムレットは、「……それでは、なぜ笑った、人間を見ても楽しくないと言った時に？」と聞く。ローゼンクランツは、「……人間を見ても楽しくないのであれば、役者たちは殿下からさぞかし冷たくあつかわれるだろうと思いましたので、丁度途中で役者たちの一行を追い越しましたが、今に殿下に芝居をお目にかけるのだと申しておりました」と言う。すると、ハムレットは、「……王様の役を演ずる奴は歓迎してやるぞ。その陛下には賞め言葉を呈してやる。武者修行の騎士には大いに立ち回りをさせる。恋の溜息には褒美をとらせる。気むずかしやには、喧嘩せずに役を終らせよう。道化役には、笑い上戸を差し向けよう。おやまには、どんなせりふでも遠慮なく言わせよ。抜かすと口調が悪くなるから。それはそうと、ここへ来たというのは、どの一座だ？」と聞くと、ローゼンクランツは、「……以前、ごひいきにされた都の悲劇役者たちです」と言うと、ハムレットは、「……この旅まわりはどうしたわけだ？　都にいた方が評判は高まり、収益も多く、一挙両得ではないか？」と言う。ローゼンクランツは、「……この前の事件のことで、芝居は御法度になったものと存じます」と言う。すると、ハムレットは、「……ぼくが都にいた頃の人気を、まだもっているのか？　役者どもは今でもわいわい騒がれているのか？」と聞く。ローゼンクランツは、「……いや、もう、そうは参りませぬ」と言う。ハムレットは、「……どうしてだ？　かびが生えてきたのか？」と聞く。ローゼンクランツは、「……いえ、相変わらず芸道には精進しています。けれど、殿下、当節は他を圧するかん高い声でせりふを使う、鷹の雛のような子供一座が現れて、これが恐ろしく大向う（観客）の人気をさらっているのです。その連中が今日の流行でして、彼らが在り来りの町の芝居を、舞台せりふでこき下ろすものですから、細身の剣を佩いた伊達男たちも、そのペンの力に恐れをなして、（悪口を言われるのがいやで）、大人の芝居小屋には近づこうともしないのです」と言う。

　ハムレットは、「……なんだ、子供か？　だれが抱えているのだ？　どのような手当を受けているのか？　その連中は、ただかん高いのどが続く間だけ、役者渡世をするつもりなのか？　その連中だって、年を取れば、ほかにもっとよい口でもなければ、多分、普通の役者になるほかはあるまい。とすれば、そのように自分の将来の悪口をいわされたことで、作者を怨むようなことにはならないのか？」と聞く。ローゼンクランツは、「……全く、双方のあいだの争いはたいへんなものでして、世間もこれを面白がってそれに油を注ぐようなことをしているのです。ひと頃は、子供芝居の作者と、在来の役者が、つかみ合いをする筋を入れなければ、その芝居は、舞台に乗ることすら出来ないほどでした」と言う。ハムレットは、「……そりゃほんとうか？」と言うと、ギルデンスターンは、「……いや、もう、さんざ、ののしり合いがございました」と言うと、ハムレットは、「……そして、子供役者が勝つのか？」と聞く。ローゼンクランツは、「……その通りで、まるで劇場までさらって行くばかりの勝ち方です」と言う。ハムレットは、「……いや、それは別に不思議なことではない。今はぼくの叔父が国王だが、父上の存命中は、叔父を馬鹿にしきっていたような連中も、この頃は叔父の小さい肖像画を二十、四十、五十、いや、百ダカ

ット出しても買おうとするのだから。実際、そこには哲学者でなければ発見できないような自然の条理を越えたものが存在しているのだ」と言う。（本文）

＊　＊

　さて、今度は、「旅役者」の話になって行くが、その切っ掛けは、ローゼンクランツの、「……人間を見ても楽しくないのであれば、役者たちは殿下からさぞかし冷たくあつかわれるだろうと思いましたので、丁度途中で役者たちの一行を追い越しましたが、今に殿下に芝居をお目にかけるのだと申しております」と言う。それを聞いて、ハムレットは、「旅役者」たちであれば、大歓迎であるが、それはそうと、ここへ来たというのは、どの一座なのだ？」と聞く。ローゼンクランツは、「……以前、ごひいきにされた都の悲劇役者たちです」と言うと、ハムレットは、なぜ、「……旅まわりなのだ？　都にいた方が評判は高まり、収益も多く、一挙両得ではないか？」と聞くと、ローゼンクランツは、「……この前のことで、芝居は御法度になったようで……」と言う。ハムレットは、「……ぼくが都にいた頃の人気は、まだあるのか？」と聞くと、ローゼンクランツは、「……いや、もう、そうは参りませぬ」と言う。ハムレットは、「……どうしてだ？　もう古くさくなってしまったのか？」と聞くと、ローゼンクランツは、「……いえ、相変わらず芸道には精進しています。けれど、殿下、当節は他を圧するかん高い声（黄色い声）でせりふを使う、鷹の雛のような子供一座が現れて、これが恐ろしく大向う（観客）の人気をさらっているのです。その連中が今日の流行でして、彼らが在り来りの町の芝居を、舞台せりふでこき下ろすものですから、細身の剣を佩いた伊達男たちも、その鵞ペン（羽根ペン）の力に恐れをなして、（それは、自分の悪口を書かれた上、観客の物笑いにされるのがいやで）、大人の芝居小屋には近づこうともしないのです」と言う。……

　まず、今や「子供一座」が大人気だとあるが、これは、それほど不思議なことではなく、例えば、映画や芝居或いはドラマその他などでも「子役」が大人気を博すことはいくらもあるとともに、主人公（中心人物）などを演じるのは、多くの場合、子供を含めた「若い人」であることが多いかと思うが、それは、たとえ「演技や歌やその他」などはどうであろうとも、子供や若い人たちが自然と持ち合わせている「自然の花」（その「容姿容貌言動」その他の「見た目の可愛さやぎこちなさ或いは綺麗さや格好良さその他」）などの魅力は絶大であり、それだけで多くの人の心を惹きつける魔力となり得るのである。それゆえ、若い時の「人気」というのは、その「演技や歌やその他」などがどうであるというよりも、その「演技や歌やその他」などは、若い人に比べて、ベテランの方が「上手い」に決まっているのである。ただ、ベテランの人たちには、人の心を無条件で惹きつけてやまない「自然の魔力」がもう弱いというだけである。……なぜ、アイドルたちが人気を得るのか？　それは、まさに「若さの魅力」であり、その「若さ」を失えば、アイドルとしては、魅力を失ってしまうのである。むろん、ベテランとして輝き出すとしても、それは、若い時の圧倒的な「人気」とは自ずと違うものになるのである。

＊　＊

　ハムレットは、「……なんだ、子供か？　だれが抱えているのだ？　どのような手当を受けているのか？　その連中は、ただかん高いのどが続く間だけ、役者渡世をするつもりなのか？　その連中だって、年を取れば、ほかにもっとよい口でもなければ、多分、普通の役者になるほかはあるまい。とすれば、そのように自分の将来の悪口をいわされたこと

で、作者を怨むようなことにはならないのか？」と聞く。ローゼンクランツは、「……全く、双方のあいだの争いはたいへんなものでして、世間もこれを面白がってそれに油を注ぐようなことをしているのです。ひと頃は、子供芝居の作者と、在来の役者が、つかみ合いをする筋を入れなければ、その芝居は、舞台に乗ることすら出来ないほどでした」と言う。ハムレットは、「……そりゃほんとうか？」と言うと、ギルデンスターンは、「……いや、もう、さんざ、ののしり合いがございました」と言うと、ハムレットは、「……そして、子供役者が勝つのか？」と聞く。ローゼンクランツは、「……その通りで、まるで劇場までさらって行くばかりの勝ち方です」と言う。ハムレットは、「……いや、それは別に不思議なことではない。今はぼくの叔父が国王だが、父上の存命中は、叔父を馬鹿にしきっていたような連中が、この頃は叔父の小さい肖像画を二十、四十、五十、いや、百ダカット出しても買おうとするのだから。実際、そこには哲学者でなければ発見できないような自然の条理を越えたものが存在しているのだ」と言う。

　これは、いつの時代でも、どこの国でも、他人の「悪口」などを言い合ってお互いに「面白がる」というのは、「笑い」の原点そのものであり、この時ほどわれわれ人間の感情が「盛り上がる」ことはないのである。特に、人の「悪口」を巧みに言い放つ人が、圧倒的な人気を得るのは、今も昔も変わりようはないのであり、おかしくておかしくて腹を抱えて笑い転げるようなことにもなるのである。そして、おかしくておかしくて腹を抱えて笑い転げるような時とは、必ず、誰かを何かを犠牲にした上に成り立つものであり、それゆえ、笑いというのは、一面では、非常に「残酷なもの」でもあるのである。また、ハムレットは、「……いや、それは別に不思議なことではない。今はぼくの叔父が国王だが、父上の存命中は、叔父を馬鹿にしきっていたような連中が、この頃は叔父の小さい肖像画を二十、四十、五十、いや、百ダカット出しても買おうとするのだから。実際、そこには哲学者でなければ発見できないような自然の条理を越えたものが存在しているのだ」とある。

　これは、例えば、権力をはじめ、医師、弁護士、建築家、作家、芸術家、プロスポーツ、また、大学教授、学者、先生、会長、社長、部長、課長、デザイナー、その他、それは、もうどのようなものであれ、今までは頭から馬鹿にされていたような人であっても、その人が何らかの「社会的な地位」（それは様々な「社会的な衣装」に過ぎない）を身につけると、その様々な「社会的な衣装」に見合ったような待遇を受けるようになるということであり、われわれ人間というのは、今までは誰も見向きもしなかったような人でも、例えば、その人が何らかの「社会的な衣装」などを身につけると、その中身（人間性）とは全く関係なく、どうしても、その「社会的な衣装」に見合ったような「対応の仕方」へと変化しやすいということである。――一方、もちろん、それがどれほど華やかな「社会的な衣装」であっても、所詮は、「衣装」は「衣装」であり、その人「自身」そのものとは違うのであり、例えば、医者であることと、医者として真に優れていることとは、全く別の問題であり、それら「衣装」は、すべて「その人の外」に存在するものであり、それら「衣装」だけで、その人自身が真に「優れた存在」になるわけではなく、それらを身に纏っているその人「自身」と、その豪華な「社会的な衣装」とは、もともと「別々のもの」であり、それゆえ、それらの様々な「社会的な衣装」などをすべて脱ぎ捨てても、なお、その人「自身」が、どれだけ人間として真に優れた「内的成長（成熟）」しているのかが、まさにその人の人間としての真の「評価」になるということである。

それに加えて、例えば、仕事をはじめ、芸術、芸能、スポーツ、趣味、その他、何であれ、何か一つのことに「特化している」ような場合、その分野に関しては専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けていながらも、その分野（専門）から離れてしまうと、ふつうの人（或いは「ふつうの人以下」）になってしまうというのは、一体、どういうことなのだろうか？　それは、次のようなことである。――例えば、仕事でも、音楽でも、スポーツでも、その他、何であれ、（子供の頃から）、そのことを何年も徹底的に学習し続ければ、やがては、専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けることになるだろうが、しかし、それは、人間として真に「内的成長（成熟）」することとは、全く全然違うことなのである。それでは、一体、何がどのように違うのかと言えば、何か一つのことに「特化する」というのは、ある一つのことの専門的な「知識や技術」などの習得であり、それは、いわば「道の器用」であり、「道の器用」というのは、その人の人間としての成熟度とは全く関係なく、本人の努力次第でいくらでも上達できるものなのである。

一方、人間として真に「内的成長（成熟）」するというのは、一つのことに「特化する」ことではなく、人間としての総合的な「内的成長（成熟）度」であり、それは、若い時の極めて旺盛な「知的遍歴」を経て、つまり、もの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）であるが、それこそは、まさに「神的な恋（エロス）」であり、それをプラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」（つまり「イデア界」）の方へと想いを寄せて、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとする、そのようなもの凄い「知識欲」であり、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることによってこそ、初めて、物事を極めて厳密に「認識（識別）」でき得るような真の「思考（思索）能力」というものが、しっかりと身につくことになるのである。

それは、つまり、その人の「生まれ育った環境（つまり家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他）」などの影響を非常に強く受けて自ずと形成された、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを、あらためて徹底的に「考え直して」みると、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それでは、こうなのかと、次から次へと「考え方」を新たにしていくうちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまい、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥ってしまうわけであるが、それは、言葉を換えれば、まさに根底からの「自己改革」が起こっている状態であり、そのような「心の状態」から、やがて、真に「内的成長（成熟）」を遂げることによってこそ、初めて、「自らものを考え、自ら判断する自由を得る」ことにもなるわけである。

そして、人間として真に「内的成長（成熟）」することによって、初めて、人間として真に成熟した「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。それは、すなわち、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になる、ということであるとともに、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。それに加えて、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行するということである。それゆえ、人間として真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、初めて、人間として

真に成熟した、より客観的で、より普遍的な「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。

＊　＊

旅役者の一行が到着する

――外にてラッパの吹奏が聞こえる。――

さて、ギルデンスターンは、「……おお、役者どもでございます」と言うと、ハムレットは、「……とにかく両君、エルシノアによく来てくれた。握手をしよう。さあ、歓迎には礼儀がつきもの、こうして握手をすれば、歓迎の意を表したことになる。役者たちばかり歓待すると思われては困るからな。なにしろ、彼らには盛大な歓迎を見せねばならないのだ。いや、君たちもよく来てくれた。だが、叔父なる父も叔母なる母も、大へんな勘違いをしているようだ」と言う。すると、ギルデンスターンは、「……何をでございますか？」と聞くので、ハムレットは、「……ぼくが気が狂うのは北北西の風が吹く時だけだ。南風になれば、鷹か鷺の見分けはつくのさ」と言う。（本文）

＊　＊

まず、あらためて「二人」を歓迎する。これは、最初は、自分を探りに来た「鷹」（敵）だと思っていたが、（国王からの使いで来たと素直に答えてくれたので）、今は心が打ち解け合って本来の「親友」（鷺）になったので、あらためて「二人」を歓迎するのであり、一方、彼ら（役者たち）には盛大な歓迎を見せねばならないのは、やがて、或る「劇」を演じてもらうためでもあるが、そして、「……ぼくが気が狂うのは北北西の風（北風）が吹く時だけだ。南風になれば、鷹か鷺の見分けはつくのさ」とあるのは、例えば、国王や王妃或いはポローニアス、その他、自分に探りを入れる「鷹」（敵）には「狂気を装う」が、一方、二人のように「心が打ち解け合えば」（南風になれば）、鷺（味方）には「狂気を装う」必要はなく、例えば、ハムレットの親友（学友）でもある「ホレーシオ」などには、無理に「狂気を装う必要」（警戒心）などは全くいらないのである。

――ポローニアスふたたび登場。――

さて、ポローニアスは、「……これは、これは、お二方には御機嫌よろしく」と言う。ハムレットは、「……おい、おい、二人とも、ちょっと耳を――それ、あの大きな赤ん坊はな、まだおむつをつけておるぞ」と言うと、ローゼンクランツは、「……恐らく、二度目のおむつでございましょう。年を取ると赤ん坊にかえると申しますから」と言う。ハムレットは、「……当ててみようか、きっと役者たちの到着を知らせに来たんだ。（声を張り上げて）、君の言う通りだ、月曜の朝、そうだ、あれは確かにそうだった」と言う。ポローニアスは、「……殿下、よいお知らせがございます」と言うと、ハムレットも、「……殿下、よいお知らせがございます。……その昔、ロシアスがローマで俳優だった時――」と言う。ポローニアスは、「……殿下、役者たちがまいっております」と言う。ハムレットは、「……そうか、そうか」と言うと、ポローニアスは、「……いや、まことの話で――」と言うと、ハムレットは、「……ローマの役者たち、驢馬に乗ってやって来たとさ」と言う。ポローニアスは、「……天下の名優揃いでございます。得意とするのは悲劇、喜劇、歴史劇、牧歌劇、牧歌劇的喜劇、歴史劇的牧歌劇、悲劇的歴史劇、悲喜劇的歴史劇的牧歌劇、場面の変化のあるもの、ないもの、どんな作にでも、もってこいの役者たちでございます。セネカを演じて重くならず、プラウトゥスを演じて軽くならず、台本通りでも即興でも、彼らは当代無比の名優たちでございます」と言う。ハムレットは、「……おお、

イスラエルの名判官、（娘を牲えに捧げた）エフタ殿、なんと見事な宝をお持ちのことよ！」と言う。すると、ポローニアスは、「……宝物、どのような？」と聞くと、ハムレットは、「……知れたこと、『こよなく愛でし　美わしき一人娘を』……」と言う。ポローニアスは、「……相変わらず娘のことを」と言うと、ハムレットは、「……間違ってはおらぬだろう、エフタ爺」と言う。ポローニアスは、「……私をエスタと呼ばれますなら、確かに、私にはこよなく愛する娘がございます」と言う。ハムレットは、「……いや、そう続くのではない」と言う。ポローニアスは、「……では、どう続くのでございます」と聞くと、ハムレットは、「……そりゃ、知れたこと、『神のみぞ知る運命によりて』、あとは、『ことはまさに起こるべくして起こりける』――もっとよく知りたければ、この古い歌の第一節を見てくれ。（いつまでもつき合ってはおられぬ）。それあそこへ、気晴らしの役者たちがやって来たぞ」と言うのであった。（本文）

＊　＊

　さて、ポローニアスは、二人（ローゼンクランツとギルデンスターン）を目にすると、「……これは、これは、お二方には御機嫌よろしく」と言う。一方、ハムレットは、二人を身近に寄せて、「……ちょっと耳を――それ、あの大きな赤ん坊はな、まだおむつをつけておるぞ」と言う。これはもちろん、皮肉であり、それを受けて、ローゼンクランツは、「……恐らく、二度目のおむつでございましょう。年を取ると赤ん坊にかえると申しますから」と言う。すると、ハムレットは、「……当ててみようか、きっと役者たちの到着を知らせに来たんだ。（声を張り上げて）、君の言う通りだ、月曜の朝、そうだ、あれは確かにそうだった」と言う。――これは、非常に面白い「切り替え」場面であり、二人（味方）には「正気」で対応し、一方、ポローニアス（探りを入れる敵）には、むしろ「狂気を装う」という「対応の仕方」に瞬時に切り替えているのである。そして、ポローニアスは、「……殿下、よいお知らせがございます」と言うと、ハムレットも、「……殿下、よいお知らせがございます。……その昔、ロシアスがローマで俳優だった時――」とからかうように言う。ポローニアスは、「……殿下、役者たちがまいっております」と言うと、ハムレットは、「……そうか、そうか」と言う。ポローニアスは、「……いや、まことの話で――」と言うと、ハムレットは、「……ローマの役者たち、驢馬に乗ってやって来たとさ」と言う。――これらは、相手をからかうような口調で「狂気を装う」という「対応」の仕方になっているのかも知れない。

　すると、ポローニアスは、「……天下の名優揃いでございます。得意とするのは悲劇、喜劇、歴史劇、牧歌劇、牧歌劇的喜劇、歴史劇的牧歌劇、悲劇的歴史劇、悲喜劇的歴史劇的牧歌劇、場面の変化のあるもの、ないもの、どんな作にでも、もってこいの役者たちでございます。セネカを演じて重くならず、プラウトゥスを演じて軽くならず、台本通りでも即興でも、彼らは当代無比の名優たちでございます」と言う。これは、いわば名調子であり、ハムレットも、「……おお、イスラエルの名判官、（娘を牲えに捧げた）エフタ殿、なんと見事な宝をお持ちのことよ！」と言う。すると、ポローニアスは、「……宝物、どのような？」と聞くと、ハムレットは、「……知れたこと、『こよなく愛でし　美わしき一人娘を』……」と言う。ポローニアスは、「……相変わらず娘のことを」と言うと、ハムレットは、「……間違ってはおらぬだろう、エフタ爺」と言う。ポローニアスは、「……私をエスタと呼ばれますなら、確かに、私にはこよなく愛する娘がございます」と言う。

ハムレットは、「……では、どう続くのでございます」と聞くと、ハムレットは、「……そりゃ、知れたこと、『神のみぞ知る運命によりて』、あとは、『ことはまさに起こるべくして起こりける』――もっとよく知りたければ、この古い歌の第一節を見てくれ」と言うのであった。

さて、この「台詞」の中の「エフタ」というのは、旧約聖書『士師記』に出て来る登場人物であり、イスラエルの「士師」（裁き人・指導者）であって、その内容は、次のようなものである。つまり、……エフタは、アンモン人との戦争を前にし、神に誓願を立てて言うのであった。それは、……もし主（ヤーヴェ）がアンモン人を私の手に渡して下さるなら、勝って家に帰る時、わが家の戸口で私を出迎える者を主（ヤーヴェ）への燔祭（牲え）として捧げます」と祈願するのである。そして、……彼がアンモン人との戦いに勝利して家に帰ると、彼の一人娘が祝賀の踊りを踊りながら彼を出迎えるのであった。エフタは、……その予期していなかった出来事に打ちのめされるが、娘の申し出の二ヶ月間の猶予の後、エフタは、主（ヤーヴェ）への誓約通り、娘を燔祭（牲え）として捧げることになるのである。――これは、恐らく、ハムレットの前に、娘（オフィーリア）を放って、ハムレットの「反応」を見ようとしているポローニアスの「思惑」に対して、ハムレットは、エフタと同じように、こよなく愛する「一人娘」を犠牲（牲え）にしようとしていると見ているのかも知れない。それはともかく、次の展開として、「……それあそこへ、気晴らしの役者たちがやって来たぞ」となるのである。

――四、五人の役者たちが登場する。――

ハムレットは、「……いや、みんな、よく来てくれた。みんな元気そうで、なによりだよ。ほんとうによく来てくれた。やあ、おまえか！　その髭でわからなかった。さては自慢の髭を見せつけておれを卑下させようというのだな？　やあ、うら若きご婦人ではないか！　この前、お目にかかった時よりも、婦人靴の踵の高さほど、頭が天に近づいたようだな。（これは女形の少年俳優であり）、この上は声変わりせぬよう祈るぞ。ひび割れた声は、ひび割れた金貨が価値を失うように、ご婦人の大事なところをひび割らせてしまうからな。ほんとうにみんなよく来てくれた。さあ、目についたものはなんにでも飛びつくフランスの鷹匠のように、早速飛びつきたい、なにかさわりを一くさり聞かせてくれ。激しく胸を打つ場面がいいな」と言う。すると、役者は、「……どれにいたしましょう？」と聞くので、ハムレットは、「……ほら、いつか聞かせてくれた場面があったな。たしか上演されてはいないはずだが、されたとしても一回限りだろう。あれは、大衆には受けない芝居で、猫に小判、俗人にはキャビアで高級過ぎたのだ。だが、あれはいい芝居だった。ぼく以上に権威のある劇評家たちもそう言っていた。各場面もよく練られていて、気が利いているし、それでいて度を過ごさず、だれかも言っていたが、味を良くしようと薬味を利かせ過ぎるところもないし、作者の気どった嫌みで鼻につくような文句もなく、手がたい方法というか、こころよくもあり健全でもあり、技巧な美よりは自然の美を感じさせるものだった。そのうちの一節でいちばん気に入ったのは、イーニアスがダイドーに物語る場面だ。ことに、プライアム王の最期を語るあたりだよ。まだ覚えているなら、あの辺のところから初めてくれ給え。そうだ。待ってくれよ。ええと、そうだ。「……荒武者ピ

ラス、あたかも怒れる猛虎のごとく、ピラスは……」――いや、そうじゃない。ピラスから始まって――と言いながら、次のような「台詞」を一くさり語るのであった。（本文）

＊　＊

　さて、今度は、ハムレットが到着した旅役者たちに活発に話しかける場面であるが、それは、「……いや、みんな、よく来てくれた。みんな元気そうで、なによりだよ。ほんとうによく来てくれた。やあ、おまえか！　その髭でわからなかった。さては自慢の髭を見せつけておれを卑下させようというのだな？　やあ、うら若きご婦人ではないか！　この前、お目にかかった時よりも、婦人靴の踵の高さほど、頭が天に近づいたようだな。この上は声変わりせぬよう祈るぞ。とにかく、みんなほんとうによく来てくれた」というように、親しく話しかけては、「……早速、何かさわりを一くさり聞かせてくれないか？」と言うと、役者は、「……どれにいたしましょう？」と聞くので、ハムレットは、「……ほら、いつか聞かせてくれた場面があったな。たしか上演されてはいないはずだが、されたとしても一回限りだろう。あれは、大衆には受けない芝居であるが、あれはいい芝居だった。……各場面もよく練られていて、気が利いているし、それでいて度を過ごさず、味を良くしようと薬味を利かせ過ぎるところもないし、作者の気どった嫌みで鼻につくような文句もなく、手がたい方法というか、こころよくもあり健全でもあり、技巧な美よりは自然の美を感じさせるものだった。そのうちの一節でいちばん気に入ったのは、イーニアスがダイドーに物語る場面だ。ことに、プライアム王の最期を語るあたりだよ」と言う。

　例えば、作者（シェイクスピア）という人にとっては、次のような「芝居」がいわば優れたものと見ているのである。つまり、「……あれは、大衆には受けない芝居であるが、あれはいい芝居だった。……各場面もよく練られていて、気が利いているし、それでいて度を過ごさず、味を良くしようと薬味を利かせ過ぎるところもないし、作者の気どった嫌みで鼻につくような文句もなく、手がたい方法というか、こころよくもあり健全でもあり、技巧な美よりは自然の美を感じさせるようなものだった」と言うのである。それに続けて、ハムレットは、「……そのうちの一節でいちばん気に入ったのは、イーニアスがダイドーに物語る場面だ。ことに、プライアム王の最期を語るあたりだよ」と言うが、これは、むろん、ハムレット（或いは作者）というのは、意識的に「復讐劇の芝居」を選んでいるのであり、そして、ハムレットは、次のような「台詞」を一くさり語るのである。

　それは、「……荒武者ピラス、黒き心を――木馬の腹の闇にも似た――黒き鎧にて包しが、今や恐ろしき黒き全身がさらに凄まじい全身、頭からつま先まで、くまなく朱に染まりたり。これぞ炎に焼かれし父、母、子らの血潮、燃える火の手は容赦なく、王の死出の旅を照らし出す。悪鬼のごときピラス、憎悪の火に身を焦がし、両眼をらんらんと輝かせて、老王プライアムの姿を求めたり」と暗唱し、あとは、役者に「先を続けてくれ！」と言うと、ポローニアスは、「……殿下、めりはり、勘どころ、おみごとでした」と言うのであった。――さて、今度は、一人の役者が、朗々と役を演じきることになる。……

　それは、「……やがてピラス、老王を見出しぬ。折しも老王懸命に、ギリシアの軍勢に向かい、剣を振るいたるも、力なき腕は、ついに剣を取り落とす。この機を逃さじとピラス、駆け寄りて、必殺の一撃、その激しき太刀風に、王はよろめき倒れたり。その時、炎に包まれし城は、この一撃に感じてか、耳をつんざく轟音とともに、地上に崩れ落ちたり。

老王の上にかざしたる剣も宙に凍りつき、描かれし猛将さながら、ピラスは唖然とその場に立ち尽くす。これぞ嵐の前の静けさ。天は黙し、雲も動きを止め、烈風も音をなくして、大地もまた死の静寂に沈みし時、突然、雷鳴とどろきたり。不動のピラス、憎悪も新たに切りかかる、軍神マルスの鎧を鍛えしキュクロプスの鉄槌も、かくやという激しさにて、老王の上に剛剣が！　……去れ、去れ、運命の女神よ。おお、神々よ、この女神の力を奪いたまえ。運命の糸車を打ちくだき、天下の峰より奈落の底に投げ捨てたまえ」と、語るのであった。（本文）

＊　＊

まず、「ピラス」（「ネオプトレモス」）という人物は、古代ギリシア神話の英雄アキレスの息子であり、彼は、トロイア戦争の時、有名な「トロイの木馬」の中に隠れていた決死隊の一人でもあり、そして、英雄アキレスという人物は、トロイのプライアム王の息子パリスの弓矢の矢でアキレス腱を打たれて、瀕死の重傷を負って倒れながらも、なおも戦い続けるが、やがて、非業の死を遂げるのである。それゆえ、「ピラス」（「ネオプトレモス」）という人物にとっては、老王プライアムとその息子パリスは、まさに「父親の敵」になるのである。そして、今、まさに「ピラス」（「ネオプトレモス」）という人物は、父親（アキレス）の「敵討ち」を果たそうと、猛然と「老王プライアム」に襲いかかっている場面であり、これは、当然、ハムレット（或いは「作者」）にとっては、先王（父親）の「敵討ち」とも重ね合わせて、意識的に「復讐劇の芝居」を選んでいるのである。

それでは、その叙事詩の「内容」を見てみたいと思うが、それは、次のようなものである。まず、「……荒武者ピラスは、黒き心（復讐心）を、まるで木馬の中の闇のような、真っ黒な鎧で包んでいた」が、今やその恐ろしい黒き全身がさらに凄まじい全身、つまり、頭からつま先まで、くまなく朱に染まりたり（つまり「全身血で真っ赤に染まっている」）状態であり、これぞ（これらは）炎（戦火）に焼かれ（殺された）父、母、子らの血潮、燃える火の手は容赦なく（あちこちで燃え上がる火の手《戦火の炎》は容赦なく）、王の死出の旅を照らし出す（つまり「老王プライアムを死へと追い詰めていく」）のである。悪鬼のごときピラスは、憎悪（復讐）の火に身を焦がし、両眼をらんらんと輝かせて、老王プライアムの姿を求めたり（何処に居るのだと、老王プライアムの姿を探し回った）ということである。ハムレットは、ここまで声を出して「暗唱」すると、役者に「先を続けてくれ！」と言い、今度は、一人の役者が、朗々と役を演じきることになる。

それは、「……やがてピラスは、老王を見つけ出す。折しも（丁度その時）、老王は、懸命にギリシアの軍勢に立ち向かい、剣を振うっていたが、力なき腕は、ついに剣を下に落としてしまう。この機会を逃すまいとピラスは、駆け寄って、必殺の一撃の、その激しい太刀風に、老王はよろめき倒れてしまう。その時、炎に包まれていたトロイアの城は、この一撃を感じてか、耳をつんざく轟音とともに、地上に崩れ落ちてしまう。それに驚き、老王の上にかざした剣も宙に凍りつき、描かれた猛将さながら、ピラスは唖然とその場に立ち尽くしてしまう。（一瞬動きが止まってしまう）。これぞ嵐の前の静けさ。天は黙し、雲は動きを止め、烈風も音をなくして、大地もまた死の静寂に沈んだ時、突然、雷鳴がとどろいて、不動のピラスは、はっとわれを取り戻し、再び、憎悪（憎しみ）も新たに老王に切りかかる、軍神マルスの鎧を鍛えて作り出したキュクロプスの鉄槌（かなづち）も、さぞかしこうであろうという激しさで、老王の上に剛剣が（振り下ろされようとしている）、

ああ、去ってくれ、去ってくれ、運命の女神（死をもたらす女神）よ、おお、神々よ、この女神（死をもたらす女神）の力を奪いたまえ。運命の糸車（運命を紡ぐという糸車）を打ち砕いて、天下の峰より奈落の底に投げ捨ててくれ給え」と語るのであった。

　すると、ポローニアスは、「……少し長過ぎますな」と言うと、ハムレットは、「……（長過ぎるなら）床屋にでも刈ってもらえ」と言い、「……続けてくれ、笑い話か色話以外は居眠りをする男だ（興味のない男だ）。さあ、今度はヘキュバのくだりを」と言う。――役者は、続けて朗々と語り続ける。「……哀れなりしは、面を包みし妻ヘキュバ」と語ると、ハムレットは、「……面を包みし……か」と言い、ポローニアスは、「……面を包みしとはいい」と言う。――さて、役者は、また朗々と語り始める。それは、「……素足のままに逃げまどい、炎も消えよと涙の雨、昨日まで王冠を敷きし頭には一辺のぼろ切れ、あまたの王子を生みし、その腰にまとうは、わずかに毛布一枚。この妃の姿を見るもの、誰か激しき言葉にて、運命の女神を呪わざらん。神々よ、妃の嘆きをご照覧あれ！　ピラスの残虐な剣先が、眼前にて夫の五体を切り刻む。悲痛なる叫びを耳にしたまわば、神々もまた心を動かし、天の星を涙に濡らしたまわん」と語るのであった。（本文）

＊　＊

　さて、今度は、「妻」（ヘキュバ）のくだりであり、「……哀れなのは、顔を包み隠した妻（ヘキュバ）であり、素足のままで逃げまどい、炎も消えよと目に大量の涙の雨を降らし、昨日まで王冠を敷きし頭には一辺のぼろ切れのみ、数多くの王子を生み出した、その腰にまとうは、わずかに毛布一枚だけである。この妃の姿を見るものは、誰か激しい言葉を以て、運命の女神を呪わないだろうか？　神々よ、妃の嘆きをご照覧あれ！（御覧あれ！）、ピラスの残虐な剣先は、妻の目の前で「夫の五体」を切り刻む。ああ、妻の「悲痛なる叫び」を耳にしたならば、神々もまた心を動かし、天の星を涙に濡らすであろう」と語るのである。

　すると、ポローニアスは、役者の表情を見て「……おお、あのように顔色を変えて、目に涙まで浮かべている。お願いだ、その辺で終わりにしてくれ」と言う。ハムレットも、「……もうよい、そこまでにしよう。残りはいずれ聞かせてもらおう。ポローニアス、この役者たちを手厚くもてなしてくれ、いいな、手厚くだぞ。役者とは時代の縮図、手っ取り早い年代記だ。死んでから墓碑銘にどんな悪口を書かれるよりも、生きている間は、この連中に悪い評判を立てられないようにしたほうがましだ」と言う。ポローニアスは、「……かしこまりました、このものたちには相応なあつかいを」と言うと、ハムレットは、「……なにを言う。もっと十分にもてなしてやれ。相応の扱いを受けるならば、人間だけだって鞭をまぬがれまい。おまえのそのりっぱな身分相応のあつかいをしてやるのだ。連中にそれだけの値打ちがなければ、それだけお前の親切が値打ちを持つことになろう。案内を頼む」と言う。ポローニアスは、「……ではこちらへ」と案内する。ハムレットは、「……では、ついていき給え。芝居はあす見せてもらうよ。（座頭をとめて）、ちょうと話がある。君は『ゴンザーゴ殺し』を演じられるか？」と聞く。すると、役者は、「できます」と答える。ハムレットは、「……明日の晩それをやってもらいたい。それに十五行ほど必要な台詞をつけ加えたいが、覚えられるだろうか？」と聞くので、役者は、「……もちろ

んです」と言う。(この時、ポローニアスおよび俳優たちは退場する)。ハムレットは、「……よし、では、彼の後をついて行ってくれ給え。だが、爺さんをからかってはいけないよ」と言い、(役者退場、ローゼンクランツおよびギルデンスターンに向かい)、ハムレットは、「……やあ、失礼、夜にもまた会おう。ま、ようこそこのエルシノアへ」と言う。ローゼンクランツは、「……それでは、これで」と言い、二人(ローゼンクランツとギルデンスターン)は退場するのであった。(本文)

＊　＊

さて、ポローニアスは、役者の表情を見て「……おお、あのように顔色を変えて、目に涙まで浮かべている。お願いだ、その辺で終わりにしてくれ」と言い、ハムレットも、「……もうよい、そこまでにしよう。残りはいずれ聞かせてもらおう。ポローニアス、この役者たちを手厚くもてなしてくれ、いいな、手厚くだぞ。役者とは時代の縮図、手っ取り早い年代記だ。死んでから墓碑銘にどんな悪口を書かれるよりも、生きている間は、この連中に悪口を言われないようにしたほうがましだ」と言う。ポローニアスは、「……かしこまりました、このものたちには相応なあつかいを」と言うと、ハムレットは、「……なにを言う。もっと十分にもてなしてやれ。相応の扱いを受けるならば、人間だれだって鞭をまぬがれまい」と言う。――この「……(もし人間が)相応の扱いを受けるならば、人間だれだって鞭をまぬがれまい」というのは、それだけ人間は誰でも多かれ少なかれ「罪深い存在」であって、それゆえ、「罪のない人間」など一人もいないということである。そして、ハムレットは、「……おまえのそのりっぱな身分相応のあつかいをしてやるのだ。連中にそれだけの値打ちがなければ、それだけお前の親切が値打ちを持つことになるだろう。案内を頼む」と言う。――ハムレットが、旅役者たちを優遇するのは、その「旅役者」たちに大事な「芝居」を演じてもらうためであり、その「芝居」こそは、まさに「先王殺害を模した芝居」であり、そのために、(座頭をとめて)、「……ちょうと話がある。君は『ゴンザーゴ殺し』を演じられるか？」と聞くと、役者は、「できます」と答える。ハムレットは、「……明日の晩それをやってもらいたい。それに十五行ほど必要な台詞をつけ加えたいが、覚えられるか？」と聞くと、役者は、「……もちろんです」と言う。これによって、ハムレットは、国王や王妃が、その「芝居」(つまり「先王殺害を模した芝居」)を観ることで、どのような「反応」を示すかを見ようとしているのである。――つまり、先王の「亡霊」が、「……自分は毒ヘビに噛まれて死んだのではなく、実は、現国王(実の弟)に、昼寝をしている時に、耳から劇薬を流されて殺されてしまったのだ」と言っていたが、それは、果たして、ほんとうのことなのかどうか？　それを確かめるための極めて大事な「芝居」であり、だからこそ、その「芝居」を演じてくれる「旅役者」たちをできるだけ優遇しようとしているのである。そして、ハムレットは、その(座頭の)役者をはじめ、二人(ローゼンクランツとギルデンスターン)とも別れのあいさつをし、一人になるのである。

さて、ハムレットは、「……では、これで、……やっと一人になれた。ああ、おれはなんと臆病な卑劣感なのだ。さっきの役者を見ろ！　たかが作り話、そのいつわりの情熱に酔い、魂を絵そらごとに委ねていた。そして、顔は青ざめ、目には涙、頬はひきつり、声もかすれて、からだ全体の一挙一動が心に想い描く人物になりきっていた。なんのために、

なんの理由もありはしない。ただヘキュバのためか！　だが、ヘキュバはあの男にとってなんなのだ？　また、おの男はヘキュバにとってなんなのだ？　泣くほどの理由があるのか？　若しもあの男にこのおれほどの情熱をかきたてる動機があれば、何をしでかすか？

　舞台を涙でひたし、恐ろしい台詞で観衆の耳をつん裂くだろう。罪あるものを狂わせ、罪なきものをぞっとさせ、無知なるものを驚かせ、見物人の目と耳を奪って唖然とさせるだろう。しかるにおれはどうだ。ぐずで愚鈍な怠け者だ。大事を果たそうともせず、あの王のことさえも何も言えない。王位も妃も大事な生命さえも残忍非道に奪われた国王のためにさえ何も出来ないでいる。おれは卑怯者か？　誰だ、俺を悪党と呼ぶのは？　誰だ、俺の頭をぶち割り、髭を抜いて、この顔にふきつれるのは？　誰だ、俺を大嘘つきと激しく罵るのは？　そんな無礼を働くやつは？　ええ、なんと言われようとも文句は言えぬ。俺はハトのように気弱で、屈辱を苦々しいと思う勇気さえ欠けているのだ。そうでなければ、いま頃はもうあの悪党の屑肉で大空のトンビを肥やしていたはずだ。あの残忍で好色の悪党め、情け知らずの恩知らずの女たらしの悪党め！　ああ、復讐よ！　ああ、なんたる阿呆か、このおれは、最愛の父親を殺され、天も地もこぞって父の仇を討てと言っているのに、淫売婦のようにただもう憂さ晴らしに胸の思いを吐き散らし、性悪女のように口汚くわめき立てているだけだ。なんたるざまだ。しっかりしろ、そうだ、思い出したぞ、犯罪者が芝居を見ているうちに、巧みな筋立てにすっかり恐れをなし、悪事を自供するという。たとえ人殺しに自ら語る舌はなくとも、不思議と口を割って漏らしてしまうものだ。あの叔父の前で国王殺害の一幕を演じさせよう．少しでもひるんだら、それで決まりだ。あの亡霊は、悪魔の化身かもしれない、人の心に入りこむ。あるいは俺の心の弱さにつけ込んで、この時とばかり俺を欺き、地獄に落とす魂胆かも知れぬ。もっと確かな証拠をつかみたい。それには芝居だ。王の本心をきっととらえてみせよう」と言うのであった。（本文）

＊　　＊

　さて、ハムレットは、やっと一人になって、自問自答を始めるのである。それは、次のようなものである。つまり、「……ああ、おれはなんと臆病な卑劣感なのだ。さっきの役者を見ろ！　たかが作り話、そのいつわりの情熱に酔い、魂を絵そらごとに委ねていた。そして、顔は青ざめ、目には涙、頬はひきつり、声もかすれて、からだ全体の一挙一動が心に想い描く人物になりきっていた。なんのために、なんの理由もありはしない。ただヘキュバのためか！　だが、ヘキュバはあの男にとってなんなのだ？　また、あの男はヘキュバにとってなんなのだ？　泣くほどの理由があるのか？」とある。――まず、ここまでを見てみたいと思うが、ハムレットは、役者の迫真に迫る演技を見て、からだ全体の一挙一動が心に想い描く人物になりきっていた。しかし、それは、一体、何のためかと問えば、それは、むろん、一般的には、見ている人たちを「感動」させたり「喜ばせたり」するためであり、それによって得られる「評判や人気」などによって、自分自身の「存在」も高く評価されるようになると共に、最終的には、それがまた「収益」にもつながるからである。しかし、ハムレットが問いかけているのは、むろん、そういうことではなく、たかが「作り話」、たかが「絵空事」に、なぜ、あれほどの「情熱が持てる」のかということであり、そして、たかが「作り話」、たかが「絵空事」に、あれほどの「情熱が持てる」のであれば、実際の「父親殺し」の「敵討ち」であってみれば、もっともっと凄まじい迄

の「情熱が持てて」いて、当然ではないか！　それなのに、このおれはと続くのである。

＊

さて、ハムレットは、「……若しもあの男にこのおれほどの情熱をかきたてる動機があれば、何をしでかすか？　舞台を涙でひたし、恐ろしい台詞で観衆の耳をつん裂くだろう。罪あるものを狂わせ、罪なきものをぞっとさせ、無知なるものを驚かせ、見物人の目と耳を奪って唖然とさせるだろう」。――それに比べて、このおれはと続くのである。それは、「……しかるにおれはどうだ。ぐずで愚鈍な怠け者だ。大事を果たそうともせず、あの王のことさえも何も言えない。王位も妃も大事な生命さえも残忍非道に奪われた国王のためにさえ何も出来ないでいる。おれは卑怯者か？　誰だ、俺を悪党と呼ぶのは？　誰だ、俺の頭をぶち割り、髭を抜いて、この顔にふきつれるのは？　誰だ、俺を大嘘つきと激しく罵るのは？　そんな無礼を働くやつは？　ええ、なんと言われようとも文句は言えぬ。俺はハトのように気弱で、屈辱を苦々しいと思う勇気さえ欠けているのだ。そうでなければ、いま頃はもうあの悪党の屑肉で大空のトンビを肥やしていたはずだ。あの残忍で好色の悪党め、情け知らずの恩知らずの女たらしの悪党め！　ああ、復讐よ！　ああ、なんたる阿呆か、このおれは、最愛の父親を殺され、天も地もこぞって父の仇を討てと言っているのに、淫売婦のようにただもう憂さ晴らしに胸の思いを吐き散らし、性悪女のように口汚くわめき立てているだけだ。なんたるざまだ。しっかりしろ」となるのである。――それは、まさに「……口先ばかりで、一向に実行が伴わない」からであり、大事だと思うことは、まさに「実践されて初めて意味を持つ」ものなのである。……

＊

そして、最後は、「……そうだ、思い出したぞ、犯罪者が芝居を見ているうちに、巧みな筋立てにすっかり恐れをなし、悪事を自供するという。たとえ人殺しに自ら語る舌はなくとも、不思議と口を割って漏らしてしまうものだ。あの叔父の前で国王殺害の一幕を演じさせよう。少しでもひるんだら、それで決まりだ。あの亡霊は、悪魔の化身かもしれない、人の心に入りこむ。あるいは俺の心の弱さにつけ込んで、この時とばかり俺を欺き、地獄に落とす魂胆かも知れぬ。もっと確かな証拠をつかみたい。それには芝居だ。王の本心をきっととらえてみせよう」と言うのであった。（本文）

＊

さて、ハムレットは、感情に振り回されている状態から、しっかりしろ、よく頭を働かせて考えるのだということで、「……そうだ、思い出したぞ、犯罪者が芝居を見ているうちに、巧みな筋立てにすっかり恐れをなし、悪事を自供するという。たとえ人殺しに自ら語る舌はなくとも、不思議と口を割って漏らしてしまうものだ。あの叔父の前で国王殺害の一幕を演じさせよう。少しでもひるんだら、それで決まりだ。あの亡霊は、悪魔の化身かもしれない、人の心に入りこむ。あるいは俺の心の弱さにつけ込んで、この時とばかり俺を欺き、地獄に落とす魂胆かも知れぬ。もっと確かな証拠をつかみたい。それには芝居だ。王の本心をきっととらえてみせよう」と言うのであった。――つまり、先王の「亡霊」が、「……自分は毒ヘビに噛まれて死んだのではなく、実は、現国王（実の弟）に、昼寝をしている時に、耳から劇薬を流されて殺されてしまったのだ」と言っていたが、それは、果たして、ほんとうのことなのかどうか？　もしかしたら、「……あの亡霊は、悪魔の化身かもしれない、人の心に入りこむ。あるいは俺の心の弱さにつけ込んで、この時とばか

り俺を欺き、地獄に落とす魂胆かも知れない」。――だからこそ、もっと「確かな証拠」がほしいのである。そのためには、まさに「芝居」（つまり「先王殺害を模した芝居」）だ。それを国王や王妃に観せて、その時、彼らがどのような「反応」（顔の表情）をするかを見極めることだ。そうすれば、国王の『本心』をきっと捉えることができ得るだろう」ということである。（第二幕第二場・終了）

＊　　　＊

（第三幕へと続く。）

「参考文献」

※底本「ハムレット」市河三喜・松浦喜一訳（「岩波文庫」）
※底本「ハムレット」福田恆存訳（「新潮文庫」）
※底本「ハムレット」小田島雄志訳（「白水Uブックス」）